ヒューマンケアにおける
重層的スーパービジョンのシステム構築

平成 26 年度～平成 30 年度　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

研　究　成　果　報　告　書

令和元年５月

学校法人名　日本福祉大学
大　学　名　日本福祉大学
研究組織名　スーパービジョン研究センター
研究代表者　田中千枝子
（社会福祉学部・教授）

日本福祉大学 スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

挨拶　日本福祉大学スーパービジョン研究センター５年の成果を振り返る

スーパービジョン研究センター長　田中千枝子

日本福祉大学スーパービジョン研究センターは、平成26年度に文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の指定を受け、日本福祉大学に設置されました。

我が国のこの 5 年は支援専門職の発展期にとって重要な変化が生じた時となりました。ヒューマンケアの分野において、対人支援に携わる人たちの立場や種類、支援方法などが、専門職・準専門職・非専門職を問わず多彩になってきました。その人々の支援・ケアの質を担保する社会的要請が高まり、教育的・支持的・管理運営的な支援者支援策としてのスーパービジョンが、大きく脚光を浴びるようになってきました。またそれぞれの「支援」の専門性に基づいて、実践の振り返りや支援システム・体制開拓、そしてそれらの理論化に寄与する研究や教育活動が進められてきました。

この流れで研究拠点としての当研究センターも、学内外の各領域・グループのメンバーの研究参加と貢献をもって、ヒューマンケアに関する全国の研究および実践体制の充実・強化、スーパービジョン文化の新たな醸成等に寄与してきたと自負しております。この成果をもって、今後も日本福祉大学スーパービジョン研究センターとしての諸活動の発展展開を図っていきたいと思います。

この 5 年の研究活動の成果を振り返り、新たな今後のセンターの研究活動の源といたしたく、本報告書を提出することにしました。ぜひ今までの研究群と成果を皆様と共有し、今後の研究の方向性について検討しあえるものとなりますよう、お手に取っていただきさらに議論等にご参加いただきますようお願い申し上げます。

令和元年 5 月

目次

挨拶・・	1
1.研究全体のまとめ・・・	3
2.基礎理論・・・	11
3.ソーシャルワーク・・・	21
4.ソーシャルケア・・・	33
5.権利擁護支援・・・	49
6.法人マネジメント・・・	67
7.研究業績一覧・・・	85
8.資料・・	97

１　研究全体のまとめ

日本福祉大学
スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

研究全体のまとめ

センター長　田中千枝子

１．スーパービジョン研究の背景

（１）社会問題の複雑化・複合化

少子高齢社会の進行、経済的停滞、人口減社会を迎えた人口集中と過疎の両極化による地域課題の分散、国民の価値意識の多様化などにより、社会問題や生活問題は複雑化・複合化している。それに伴い新たなヒューマンケアの在り方が問われている。医療や福祉に代表されるヒューマンサービスが、専門職による社会施設内完結型から、地域に舞台を開放し、多様な立場や視点による複数の専門職非専門職の連携型で対応することが必要とされるようになった。

（２）制度の硬直化・制度疲労から新たな制度枠組みの設定

従来の福祉六法に代表される対象別保護制度では対応しきれない問題や課題が山積し、新たな制度への変換期となった。対象別支援の個別保護の限界から地域における総合的支援の必要性が強調されるようになった。地域包括ケアシステムの確立、多職種連携などで地域を支える仕組みや技術が必要とされた。また若者支援や子育て支援、生活困窮者支援など新たな対象や範囲が広がった。そして個人にとどまらず世帯への支援の新たな制度は、保護から自律、自立就労などを目的に、地域生活に関わるヒューマンケアの支援職の責任と役割を明示するものとなっている。

（３）既存の専門性の揺らぎと新たな支援文化の醸成

高齢者に対して介護保険で介護支援専門員制度ができ、地域包括支援センターが地域相談の拠点となり、そこに相談専門職が設置され、地域事業所のケアマネジャーに対して困難事例をスーパービジョンする主任ケアマネジャーの制度が定着してきた。このことは同時に今まで既存の相談職との連携が必要とされその役割や関係性が問われる事態となった。施設・病院内ケアを主に個別支援の専門家として位置づけられていた支援職が、地域医療や福祉を意識した支援をイメージすることが求められるようになった。地域の支援職としてさらにNPOやボランティアなどの活動が盛んになり、認知症サポーターなど専門性の高さを問われるよりも、絆や仲間

などの精神性が求められる要素も出てきた。意思決定支援などの当事者の意思や意向を中心に支援を組み立てる必要性などが強調されるようになった。そこには既存の支援職の在り方への疑問や批判などの揺らぎを含めて、地域丸ごと支援の体制や枠組みが再度問われる事態となってきた。そうした支援への幅広い要求にこたえることに対して、バーンアウトが心配され、離職率の高さも問題にされるようになった。

（４）協働・連携によるメゾレベルの支援体制整備に対する技術的対応

新たな支援職や支援体制を求めてチームやシステム・ネットワーク等メゾレベルの協働・連携活動が重要課題となってきた。この当事者を中心とした新たな支援職も参加した支援体制づくりとして、多職種連携チーム実践・地域包括ケアシステム会議、伴走型支援、診療ネットワーク、地域連携会議、総合相談体制づくりなど、地域や組織においてメゾレベルに対する連携技術や体制づくりの技術的指導と対応が必要となってきた。

２．スーパービジョン研究センターの方向性

こうした対人支援の新たな局面において、スーパービジョンの意味合いが変化していくのではないかとの予測をもって、以下スーパービジョン研究センターの方針を設定した。

⑴ スーパービジョンの再定義に関する基礎的研究を行う。

⇒『支援者支援』を核とする

⑵ ソーシャルワークを中心にして、ケアマネジメント、ソーシャルケアさらにヒューマンケア等支援職全体を視野に置く。

⑶ スーパーバイザーとスーパーバイジーの関係もホモ（同職種）型だけでなく、ヘテロ（異職種）型を排除せず、専門性や領域を超え、普遍性をもつものととらえる。

⑷ 多様な相談支援のケアの領域ごとに行われている、スーパービジョンの実態を踏まえる。

⑸ 実践と理論の相互作用性、良循環を基盤として研究を行う。

⑹ スーパーバイジー＝スーパーバイザー関係による支援のミクロレベルから、その関係を支える組織や地域のメゾレベルのマネジメント・システム構築に展開する。

⑺ 包括的重層的開放型のスーパービジョン・システム構築を目指す。

⑻ 現代に合致したスーパービジョン文化の醸成に寄与する知見を生み出す。

⇒これらによって、研究拠点「場」としてのスーパービジョンセンターを創造する。

３．スーパービジョンセンター拠点運営の体制と研究班の活動

（１）恒常的研究拠点としてのスーパービジョン研究センターの設置

スーパービジョン研究センターを日本福祉大学大学院　名古屋キャンパス 7 階に活動拠点として配置した。なお、本センターは今後も日本福祉大学重点センターの1つとして機能予定である。

（２）日本福祉大学既存の研究センターや研究会、研究グループ等からのメンバーの複合・重複的参加（権利擁護研究センター・地域ケア研究推進センター・質的研究会・提携社会福祉法人等）

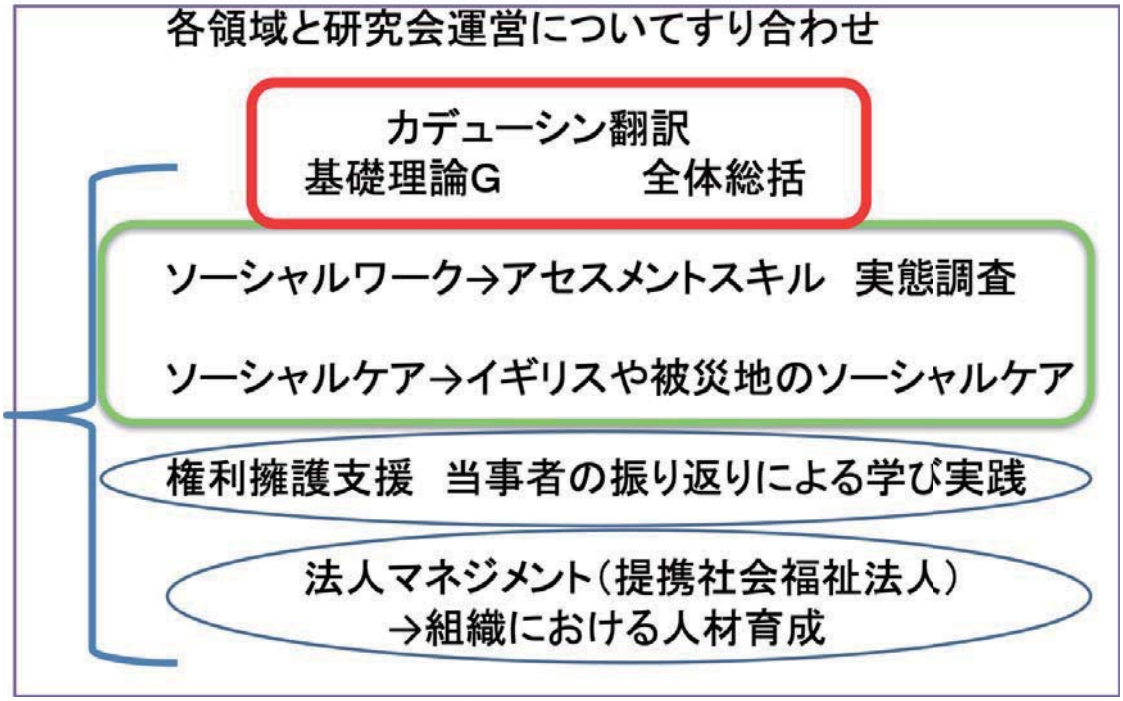
（３）５つの研究グループによる分担と統合

日本福祉大学学内および学外の研究メンバーを集めて研究グループを構成した。構成内容や活動内容については以下の通りである。

A)概念・研究枠組み　基礎研究班（リーダー：田中千枝子）
B)ソーシャルワーク班（リーダー：大谷京子）
C)ソーシャルケア班（リーダー：野村豊子）
D)権利擁護支援班（リーダー：湯原悦子）
E）法人マネジメント班（リーダー：田中千枝子）

⇒班ごとのグループリーダーごとに研究調査プロジェクトの運営
⇒2月に１回程度の全体研究会：各班の進捗状況の発表と確認　研究助言・検討
⇒班ごとの研究成果の作成：研修プログラムや教材 CD-ROM 作成、出版や論文発表の共有

４．研究体制とコラボレーションの構造



（図）研究体制とコラボレーション

A）基礎理論班では、学内外の研究者 10 名のメンバーが、スーパービジョンの古典を下敷きに、最新のスーパービジョン状況を訳すことで、ソーシャルワークのスーパービジョンの基礎的認識を研究会メンバー全体で認識した。また近年のソーシャルワーク理論を背景に書かれているものであり、人と環境の交互作用をスーパービジョンの実際に適用して考えていくことが分かった。また古典的3機能と評価の関係、スーパーバイザー・スーパーバイジーの関係性、組織や部署やグループを使ったメゾレベルのスーパービジョンのあり様など、自分の研究に振り替えて学ぶものは多くあった。

また最初の1～2年は交流会勉強会としてスーパービジョンの認識を、共通理解の促進として全体運営の核とした。3 年目からは人材養成の本を出版し、またカデューシンの枠組みで、研修会のプログラムを開発した。「ケアカンファレンスでスーパービジョンを」や「元気になるスーパービジョン」や「スーパーバイザーのためのスーパービジョン入門」など研修プログラム開発を行った。

4年目5年目ではカデューシンのスーパービジョンを、日本の現場のスーパーバイザーに対し

て実際に則して伝えるような本の出版のため、実践現場のスーパーバイザーたちから事例を挙げてもらい、その分析における論文投稿や原稿作成を支援した。

B)ソーシャルワーク班では日本におけるスーパービジョン実践者を対象に、スーパービジョンの体制(システム)とスキル選択と発揮のプロセスの実態を把握し、評価方法につながる今後の研究の在り方を探った。具体的には県内のソーシャルワークのスーパービジョン研究会の協力のもと、その体制の作り方とアセスメントスキルの探求を行い、スキルの特徴およびその評価指標、スーパービジョンセッションのチェックリストを抽出し、整理した。

またソーシャルワーカーに対するスーパーバイザー養成に関わる教材として、面接技術としてのシステム論とSFAに関わる CD-ROM 作成を愛知県 MSW 協会と共同で作成し、それを基にした研修会を開催した。

C)ソーシャルケア班では、ソーシャルワークの周辺を広げた支援領域をカバーする研究を行った。ソーシャルケアとして発展しているイギリスのスーパービジョンの在り方の実際を訪問して探った。またその知見を海外事情として全体研究会で検討した。さらにイギリスのスーパービジョンの代表的論者であるモリソンとそのあとに続くワナコットを中心に、その理論の枠組みを検討した。

また1～2年目には被災地でのケアマネジャーへの研修会実施を行い、ケアマネジメントの領域でケアマネジャーのスーパービジョンに対する認識に関する量的調査を行なった。

3 年目からは、①主任介護支援対象のフォローアップ研修、主任観が支援専門員の意識調査、フォーカスグループインタビューを実施した。②認知症ケアにおけるスーパービジョン方法論として日本認知症ケア学会におけるシンポジウムの継続的報告をもとに、多面的評価を行った。③英国のソーシャルワークスーパービジョンの文献の探索と検討を行った。

D)権利擁護グループから発展した権利擁護支援班として、非行少年たち当事者の語りの場を創出することで、支援者側が彼らの世界を理解し、彼らも語ることで当事者自身の自己確認と理解を進めるというスーパービジョン機能の効果を発揮・確認する実践を行った。振り返り・リフレクションの効果とその推進としてのスーパービジョン機能を創出したソーシャルアクション研究を行った。

E）法人マネジメント班は、提携社会福祉法人とのコラボレイト研究として、法人理念を組織構成員に生かせるように教育する人材養成システムとして、スーパービジョン機能の発揮を狙った組織体制づくりを行っていることを業務のヒヤリングから分析整理した。

このように、各グループにおいて、様々な「支援者支援」に向けて　多様な研究が行われた。なお、これらについての具体的な内容については、以下に続く各グループ報告に任せたい。

２　基礎理論

日本福祉大学
スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

A グループ「基礎理論」　研究成果報告書

グループ長　田中千枝子

【研究の目的】

基礎理論班では、支援人材養成のための多様なスーパービジョンの実態を踏まえて、現状に則した日本のスーパービジョンに関する再定義を目的にした。またスーパービジョン概念の普及およびスーパービジョン文化の醸成のために、シンポジウム・研究会や研修会、講演等のプログラム開発を行い、およびその評価を実施した。

【研究の内容と方法】

《研究群１　センター研究の方向性　支援者支援　直接支援から仕組みや体制づくり》

そのために研究拠点である日本福祉大学スーパービジョン研究センターにおいて、米国のスーパービジョン研究の半世紀以上前からの第一人者であり続けた、A.カデューシンによる「スーパービジョンインソーシャルワーク第 5 版」の翻訳作業を学内外の研究者の共同作業として始めた。またそれをスーパービジョン研究センターの顧問である福山和女先生に監訳をお願いし、ともに内容を吟味し、日本の現状との相違を確認しながら研究を展開してきた。この作業は（1）から（5）まで以下の手順をたどり、専門支援職団体や多様なヒューマンケアの研究者にも加入してもらい実践・展開した。

（1）スーパービジョン　イン　ソーシャルワーク　第 5 版の翻訳および出版
（2）日本のスーパービジョン現場に対する（1）の普及および定着化のための勉強会
（3）支援人材養成のためのテキスト本作成・出版
（4）スーパービジョン機能を発揮するための研修プログラム開発と研修会の実施・評価
（5）スーパービジョン機能を応用した研究手法の開発（質的研究法におけるナラティブ）
　　およびDVD教材作成

《研究群２　ヒューマンケアの包括性　ホモばかりでなくヘテロ関係も》

またこれらのカデューシンからの研究関心と同時に、日本のヒューマンケアにおけるスーパービジョンの実態を多面的に把握するための研究も同時に行い、定期の研究会の中で知識や理解を共有した。

（1）　保健・医療領域のソーシャルワーク・スーパービジョンの現状
—スーパービジョン講座受講者の調査から—　浅野正嗣　山口みほ

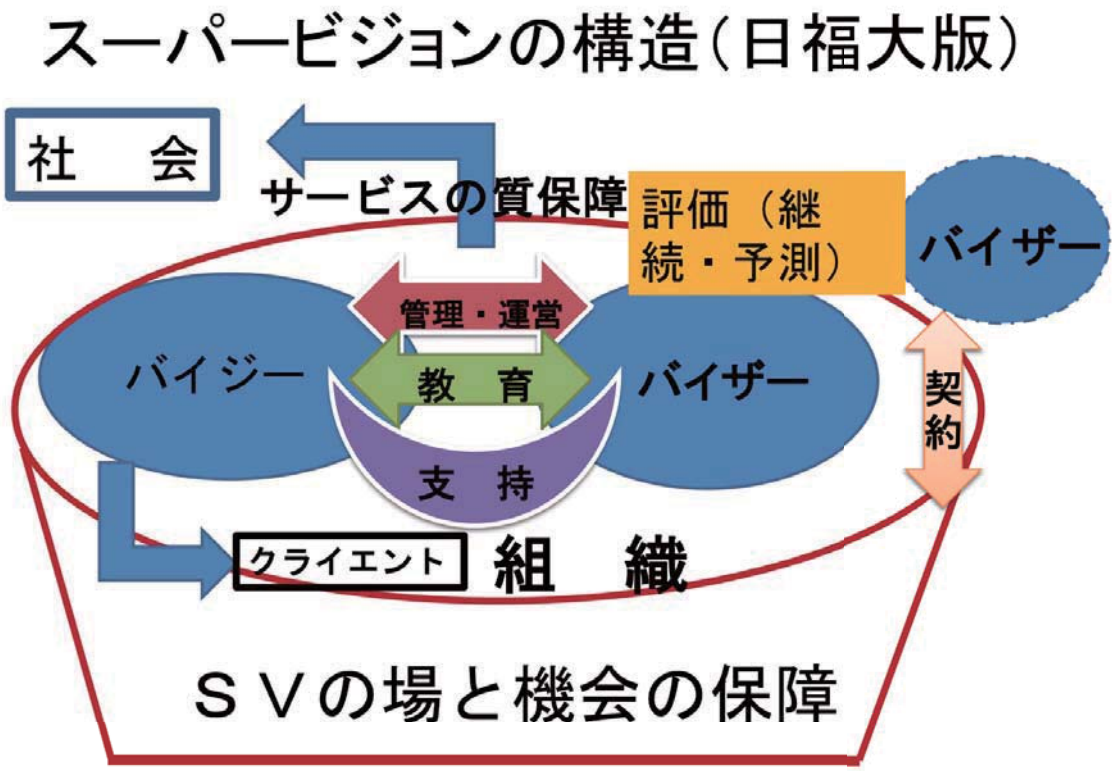
（2）　スーパービジョンの基本的構成
—スーパービジョン経験聞き取り調査のための準備—　時岡新

（3）　ソーシャルワーク・スーパービジョンの効果評価について　浅野正嗣

（4）　非言語的コミュニケーションによる支援に関するスーパービジョン研究
山内哲也　鈴木俊文

（5）　ケアワークにおけるスーパービジョン機能の発揮　鈴木俊文

【センター研究の基礎】



日本福祉大版のスーパービジョンの再定義を試案した。これはカデューシンのスーパービジョンの理論的枠組みを下敷きに、ミクロ実践のみならずメゾレベルのスーパービジョンシステム構築のための体制づくりまでを視野に入れたものとして設定した。

従来保健医療領域や公的扶助の領域で行われていた古典的スーパービジョンは、スーパーバイザーとスーパーバイジー関係を中心に、その二者間においてミクロレベルで 3 機能（支持・教育・管理運営）が発揮される形であった。そこでの成果は、スーパーバイザーが行うスーパーバイジーの成長と利用者に対するサービスの質の保証や評価と説明されていた。一方現在日本の現場で必要とされているスーパービジョンで強調されるのは、支持的機能を基盤とするものであることが多い。しかしただ単に支持的にスーパービジョンを行うだけでは利用者への支援につながらない現場の認識も存在する。またバーンアウトや離職問題を背景にしているところからも、支援者支援にとっての支持的機能の再評価が必要となっている。

そこで支援者であるスーパーバイジーに対して、支持的をベースに、教育的・管理的に支援することを目的に、サービスの質を社会に向けて組織がスーパービジョン契約や仕組みづくりを行うことで保証できるようにすることと仮の再定義を行った。

また評価的機能は従来言われてきたような事後評価や業務査定のようなものではなく、スーパーバイザーが持つ機能としての3機能に合わせて、スーパーバイジーの一定期間の成長に対する予測としての評価であるとした。

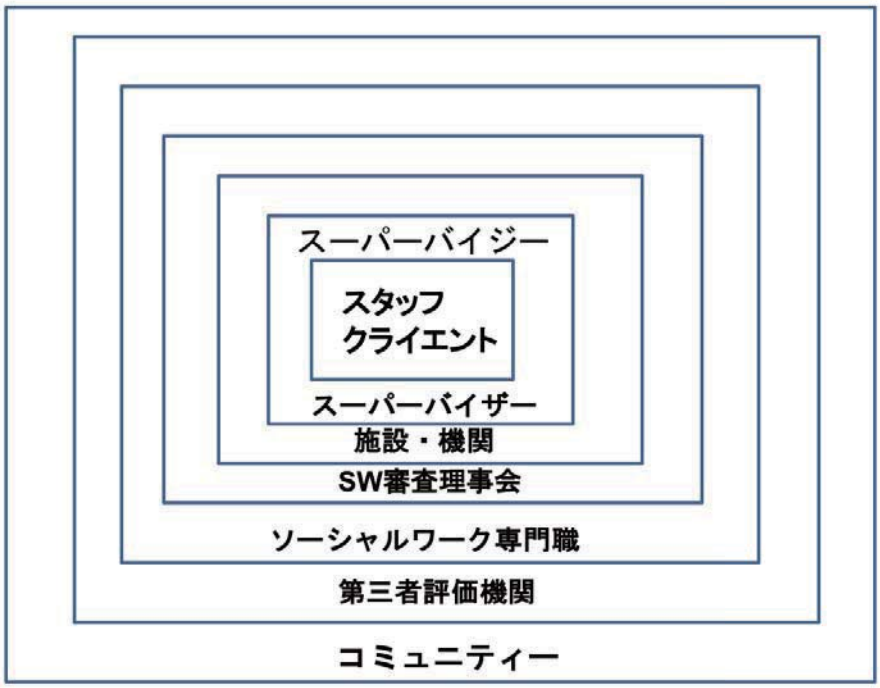
【Ａ. カデューシンの理論研究】

学内外の研究者 10 名のメンバーが、スーパービジョンの第一人者であるカデューシンの最新のスーパービジョン状況と研究課題を訳すことで、ソーシャルワークのスーパービジョンの基礎的認識を研究会メンバー全体で認識した。また近年のソーシャルワーク理論を背景に書かれているものであり、人と環境の交互作用をスーパービジョンの実際に適用して考えていくことが分かった。また古典的3機能と評価の関係、スーパーバイザー・スーパーバイジーの関係性、組織や部署やグループを使ったメゾレベルのスーパービジョンのあり様など、自分の研究に振り替えて学ぶものは多くあった。

《翻訳作業の中の整理》

（1）エコシステム論によるソーシャルワーク・スーパービジョン体制

エコシステムによるSWSV体制



カデューシンはエコシステム論に伴った七重のスーパービジョン体制を設定している。スタッフ（スーパーバイジー）＝クライエントを核にして、スーパーバイジー＝スーパーバイザーが囲んでいる。それを施設や機関のシステムが囲み、その後はSW審査理事会、ソーシャルワーク専門職（団体）、第三者評価機関、コミュニティーとなり、社会に対するスーパービジョンのサービスの質の保証は、コミュニティーと施設機関の間に、専門性の審査評価システムが三重に囲んでおり、各システム間に相互作用があることを表している。

スーパービジョンとは、システム内の関係とシステム間の関係で生み出されていることが表わされており、スーパーバイザーからスーパーバイジーへ一方向の作用でなく、スーパーバイジーからも、またスーパーバイザー＝バイジー関係から組織・機関の間の相互作用が存在していることが分かる。

つまりスーパーバイザーが組織から依頼されたスーパービジョンであっても、クライエントを抱えたスーパーバイジーに対して指導を働きかけるだけではなく、スーパーバイジーバイザー関係をもって、組織・機関に働きかけることができると理解する。ただし勤務査定をスーパーバイザー

として行うのかについて、スーパーバイザー＝スーパーバイジー関係で得られたスーパービジョンの結果やバイジーの評価を組織に伝えることが、システムの相互作用としてあり得るのかについて検討した。専門職間の秘守とすべきであり、組織の人事考査に安易に乗ることなく保留として考えるべきとした。

(2) 医学モデルからシステム論へと変わった意味

スーパービジョンをシステム論の枠組みで考えるということは、診断主義や医学モデルではなく、支援側の価値づけや評価を行うことではない。スーパーバイザーはその状況や特徴をニュートラルなものとしてアセスメントすること。その状況を切り取る場合、そのことはストレングス視点でスーパービジョンに取り組むということにつながる。

またストレングス視点では、「長所」や「強さ」として、スーパーバイザー側の評価を表す見方ではなく、ありのままの本来の「強み」を見出し、引き出し、それを支持することであることが事例の中で説明されている。

専門職として育成を目指しスーパーバイジーの成長を願うと、「こうあってほしい」「こうあるべき」が先になり、「ありのまま」をよしとしてみる見方がとりにくくなる。「だめという評価」にもとづき、矯正しようとする医学モデルになりがち。

スーパーバイザーによって原因や問題追及を行うのでなく、実践の振り返りによるスーパーバイジー自身の気づきや認識の変更を誘うことが、リフレクティブ・振り返りの核になるものである。それはスーパーバイジーの気づきの力や思いの整理をする内省の力であるストレングスを頼りにすることにつながる。

(3) メゾレベルの強調は、グループを効果的に使うことから始まる

カデューシンがメゾレベルを強調するのは、組織の中でソーシャルワーク部署、部署の責任者そして部署に所属しているスタッフに対応したスーパービジョン関係の設定枠組みの意味合いが強いためでもある。しかし一方で、集団・グループの力を使い効果的効率的にスーパービジョンを行うことも、繰り返し強調している。

つまりソーシャルワーク部署の長であるスーパーバイザーが、部署のスタッフであるスーパーバイジー集団の力を使って、会議やミーティングによって、グループ・スーパービジョンを行っている。また実践研究としてスーパービジョンの機会 10 回のうち、個別のスーパービジョンのみ 10 回と個別5回集団 5 回との間に、満足度に差はないことが調査結果として記述されている。それ

なら集団メンバー間の相互作用を動かす仕組みを設定することやグループワークスキルの発揮できれば、スーパービジョンとして効率的ではないかということが言われる。

さらに集団メンバー間の効果として、日本でグループ・スーパービジョンというと、事例検討会をイメージする。事例検討会は事例を提示するスーパーバイジーが居て、司会をするスーパーバイザーが居て、あとの参加者はスーパーバイザーとして事例を検討しアドバイスを行うものが主であろう。

しかしカデューシンのグループ・スーパービジョンの意味は、個別スーパービジョンのように 1 人のスーパーバイジーの実践に焦点化することでなく、異なる参加者にスーパーバイジーが抱えたような体験や事例を思い浮かべさせることによって、参加者 1 人 1 人がスーパーバイジーとして、自らの実践を振り返る立場におくこととする。

(4) 管理的・教育的・支持的の 3 機能を中心にした分析・記述

カデューシンは半世紀以上前に唱えた管理的、教育的、支持的の3機能を柱に、これらとは別局面としての評価を置いた。その枠組みが古いのではないかと指摘されることもあった。しかし混乱している日本のスーパービジョンの現状を考えると、3 機能で学んできたスーパーバイザーたちにとって、新たな概念や手法で考えるよりも状況認識を合わせやすいのではという感想を持っている。また日本の組織土壌として、法人や所属機関や組織の縛りが強い、所属しているのかいないのか、膝の上にいるのかよそ者なのかで、関係性が変化することから、直属の人事を扱う上司を避けることくらいを気を付ければ、スーパービジョン関係は結べると考えた。

またスーパーバイザーたちからは苦手な機能と言われ、専門性を阻むものとしてスーパーバイジーからも敬遠されていた管理的機能は、カデューシンが言う意味を見ていくと印象が変わってくる。原語がアドミニストレイティブであり、管理することだけではなく、運営に働きかけることまで含んだ概念であることが分かる。またこのアドミニストレイティブは、昨今のマネジメントでもないようである。この違いをカデューシンは、「スーパーバイザーはアドボケイターでもある」と表している。

《カデューシンによる３機能の要点》

(1) 管理的スーパービジョン

① 現実とソーシャルワークの教育や訓練の根底にある伝統的価値観との矛盾

② 事業所が制度や政府の公的保険財源などへの依存度高く、外的規制強化の時代

③ 管理的スーパービジョンの必要性がさらに高まる

規制強化の展開

保険還付の条件にスーパービジョンの経験や高レベルのライセンス取得

第三者機関の支払い条件にスーパービジョン受けること

サービス供給自体に財源削減　管理者に対して供給責任の共有

1) 官僚制組織と職務の課題

官僚制における職務分担とスーパーバイザーの立ち位置

スーパービジョンという職務

2) スーパービジョンにおける権威の存在とパワーのあり様

(2) 教育的スーパービジョン

① 教育的スーパービジョンの意義

② クライエントへの成果

③ 管理的スーパービジョンと教育的スーパービジョンとの関係

④ 教育的スーパービジョンのプロセス

⑤ 効果的に教えることと学ぶことのために必要な条件

1) 高い動機付け

2) エネルギーの投入

3) 達成感とやりがい

4) 学習プロセスへの積極的関わり

5) 意味のある内容

6) 個性のアセスメント

⑥ スーパーバイザーとスーパーバイジーとの関係

⑦ スーパーバイザーの抱える問題

(3) 支持的スーパービジョン

① 燃え尽き症候群

② スーパーバイジーの業務ストレス

③ スタッフの人格とバーンアウトとの関係

④ サポートを提供するほかの手段

⑤ ストレス予防

⑥ スーパービジョンにおけるユーモア

【カデューシン研究からの展開】

（1） スーパービジョン イン ソーシャルワーク 第5版の翻訳および出版

翻訳作業の中での勉強会から翻訳記念シンポジウム

（2） 日本のスーパービジョン現場に対する（1）の普及および定着化のための勉強会

実践現場のスーパーバイザーとバイジーグループ勉強会

（3） 支援人材養成のためのテキスト本作成・出版

「介護・福祉の支援人材養成開発論―尊厳・自律・リーダーシップの原則」

福山和女・田中千枝子責任編集 勁草書房 2016年

日本医療社会福祉協会実習指導者研修会・人材養成専門研修テキスト

（4） スーパービジョン機能を発揮するための研修プログラム開発と研修会の実施

「スーパービジョンによるケアカンファレンス」

「スーパーバイザー養成研修会」

「スーパービジョン演習」

「事例検討会」等

（5）スーパービジョン機能を応用した研究手法の開発（質的研究法におけるナラティブ）

「DVD教材作成」

「質的研究会とのコラボ研究」

講座の構成

１巻 社会福祉研究としての質的研究 田中千枝子

２巻 質的研究とは 山内哲也

３巻 質的研究の進め方 ～Ｍ＝ＧＴＡ～ 鈴木俊之

４巻 ＧＴＡの具体的展開 ～Ｍ＝ＧＴＡの研究事例～ 塩満卓

図：DVD教材の内容

【カデューシンをスーパービジョン実践に生かす】

《管理運営的側面》

職場づくりとしてのスーパービジョン手法

職場にスーパービジョン業務を創出する

事例検討とスーパービジョンの違い

理念経営に生かすスーパービジョンシステム開発

業務評価と人事考査の相違

《理論研究的側面》

エコシステム論

SFA（ソリューション・フォーカスト・アプローチ）

バイオ・サイコ・ソーシャルアプローチ

リフレクティブ面接手法演習（質的研究のための）

《価値とその整理・調整の側面》

チームアプローチ　多職種連携

ストレングス視点　エンパワメントアプローチ

主要研究業績

佐原直之、福山和女、田中千枝子「FK グリッドによる実習スーパービジョンのプロセスにみる実践的効果に関する研究」日本福祉大学大学院『福祉社会開発研究』第 12 号,pp51-62,2017 年 3 月

塩満卓『相談支援専門員の利用者に対する 14 の援助者役割とその獲得機序(第二報)－知的障害者領域における相談支援専門員の円熟期を中心に－」日本福祉大学大学院『福祉社会開発研究』第 12 号, pp.51-61,2017 年 3 月

福山和女監訳、田中千枝子責任編集『ソーシャルワーク・スーパービジョン 第 5 版』A.カデューシン&D.ハークネス著,日本福祉大学スーパービジョン研究センター発行,中央法規出版,総頁数 659p,2016 年 11 月

福山和女、田中千枝子責任編集『福祉・介護の支援人材養成・開発論-尊厳・自律・リーダーシップの原則-』,勁草書房,総頁数 245p,2016 年 8 月

３　ソーシャルワーク

日本福祉大学
スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

B グループ「ソーシャルワークの SV」　研究成果報告書

グループ長　大谷京子

研究目的

本チームの研究目的は、ソーシャルワークスーパービジョンの中核にあるスキルを明らかにし、ソーシャルワーク領域におけるスーパーバイザーの質の向上、また SVR であり続けるためのサポートシステムの構築に関する方法論を描写することである。

調査内容

上記目的のために、4 本の調査研究を設計した。

第一に、ソーシャルワーク領域における SV の理論的検討を、先行研究調査によって行った。従来 SV は、欧米のテキストから学び、実践していたが、各専門職団体も SV を体系的に展開する仕組みを構築し、SV 推進の動きが加速している。日本の文化と実践現場の実情に根差した SV を定着させるためには、理論的枠組みが必要であり、そのための研究を実施した。

第二に、エキスパートスーパーバイザーが、セッションで活用しているスキルの解明を行った。日本における SV は緒に就いたばかりであり、多くのベテランソーシャルワーカーが、スーパーバイザーとしては自信を持てない状況にある。SV もマニュアル化できない実践ではあるが、具体的にどのようなスキルが活用されているのか可視化すれば、SV 普及のために有効であると考えた。そこで、セッションのプロセスの中で、どのようなスキルが活用されるのかを示した。

第三に、スーパーバイザーの質の向上のためのエビデンスとして、スキル評価指標を開発することを目的に、アンケート調査を実施した。各回のセッションの振り返りのためのチェックリストと、スーパーバイザー自身のスキルを振り返るための評価指標の両方を開発した。

最後に、スーパーバイザーが成長し続け、活動を継続するためのシステムの描写を行った。実際にスーパービジョン研究会として、SVR 同士のサポートと成長、SV の普及を意図した 2 つのグループのインタビュー調査を通して、システムづくりに必要な要素を明らかにした。

研究１：SW 領域における SV の理論検討

１．はじめに

ソーシャルワーカーが専門職として成長するためにスーパービジョンが必要であることは、わが国においても十分認識されている。多様な分野でスーパービジョンに関する研修会が開催

され、方法論が示され実践されつつある。一方で、スーパーバイザー（以下、「バイザー」）が活用するスキルに関する議論は十分されているとはいえず、手探りで実践を積み重ねている現状がある。バイザーのスキルが不明確であることは、実践が定着しない要因のひとつとなりうる。

わが国の文化やソーシャルワークの実践の場に合致したスーパービジョンを確立するための課題は山積している。スーパービジョンが実践現場に根づくには、実践を積み重ねることに加えて、方法論やスキル等が実践に耐えうる理論として明確にされることが求められる。そのためには、実践と理論を相互に関連づけながら検討を重ねることが必要となる。

２．研究目的

実際のスーパービジョン場面の逐語データから導き出したスーパービジョンスキルと、これまで文献等で示されてきたスーパービジョンスキルを比較検討することで、わが国におけるスーパービジョンスキルの特質を明らかにすることを目的とする。スーパービジョンスキルの理論化に向けた端緒となるものである。

３．研究方法

研究の対象は、A 県 B 地域の C スーパービジョン研究会のメンバーが実施した 12 回の個人スーパービジョン場面の逐語データから抽出したスーパービジョンスキルと、シュルマンが相互作用アプローチに基づき示したスキルである。逐語データから抽出したスキルは、23 である。シュルマンによるスキルは、塩村と岩間がそれぞれカテゴリを示しており、より具体的な実践行為として示されている岩間による 21 のスキルを比較対象とした。それぞれのスキルの意図や具体的な内容を読み込み、比較検討した。

４．結果と考察

それぞれのスキルを比較検討した結果、両者に共通するスキルとそれぞれに固有のスキルがあった。逐語データから抽出した 23 のスキルのうち、シュルマンのスキルと共通していたのは、17 であった。アセスメントと評価に関するスキルに共通するものが多くみられた。ただし、シュルマンのスキルでは、アセスメントはスーパーバイジー（以下、「バイジー」）に焦点が当てられているが、抽出したスキルでは、バイジーとバイジーが提示した事例の両方のアセスメントをしていた。シュルマンに固有のスキルは、「怒りの表出」「対決の促進」「抑制」など、バ

イザーとバイジーの相互作用の促進を意図したものであった。逐語データに固有のスキルは、「気づきの成果の活用」「今後の課題提示」「保留する」など、場面展開に関するスキルであった。

逐語データから抽出したスキルの特質として、①バイジーの成長をより明確に志向、②重層的で段階的でこまやか、③バイザーの感情を活用したスキルがない、の 3 点に整理できた。スーパービジョンの目的の一つはワーカーの養成であるが、「促し」⇒「示唆」⇒「提示」⇒「教示」と、バイジーの気づきを促すために段階をふまえて展開し、さらに、「励まし」や「保留」など、バイジーの状況にあわせて細やかな配慮をしていた。わが国の実際のスーパービジョン場面では、支持的機能や教育的機能をより強く意識して、バイジーの成長を志向したスキルを活用していると考察できる。

５．まとめ

今回の結果により、わが国の実践場面におけるバイザーのスキルの特質が、バイジーの成長を志向し、重層的で段階的でこまやかであることが示された。12 回という限られた回数による場面から抽出したスキルであることから、そのまま汎化することはできないが、わが国の実践場面を反映したスキルの一部が示されたと考える。今回は逐語データからの抽出であり、非言語のスキルの比較検討はできていない。スーパービジョン実践が浸透するには、理論と実践を連鎖させたスキルの明確化が求められる。それらは今後の課題としたい。

研究２：質的調査による SW の SV スキル抽出

１．はじめに

多くのスーパーバイザー（以下、バイザー）が、自らがおこなうスーパービジョン実践に対して、「これでよいのか」「自分のやり方を押し付けていないか」と不安を訴えている. その背景には、スーパービジョンに関する研修や文献で、抽象性の高いスキルを駆使する理想型のバイザー像が伝達されていることと、不安を抱きながらも実施したスーパービジョンに対して、他者から支持や評価をうける機会や場がないことが背景にあると考えた。

バイザーの不安を軽減するためには、バイザーの観察可能な具体的スキルを、スーパービジョン契約の締結から終了までの数カ月から数年に及ぶ中長期間ではなく、1 回のスーパービジョンセッションの単位で明記することが有用であると、先行研究の整理にもとづき仮説的に研究枠組みを構築した。

本研究により明示されたバイザースキルは、スーパービジョンセッションにおける思考や言動の指針となるだけではなく、スーパービジョン実践後の評価指標に用いることをふまえ、次におこなう量的調査の前提調査として実施した。

２．調査目的

バイザーのスーパービジョン実践に対する不安を軽減することをめざして、1 回のセッションあたりのバイザーが活用するスキルを明らかにする。また、スーパービジョンスキル評価指標作成の基礎データとすることを目的とした。

３．調査方法

尾張スーパービジョン研究会のメンバーが、職場内の部下・後輩に対して実施した、12 のスーパービジョンセッションの逐語データを研究対象とした。

逐語データは、バイザーとバイジーそれぞれの発語に分類し、長い発語は分割した。4 名の研究者が、各自でデータを読み、バイザーがスキルを活用していると読み取ると、その発語部分と活用していると考えるスキルを記録した。その後、4 名でひとつひとつのスキル活用部分とスキルの内容を確認し、研究者全員が合意するまで繰り返し、類似したスキルはグループ化した（個別分析）。

12 のデータすべてのスキルを抽出し、グループ化を終了した後、スキルグループの内容の類似性に着目してカテゴリー化し、統合グループを作成した（統合分析）。

統合分析をおこなうと、スキル活用のタイミングに類似性が見られた。そのため、1 回のスーパービジョンセッションを 4 つの時期に区分し、作成したカテゴリーを配置して、カテゴリー間の関係性について整理をおこなった。

４．調査結果

個別分析では、12 のスーパービジョンセッションから 634 のスキルが抽出された。634 のスキルは、151 のスキルグループに統合することができ、さらに統合分析では 23 の統合グループを作成した。

23 の統合グループは、スーパービジョンセッションのプロセスに応じて用いられるスキルと、段階には関係なく頻回に用いられるスキルに分類することができた。

スーパービジョンセッションのプロセスを、開始段階と準備段階、展開段階と終結段階の 4 つ

の段階に区別して、プロセスに応じて用いられるスキルを配置し、段階に関係なく用いられるスキルは、スーパービジョンを成立させるために基盤となるスキルとした。

開始段階では、36 のスキルグループが抽出され 3 つの統合グループにまとめることができた。準備段階は、21 のスキルグループを 5 つの統合グループにまとめ、展開段階では 31 のスキルグループを 6 つのグループに統合した。終結段階では、25 のスキル抽出グループを 6 つの統合グループにまとめた。基盤となるスキルは、24 のスキル抽出グループと 3 つの統合グループで構成された。

1 回のスーパービジョンセッションで活用されるスキルの関係性を図式化するために、統合グループをさらに結合して、次のような分析結果図を作成した(図 1 参照)。

５．調査の考察

スーパービジョンに直接かかわるスキルは、事例を対象としたスキルとバイジーを対象としたスキルが一体的に用いられることで、スーパービジョンの 2 つの目的を達成することに寄与していた。さらに、展開段階ではバイジーが成長課題に直面するために、促しから教示へと段階的に活用することで、バイジーの気づきを尊重していると考察した。

基盤となるスキルには、ソーシャルワーカーがクライエントに対して用いる面接技法に通じるスキルが多く含まれ、バイジーの内省や言語化を促していた。今回は言語に焦点化したスキル調査をおこなったが、非言語的なコミュニケーションスキルの活用にも視野を拡大することが新たな知見の獲得が期待される。

本研究により、二次的にバイザーがバイジーの力量を丁寧にアセスメントし、主体的に成長できる力量の獲得のために教えることよりも気づくことを尊重しているバイザーの姿勢を推しはかることができた。

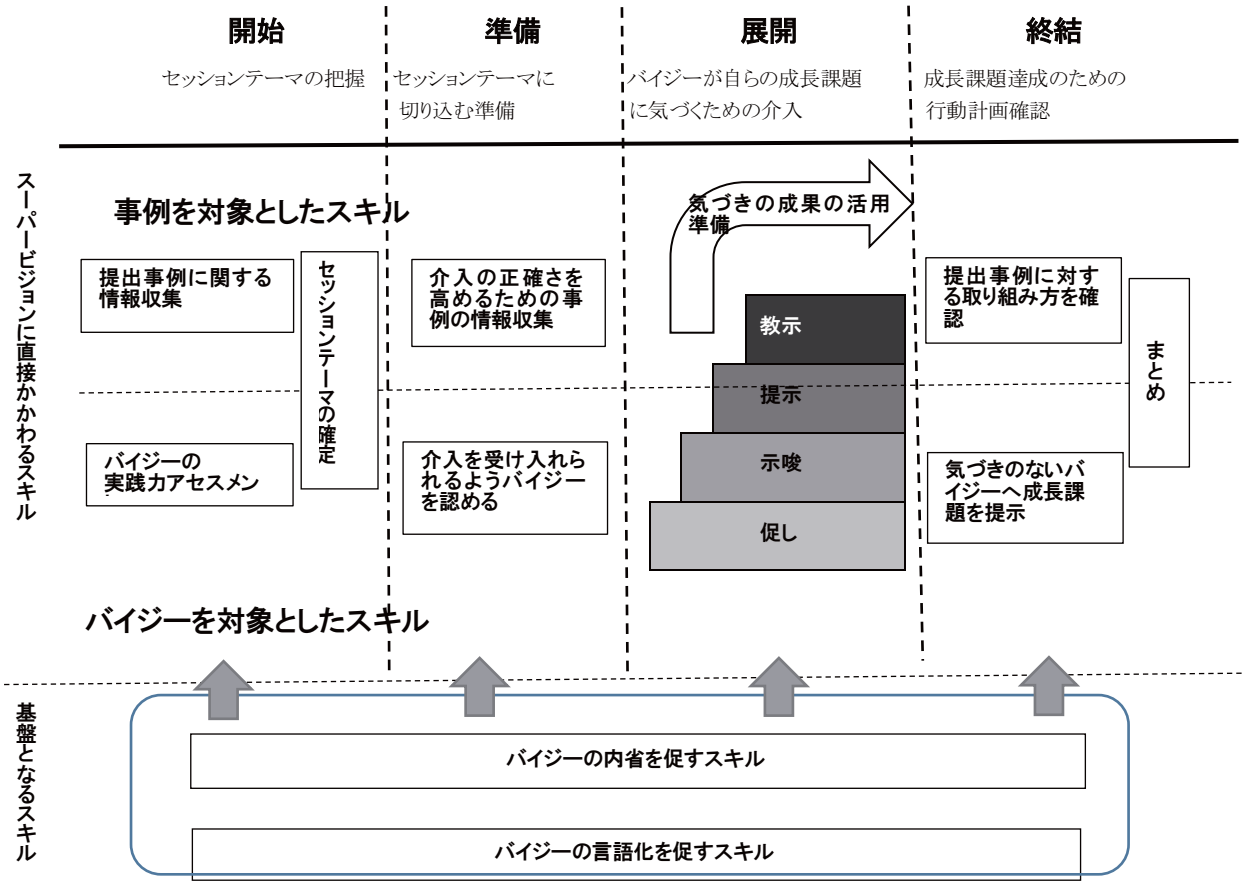


図 1.　分析結果図

６．まとめ

本研究により、バイザーはバイジーが自らの成長課題に気づくことを重視し、開始段階から終結段階に至るまで、それぞれの目的を達成するためのスキルを活用していることが明らかになった。それほど難しいスキルではないため、これからスーパービジョン実践を始める新人バイザーを鼓舞する結果を得ることができた。

スキルの行使の背景には、セッション中のバイザーによる的確なバイジーのアセスメントがおこなわれていると予測されるが、今回の研究結果からは明らかにすることはかなわなかった。本研究の結果として明らかになったバイザースキルに、アセスメントが加われば、暗黙知とされてきたバイザーのコンピテンシーを一部可視化する研究に発展することが期待できる。

研究３：量的調査によるスーパービジョンスキル理評価指標とチェックリスト開発

１．はじめに

エキスパートが実施するスーパービジョン（以下、SV）セッションで活用されるスキルについて、質的分析を実施し、一連のプロセスにおいて導出されるスキルのあり様を描写できた。さらに、個々のスーパーバイザー（以下、SVR）が自らの実践力を振り返り、成長を確認するためのツールが必要だと考えた。そこで、各回のセッションを振り返り、何ができて次に残された課題は何かを明確にするためのチェックリストの作成と、SVR 自身のスキルを評価する指標を開発するための研究を実施した。

２．チェックリストの作成

まず、634 のスキルをセッションのプロセスに合わせて整理した。すなわち、「バイジーが提出した事例の内容確認」「バイジーのアセスメント」「セッションテーマ確定」「ポジティブ評価」「セッションテーマについての展開」「セッションの終結」という、1 回のセッションにおけるプロセスに沿って導出されるスキルと、セッションを通して常に表現されるものとに分類し、どの段階でどのようなスキルが求められるかを明示した。

類似するスキルは統合し、分かりやすい文言に変換して、リストを作成し、エキスパート SVR12 名にセッション振り返りのツールとしての有効性を試してもらった。さらに SV に造詣の深い研究者 3 名の協力を得、項目の取捨選択、精錬を繰り返し、62 項目チェックリストとして完成させた（別添資料参照）。全てのスキル活用が、必ずしも毎回のセッションで必要ではないので、「不要」のチェック欄も設けている。このチェックリストは、日本福祉大学 SV 研究センターの HP にて公開予定である。

本チェックリストを振り返りに使用することで、①SVR の傾向把握、②SVE の特徴理解、③セッションを複数回行う SV 契約の場合、次回セッションの戦略検討が可能になる。毎回のセッションにおけるチェックリストの蓄積が、SVR の実践力を裏打ちするデータにもなりうると考える。

３．スキル評価指標の開発

このチェックリストを踏まえ、SVR スキルに焦点を絞ったスキル評価指標の開発を目指して、アンケート調査を実施した。2018 年 2 月 13 日から 6 月末日まで、各専門職団体の登録 SVR558 名を対象に、郵送調査を実施した。質問項目は、チェックリストからさらに精査し 21 のスキル群として生成した。

本調査の結果から、SVR 養成と訓練方法について提言する。

第一に、各専門職団体の認定スーパーバイザーを調査協力者としたが、SVR 長さも量も浅いと言わざるを得ない。日本における組織的 SV の展開は始まったばかりだといえる。SVR 養成が必要であるだけなく、SVR 養成と SV の質の担保・向上、SVE とのアクセス、SV 継続のためのサポート等を含めた包括的な SV システムをいかにつくるかが課題である。専門職団体が連携して SVR の質の担保と向上に取り組むことが急務である。

SVR が成長し続けるためには訓練が必要であり、それには、学習→実施→省察→評価というサイクルが効果的（Fisher et al. 2016）とされている。その際に本調査で得られた指標は、省察や評価のためのツールとしても活用できる。

４．まとめ

SVR が成長を続け、質の高い SV を提供するためには、研修や SVR 同士が支えあう仕組みが必要である。ただ、省察的 SVR であるためには、各セッションの振り返り、定期的な自らの実践力についての振り返りが肝要である。今回開発したチェックリストとスキル評価指標は、省察ツールとして活用できると期待している。

研究４：質の高い SV 普及のためのシステムモデル研究

１．研究の背景と目的

近年、ソーシャルワーカーの職能団体もスーパーバイザーの養成・認定を進めている。しかし、自信がないために、スーパーバイザー養成研修を受講しただけではすぐにスーパーバイザーとしての実践に踏み切れないソーシャルワーカーが多く、依然としてスーパーバイザーは不足しており、ソーシャルワーカーがスーパービジョンを受けることは「あたりまえ」の文化にはなりえていない。

スーパービジョンの普及・定着のためには、密室化していて他者の実践を学びにくいスーパービジョンの内容・方法について、スーパーバイザーも自らの実践をふりかえり、第三者からの支持や助言・指導を受け、不安や困難を相談できる、メタ・スーパービジョン（あるいはスーパー・スーパー・ビジョン）の体制が身近に必要である。しかし、今のところ、具体的なスーパーバイザー支援システムについての国内の研究はごく少数である。

そこで、複数のスーパーバイザーによる相互支援組織の先駆的な事例から、スーパーバイザー支援組織の形成を可能にする要件と、スーパーバイザーの集団化によるスーパービジョンの普

及・定着に関する効果を明らかにすることを目的にインタビュー調査を実施した。

２．調査方法

愛知県内で活動する地域ユニット型研究会第 1 期・第 2 期・第 3 期、および倶楽部型研究会への参与観察と、各メンバーを対象とするグループ・インタビューを実施した。インタビューでは、①研究会のシステム、②研究会活動の効果と課題の2点について尋ねた。

インタビューの録音データの逐語記録を4名の共同研究者が各々読み込んだ上、上記①、②への言及部分を抽出してコード化した。その後4名全員でコードの精選と名称の確定、グルーピングを行い、カテゴリーを作成した。

３．調査結果

①研究会のシステムに関しては、対象グループ毎の違いも見られるが、共通するコード（「　」で示す）、カテゴリー（＜　＞で示す）として、「スタートを切る2、3人の存在」が考えた＜会の設定条件＞に合う人を「チョイスして声掛けでメンバーを募る」形で集結していることがあげられた。また、＜システムの構成要素＞として「スーパー・スーパーバイザーの存在＞を取り入れている。そして、＜会の実施方法＞として、「勉強の内容ではなく、やり方を教えてもらった」上で、「いきなりバイザーの経験からやってみる」、そしてその経験を「バイザー同士が一緒に話す」「ピア・スーパービジョン」の＜会の形式＞により検討する運営方法を用いている。

②研究会活動の効果と課題に関しては、「ひとりでは固まってしまう見方への気づきがもらえる」、「（自分の行った）セッションを客観的に見る場を設けることで、安心してスーパービジョンを続けられる」といった効果＞がある一方、「職能団体の SV 事業との関係」や「（自団体以外への）SV の普及」等の点で課題がみられる。

４．まとめ（考察）

多くのメンバーにとっては、研究会が SV 開始への足掛かりとなっており、例会に参加することが SV 継続実施へのバックアップとなって、SVR のスキルの向上にもつながっていた

スーパービジョンの必要性を強く感じている人からのターゲットを絞った発信が、目的に叶った集団の形成を可能にしたと考えられる。そして、組織の継続を可能にしている要因としては、外部講師を招くのではなく、自分たちで学び合う研究会方式であることや、スーパー・スーパーバイザーやメンター役割の人材を導入していること等があげられる。研究会のためにスーパーバ

イジー役として協力を求める、というきっかけも、スーパーバイザー役を開始する際のハードルを下げる効果があり、研究会の発足がソーシャルワーク・スーパービジョンの普及に直結している様子が確認できた。

抽出された効果の中には、必ずしもスーパーバイザーの組織化によらずとも得られると考えられるものが含まれていた。また、経年的な効果の変化もあると考えられるため、今後も調査を続けていく必要がある。

５．SV 普及のためのツール

スーパービジョンの質の向上のための研修で活用できる DVD を制作した。

①研修 DVD「中堅・ベテラン MSW のための『面接技術』Ⅰ ～自らの実践と後進指導の向上を目指して～」（愛知県医療ソーシャルワーカー協会との共同制作）H26.11.

②研修 DVD「中堅・ベテラン MSW のための『面接技術』Ⅱ ～ソリューション・フォーカス・アプローチ（SFA）を用いた意思決定支援のための面接～」（愛知県医療ソーシャルワーカー協会との共同制作）H28.1.

③研修 DVD「ソーシャルワーカーを対象とした個別スーパービジョン模擬セッション」（尾張スーパービジョン研究会との共同制作）H31.3.

研究全体のまとめ

今回、4 つの研究を通して、新たに SV を開始するソーシャルワーカーにも、現に実践している SVR にも、何を大切に、何をどのように行うべきか、一定の指針を示すことができた。また、SVR 同士のサポートネットワークの作り方も示したことで、SV の普及への足掛かりにも寄与する知見を提供できたと考えている。

主要研究業績

大谷京子・神林みゆき・小松尾京子・山口みほ『スーパービジョンのはじめかた』ミネルヴァ書房，2019 年 7 月出版予定。

大谷京子「ソーシャルワークスーパービジョンスキルの評価指標開発－認定スーパーバイザーへの質問紙調査－」『ソーシャルワーク学会誌』（印刷中）

神林ミユキ「スーパービジョンセッションにおいてスーパーバイザーが用いるスキル―ソーシャル

ワーカーによるスーパービジョンの質的調査―」『社会福祉学』58(1), pp71-85, 2017 年 5 月

浅野正嗣・山口みほ「保健・医療領域のソーシャルワーク・スーパービジョンの現状―スーパービジョン講座受講者の調査から―」『医療と福祉』No.9949(2)、公益法人日本医療社会福祉協会、64-73,2016 年 3 月

大谷京子「ソーシャルワークスーパービジョンスキル指標－個別スーパービジョンにおけるスーパーバイザーのスキル－」『日本社会福祉学会第 66 回秋季大会』(金城学院大学)2018 年 9 月

小松尾京子・大谷京子・神林　ミユキ・山口みほ「個人スーパービジョンにおけるスーパービジョンのスキルに関する研究～シュルマンによるスーパービジョンモデルとの比較～」『日本ソーシャルワーク学会第 33 回大会』（同志社大学）2016 年 7 月

システム構築に関する研究～『尾張スーパービジョン研究会』の成立要件と活動効果の質的分析～」、『日本ソーシャルワーク学会第33回大会』(同志社大学)2016 年 7 月

小松尾京子・神林ミユキ・山口みほ・大谷京子「スーパービジョンにおけるスーパーバイザースキルの明確化の試み－スーパービジョンセッションにおける逐語記録の分析から－」『第 63 回日本社会福祉学会秋季大会』（久留米大学）2015 年 9 月

山口みほ・小松尾京子・神林ミユキ・大谷京子「スーパービジョンの普及・定着化のための

浅野正嗣・山口みほ「保健・医療領域におけるソーシャルワーク・スーパービジョンの現状と課題(1)―スーパーバイザーが扱う内容とその困難―」『日本社会福祉学会第 62 回秋季大会』(早稲田大学)2014 年 11 月

山口みほ・浅野正嗣「保健・医療領域におけるソーシャルワーク・スーパービジョンの現状と課題(2)―スーパーバイザーに認識されたスーパービジョンの内容と成果―」『日本社会福祉学会第 62 回秋季大会』(早稲田大学)2014 年 11 月

４　ソーシャルケア

日本福祉大学
スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

C グループ「ソーシャルケアにおけるスーパービジョン」研究成果報告書

グループ長　野村豊子

はじめに

ソーシャルケアにおけるスーパービジョンというテーマで以下に示す 3 種の研究を行った。研究班の構成メンバーは野村豊子（日本福祉大学大学院）照井孫久（石巻専修大学）汲田千賀子（同朋大学）本山潤一郎（老健とおの）山口友佑（認知症介護研究研修大府センター）であり、各研究において研究協力者として実践現場の専門職の方たちの協力を得た。

第 1 の研究は、ケアマネージメントにおけるスーパービジョンの実際と評価に関する検討であり、方法として主任介護支援専門員対象のフォローアップ研修、主任介護支援専門員への意識調査、フォーカスグループインタビューを実施した。

第 2 の研究は、認知症ケアにおけるスーパービジョンの方法開発に関する検討であり
スーパーバイザーへのスーパービジョンの実施に加えて日本認知症ケア学会におけるシンポジウムの継続的報告をもとに多面的評価を行った。

第 3 の研究は、英国におけるソーシャルワークスーパービジョンの展開に関する検討であり、Morrison と Wonnacott によるソーシャルワークスーパービジョンの論稿を中心に文献の探索と検討を行った

研究１. ケアマネージメントにおけるスーパービジョンの実際と評価に関する検討

１．取り組みの概要

調査研究は①先行文献の検討、②主任介護支援専門員に対する研修、③グループ・インタビューと事例検討、④アンケート調査の実施、⑤スーパービジョン評価モデルの検討により実施され、それぞれの取り組みの実施時期及び相互の関連は次の図に示すとおりである。

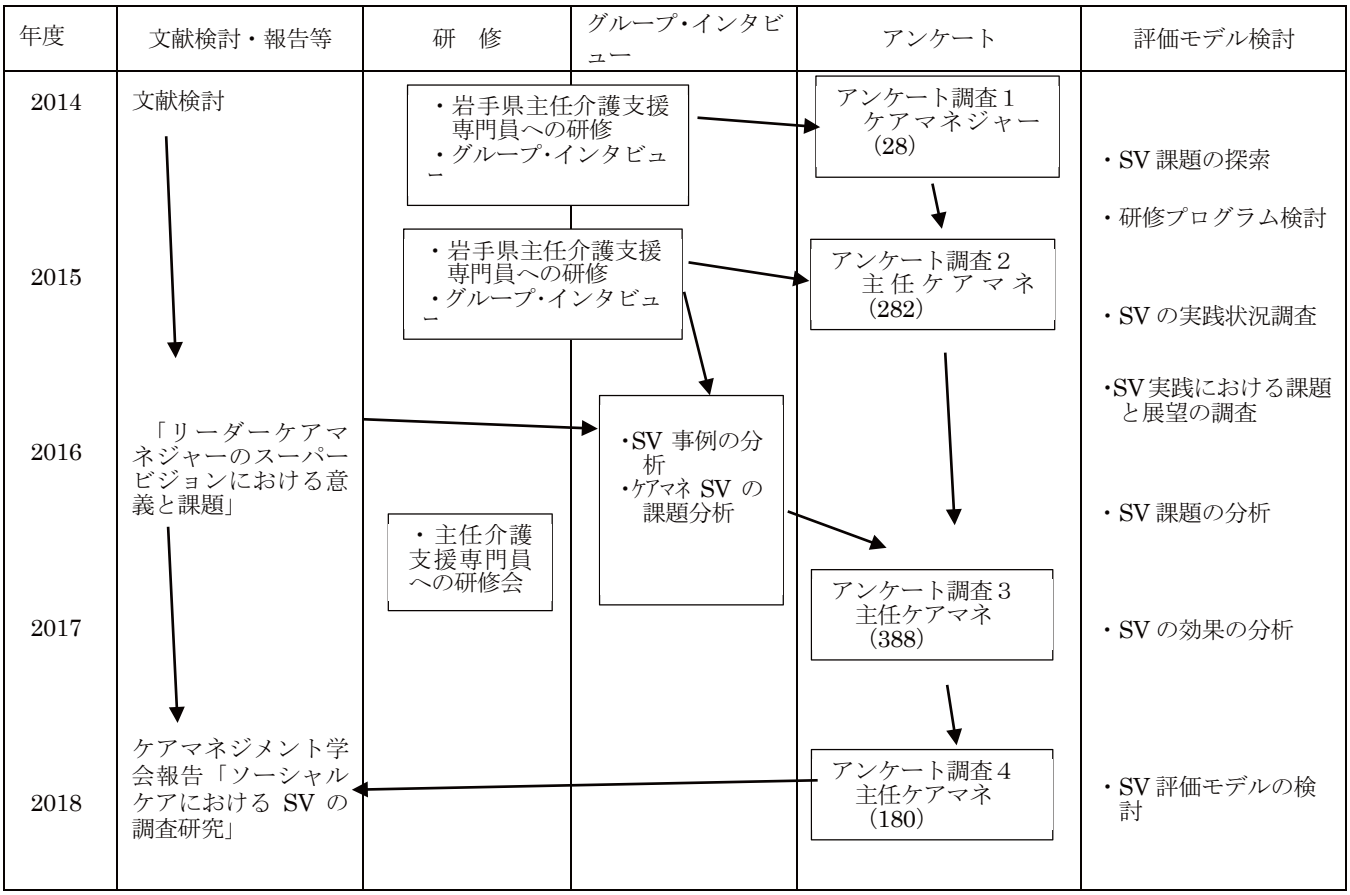


図. 研究進行表

２．岩手県リーダーケアマネージャー・フォローアップ研修と評価

リーダーケアマネージャーの希望者に対してフォローアップ研を実施し、その評価を行った。 参加者：両日とも各 30 名～50 名（昨年は計約 100 名であったため、3 日の日程を設定した。今年度は会議場の確保により希望人数に合わせて 2 回実施した。

グループ・インタビューを継続的に行い、リーダーケアマネージャーの課題を検討した。

３．２０１５年度リーダーケアマネージャーへの調査結果より

インタビューから明らかになった SV の課題は、①理論上の課題②実践上の課題③実施環境の課題であった。また、SV の方法と課題についてのアンケート結果は以下の通りであった。調査

対象＝主任介護支援専門員、有効回答 280 個別スーパビジョン」「ピアスーパービジョン」「グループスーパビジョン」「事例検討スーパービジョン」「グループスーパービジョン」といったスーパービジョンの各々の方法における問題点を探るため、「スーパービジョンの方法ごとの実施状況」、「課題の優先度」、「実施上の問題点」に関連する項目間の相関分析を行った。

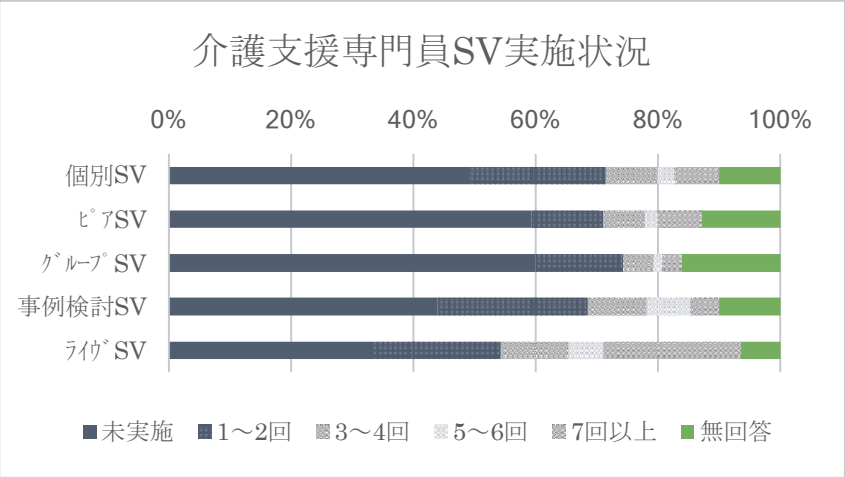


図:SV の実施状況と課題の重要度

	個別SV	ﾋﾟｱSV	ｸﾞﾙｰﾌﾟ SV	事例検討SV	ﾗｲｳﾞ SV
ﾊﾞｲｼﾞｰ人間的成長	.127	.106	.088	.129	-.018
知識技術の獲得	.202**	.146*	.084	.091	.018
ﾁｰﾑﾜｰｸの向上	.157*	.142*	.089	.069	.215**
利用者と家族の理解	.103	.062	.145*	.189**	.152*
関係機関との連携	.199**	.184**	.132	.057	.227**
ﾊﾞｲｻﾞｰﾊﾞｲｼﾞｰの相互成長	.160*	.207**	.175*	.123	.138*
QOL向上	.154*	.093	.050	.048	.112
ﾊﾞｲｼﾞｰ悩み軽減	.126	.149*	.083	.092	.220**
役割分担責任達成	.073	.086	.031	.039	.102
情報共有	.127	.102	.058	.065	.141*

表:相関分析結果

４． リーダーケアマネージャーへの SV に関する調査研究報告書より

・相関分析の結果から

1)　因子「基本的な姿勢を支える」はスーパーバイジーの課題および環境の課題との相関が低い　①基本的な姿勢の課題は普遍的？②基本的な姿勢を支えるための理論や方法が不明であるのか？

2)　バイザーがﾊﾞｲｼﾞｰの基本的姿勢を支える意義、方法、基礎的理論について明確化が必要。

3)　因子「環境課題_職場の風土」はスーパーバイザーの取り組みとの相関が殆ど見られない。

①スーパービジョンの意義の中には、職場風土の改善が含まれない可能性

②しかしながら、職場の風土とﾊﾞｲｼﾞｰの課題との間には一定の相関がみられる

職場の風土を改善するためにスーパビジョンが果し得る可能性について検討の必要性がある。

4)「ﾊﾞｲｼﾞｰ課題_基本的姿勢」の課題に取り組んでいく上では、「取組_SV 関係への配慮」「取組_SV の評価」の問題を明らかにしていく必要がある。

5)「ﾊﾞｲｼﾞｰ課題_関係者と連携」の課題に取り組んでいく上では「取組_SV 関係への配慮」「取組_SV の評価」の問題を明らかにしていく必要がある。

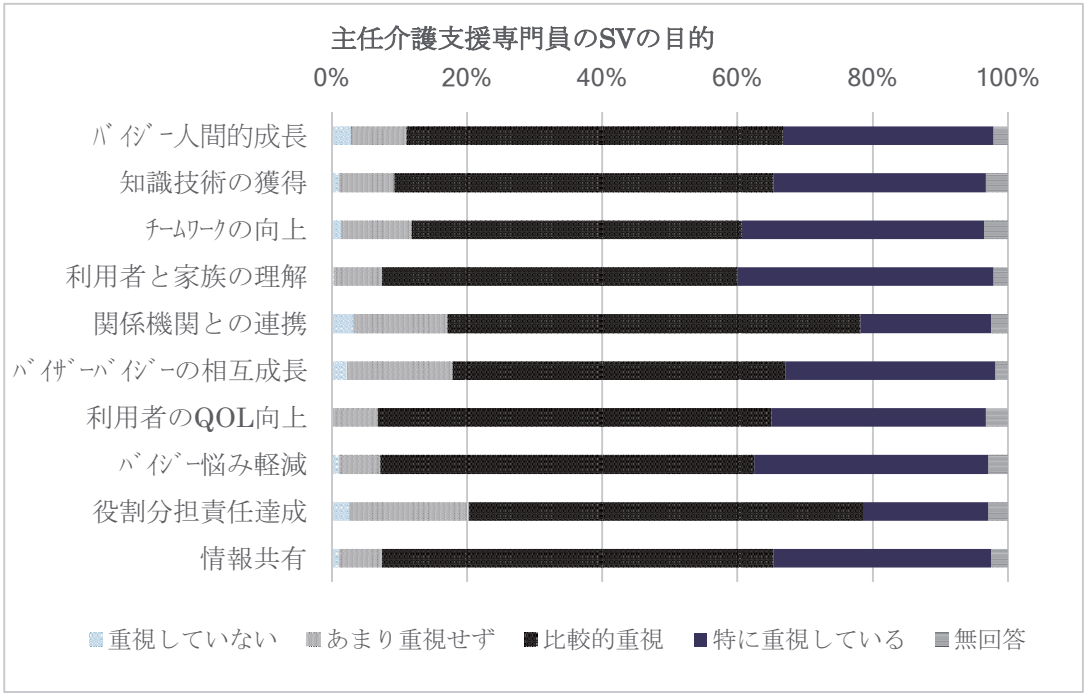


図:主任介護支援専門員の SV の目的

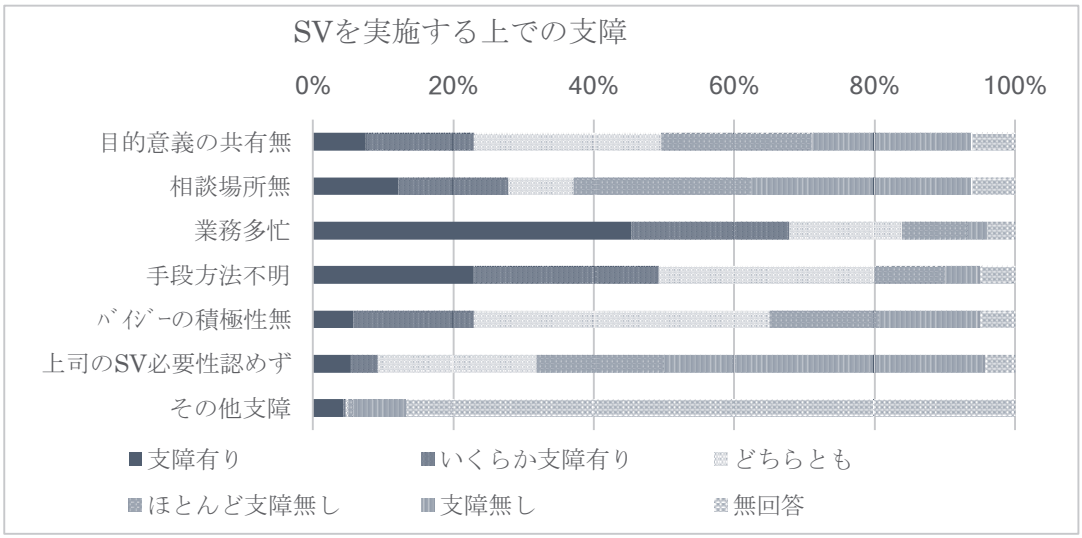


図:SV を実施する上での支障

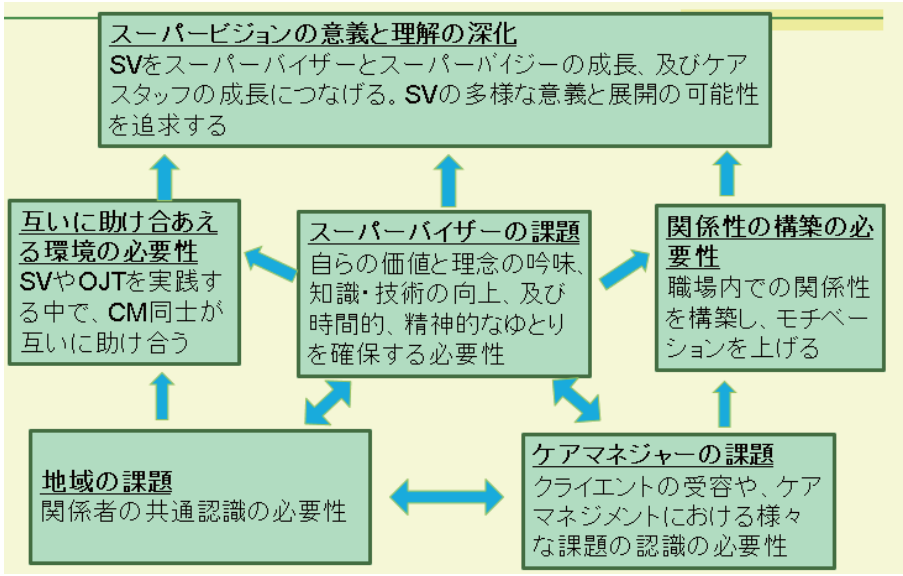


図:グループ・インタビューの分析結果

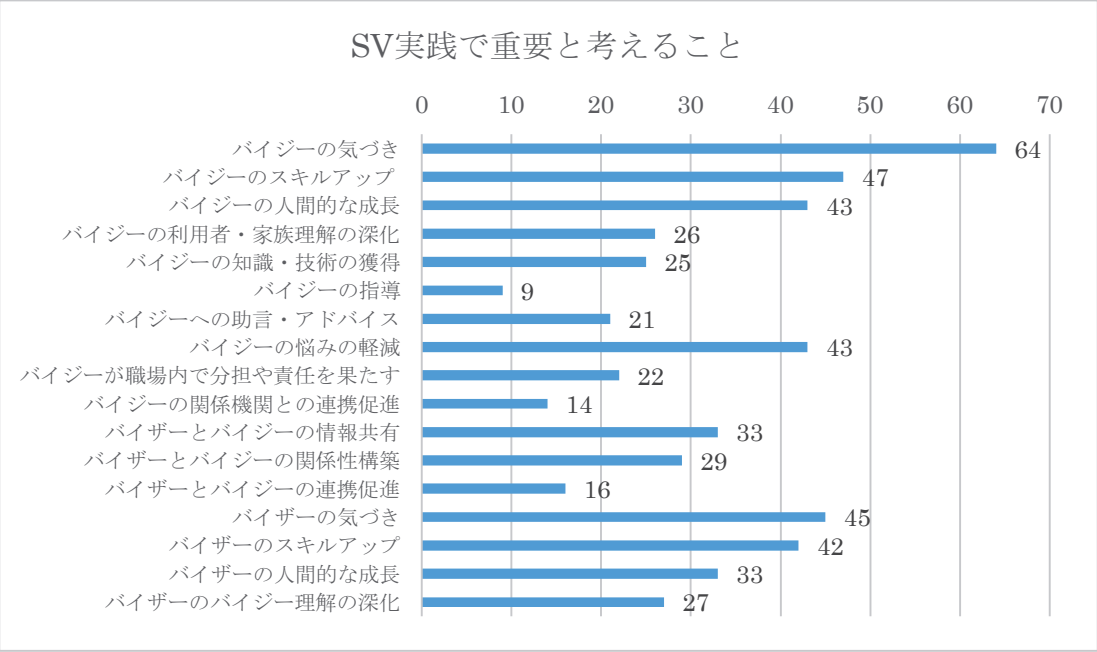


図:SV 実践で重要と考えること

	実践プロセスの強化	支援のための基本的な姿勢を支える	SV関係への配慮	プロセスと成果の評価
課題分析支援	.911	-.035	.071	-.006
援助技術課題明確化	.822	.023	.089	-.037
プランニング支援	.815	.187	-.217	.069
利用者家族の要望Gap対応	.802	.124	.099	-.134
効果的アセスメント支援	.793	-.049	.225	-.049
適切なサービス定期的確認	.772	.301	-.472	.125
コミュニケーション支援	.750	.172	.055	-.059
マネジメントの価値話し合い	.742	-.166	.219	-.001
問題点の整理支援	.702	.008	.184	.060
展開過程の振り返り	.624	-.123	.042	.442
目的や意義の理解促進	.549	-.213	.194	.368
ﾊﾞｲｼﾞｰ萎縮無いよう配慮	.063	.868	.030	-.048
ﾊﾞｲｼﾞｰの感情冷静に受止め	.091	.812	.086	-.012
自らの気づき重視	.009	.669	.190	-.020
様々なリスク考慮	-.269	.625	-.013	.463
コミュニケーション問題配慮	.128	.590	.203	.040
言葉遣い態度に留意	.197	.519	.253	-.064
家族負担軽減支援を配慮	.171	.465	.304	.003
目的や具体的方法を説明	-.138	.055	.787	.151
ﾊﾞｲｼﾞｰ問題と利用者問題区別	.074	.128	.766	.040
自己専門性向上努力	.140	.138	.721	-.006
バイジーの価値観理解努力	-.019	.018	.616	.376
ﾊﾞｲｼﾞｰ依存に十分配慮	.173	.293	.580	-.144
ﾊﾞｲｻﾞｰ役割と先輩支援区別	-.048	.206	.576	.194
援助技術定期的評価	.168	.233	-.057	.677
記録を残している	-.030	-.116	.269	.656

因子抽出法: 主因子法／回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

表:SV の実践状況についての因子分析

	取組_実践プロセス強化	取組_基本的な姿勢を支える	取組_SV関係への配慮	取組_SVの評価
ﾊﾞｲｼﾞｰ課題_援助技術	.361**	.120	.292*	.317**
ﾊﾞｲｼﾞｰ課題_基本的姿勢	.326**	.147	.181	.202
ﾊﾞｲｼﾞｰ課題_関係者と連携	.274*	.117	.094	.139
ﾊﾞｲｼﾞｰ課題_適切な情報処理	.262*	.136	.189	.334**
環境課題_職場の風土	-.161	-.164	-.173	.066
環境課題_職場の業務体制	-.188	-.054	-.271*	.056

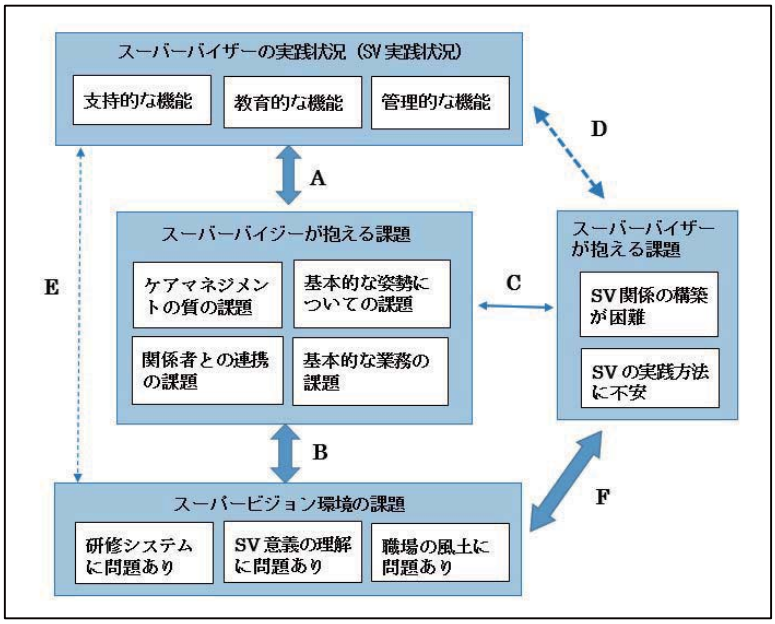
**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です ／ *. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です

図:相関分析結果

５．SV 評価モデルの検討

先行文献の検討、グループ・インタビュー・事例検討、アンケート調査の結果を整理することにより、次のような SV 評価モデルを構成することができた。

このモデルは、「スーパーバイザーの実践状況」「スーパーバイジーが抱える課題」「スーパーバイザーが抱える課題」「スーパービジョン環境の課題」から構成されており、それぞれの構成要素は一定の相関を有する。参考までに試作版の「主任介護支援専門員スーパービジョン自己評価票」を次に掲げる。



主任介護支援専門員のスーパービジョン自己評価（試作版）

スーパービジョンの実践状況について該当する番号に○をつけてください。

NO	スーパービジョンで実践している事項	頻繁に行っている	よく行っている	時々行っている	あまり行ってない	行っていない
支持的機能に関する実践	スーパーバイザーとして、スーパーバイジーの怒りや不安を冷静に受け止めるようにしている。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーを萎縮させることがないよう配慮している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが利用者に接する際、言葉遣いや態度に問題がないか、常に注意している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが、自分自身の抱えている問題に自ら気づくことを重視している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが問題に対応する際、スーパーバイザーに頼り切りになることがないよう、十分配慮している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーの介護支援専門員としての成長を目指している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが、利用者や家族とのコミュニケーション上の問題を抱えていないか、常に注意している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが、利用者や家族の負担軽減のために有効な支援を行っているか、常に配慮している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが、利用者や家族の思い・要望について十分理解しているか、常に配慮している。	5	4	3	2	1
	ケアマネジメントで発生する様々なリスクについて、常に考慮している。	5	4	3	2	1
教育的機能に関する実践	スーパーバイジーが適切な課題分析をできるよう支援を行っている。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが効果的にアセスメントをできるよう支援を行っている。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが抱えている援助技術上の課題を明らかにするよう心掛けている。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーのプランニング技術が向上するための支援を行っている。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが、利用者のニーズを理解し、ケアマネジメントの目的に沿ったサービス調整を行っているか、定期的に確認している。	5	4	3	2	1
	自分が考えていることを適切に表現できないスーパーバイジーに対して、問題点を整理して話すことができるよう、支援している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが、ケアマネジメントの目的や意義について理解を深めるよう働きかけている。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーとケアマネジメントの目的や価値について話し合いを行っている。	5	4	3	2	1
	利用者の要望と家族の要望とが異なる場合、スーパーバイジーと問題を共有し、対応策を検討している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが利用者や家族とのコミュニケーション上の課題を抱えている際、支援を行っている。	5	4	3	2	1
	虐待などの深刻な人権侵害がみられた場合、スーパーバイジーと情報を共有し、対応を検討している。	5	4	3	2	1
管理的機能に関する実践	スーパービジョンの内容を記録として残している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーに対して、スーパービジョンの目的や具体的な方法について説明している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーの業務の適切さや成果を、自分自身で評価できるよう支援している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーが、ケアマネジメントの意義や価値をどのようにとらえているか、理解するよう努めている。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーの援助技術(アセスメント、プランニング、実行、モニタリング、コミュニケーション技術等)を定期的に評価している。	5	4	3	2	1
	スーパーバイジーにとって必要な研修内容をスーパーバイジーとともに検討し、必要に応じて研修をバックアップしている。	5	4	3	2	1
	合 計 得 点	点				

研究２. 認知症ケアにおけるスーパービジョンの方法開発に関する検討

認知症ケアにおけるスーパービジョンでの経過と成果について、以下に各年度ごとにまとめ、総合的な成果を示す。

１．2014 年度の実施

認知症介護指導者 9 名にフォーカスグループインタビューの依頼をし、下記期日に実施した。9 名が所属する職場は特養・老健・小規模多機能・グループホームであった。

認知症ケアの職員への教育学習状況について、認知症ケアを行っている上での自分および組織の達成感、SV に関する自身の課題、職場の課題の４つについてインタビューを行った。

日　　時	内　　容
8 月 7 日（木） 日本福祉大学名古屋キャンパス 13:30～16:00	フォーカスグループインタビューの実施
10 月 9 日（木） 日本福祉大学名古屋キャンパス 15:00～	スーパービジョン事例の報告
12 月 11 日（木） 日本福祉大学名古屋キャンパス 15:00～18:00	「デリバリースーパービジョンの機能と役割」 その後、法人でデリバリー型のスーパービジョンを行っている実践について報告いただく。（名古屋・京都の指導者より）
2015 年 2 月 6 日（金） 日本福祉大学名古屋キャンパス 13:30～16:30	「認知症ケアにおける回想法を活用したコミュニケーション」 回想法リーダー技法のロールプレイを通して、認知症ケアにおけるコミュニケーションに関してスーパービジョン方法について

表：調査実施状況

２．2015 年度

1）認知症ケアにおけるスーパービジョンの実施

＊認知症介護指導者（7 名）がこれまでに自職場において実施したスーパービジョンを「スーパービジョンの振り返り」（野村：2007）に記入し、1 人 5 回のスーパービジョ ンを名

古屋キャンパスにて実施。

2）SWSV 理論研究会の開催（第 2 回）

12/26（日）10:00-17:00 少人数でソーシャルワーク理論に関する研究会を開催。

3）認知症ケア現場におけるスーパービジョンの現状とニーズに関するアンケート調査

目 的：認知症ケア現場でのリーダーを担う職員のスーパービジョンの現状とニーズを明らかにする。

◆調査協力府県は以下の通り。（ ）は、本年度のリーダー受講者数

兵庫県（104）、大阪府（80）、京都市（72）、福井県（29）、京都市（26）、山梨（48）、大阪市（30）、長野県（42）、三重県（22）、富山県（56）、名古屋市（25）、和歌山（30）

３．2016 年度

1）認知症介護指導者を対象にしたスーパービジョンの実施

・2016 年 4 月～2017 年 3 月の間に全 7 回のスーパービジョンを実施した。

・スーパービジョンについて勉強したいという希望者が 4 名、新たに加入した。

2）認知症ケアのスーパービジョンの 2 年間経過をまとめた

汲田千賀子（2017）「認知症ケア現場のリーダーに対する継続的スーパービジョン」『同朋福祉』第 23 号（通巻 45 号）111-130

４．2017 年度

1）認知症介護指導者を対象にしたスーパービジョンの実施　（全５回）

2）日本認知症ケア学会第 18 回大会での自主企画シンポジウムの開催

タイトル：認知症ケアにおける複層的スーパービジョンの必要性

―スーパーバイザーを支援する取り組みを通して―

日　時：2017 年 5 月 26 日（金）　沖縄コンベンションセンター

登壇者：野村豊子　　日本福祉大学

汲田千賀子　同朋大学

西村優子　　地域包括ケア人材・開発研究センター

引野好裕　　特別養護老人ホーム 高槻けやきの郷

神谷真理　　グループホームさち

3）学会報告（日本認知症ケア学会第 18 回大会）

汲田千賀子「介護現場におけるスーパービジョンの現状と課題」

５．2018 年度

1）認知症介護指導者を対象にしたスーパービジョンの実施

今年度も昨年度同様の約 10 名の認知症介護指導者とのスーパービジョンセッションを実施した。（全 5 回）

2）日本認知症ケア学会（6 月：新潟朱鷺メッセ）での自主企画シンポジウムの開催

テーマ：認知症ケアにおけるスーパーバイザーの立ち位置ジレンマ

日　時：2018 年 6 月 16 日（土）14:40～16:00

登壇者：野村豊子（日本福祉大学）

汲田千賀子（同朋大学）

神谷真理（さちコーポレーション　グループホームさち管理者）

西村優子（社会福祉法人グループリガーレ　スーパーバイザー）

城山いづみ（アサヒケアサービス株式会社　介護統括部長）

福井梨恵（五領・上牧地域包括支援センター　認知症地域支援推進員）

以下の認知症ケア学会自主シンポジウム（2017）抄録に示す通り、認知症ケアにおけるスーパーバイザーの立ち位置とジレンマに関して報告とディスカッションを行った。フロアーの方たちの積極的な参加も加えてこのテーマの重要性が浮き彫りとなり、SV センターで実施してきたスーパービジョンの方法への関心と期待がよせられた。

（抄録より）

介護施設においてスーパーバイザーを担う人材の多くは、特別養護老人ホームならばユニットリーダー以上、グループホームならば、ユニットリーダーや管理者となることが多い。しかし、ユニットリーダーの多くは、自分立ち位置やスーパービジョンをする上で、様々なジレンマを抱えながら仕事をしている。本シンポジウムでは、スーパーバイザーの多様な立ち位置と実際に日頃のスーパービジョンを通して起こるスーパーバイザーのジレンマを具体的に取り上げながら、認知症ケアのスーパービジョンのあり方を検討していく。

① スーパーバイザーの立ち位置

スーパービジョンの契約関係について、これまでは「同じ職場内の上司、部下関係」と説明されることが多かった。しかし、介護施設で行われるスーパービジョンとその場面を限った場合、これまでのような契約関係のみでは成立しにくい構造になっている。直接上司、部下関係にない職員へのスーパーバイズを行う場合にはどのようなスーパービジョン関係を構築しているのだろうか。また、様々な立場や役職を一人で担わざるを得ない小規模の事業所の場合には、どのような立ち位置を意識しながらスーパーバイザーとして職員と向き合っているのだろうか。「スーパーバイザーの立ち位置」というキーワードでこれらのことについて実践現場のスーパービジョンの構造や関係構築についてみていく。

②スーパーバイザーの抱えるジレンマ

スーパービジョンは、スーパーバイジーの「スーパービジョンを受けたい」という気持ちや、スーパーバイザーの意識する「スーパービジョンの必要性」に応じて実施される。その多くは継続的、定期的に行うものではないことから、スーパーバイザーはその後スーバイズをした職員がどのような気づきを得て、介護実践しているのかについて確認することができないことが多い。職員とスーパーバイザーとの距離が離れている場合にはよりこの傾向は濃くなっていく。スーパーバイザーの抱えるジレンマの例としては、このようなことがあげられる。実際にはどのような内容のジレンマがあり、そのジレンマとどう向き合っているのかについて事例をもとに報告してもらい、ジレンマへの対応についても考えていきたい。

６．認知症ケアに関わるスーパーバイザーのスーパービジョンに対する記述的評価より

スーパービジョンを通して得たものとして参加したスーパーバイザーの方たちの記述を示す。

振り返りの SV 場面を通してロールプレイを実施し、深めた見方や視点を基にバイザー役を繰り返すことで違う自分の発見につながったり、同じ場面でバイジー役を担うことでバイジーの気持ちを推し量ることができた。特にロールプレイで新たな発見につながった経験はバイザーが黒子として傍らに寄り添い具体的な応答を示唆したり、言い換えのポイントのヒントを与えてもらう体験は貴重であった。自分自身の不完全で不全感を持つ SV の場面について、よかったのか、よくなかったのかという評価ではなくバイザーの感情をどのように受け取るべきであったか、その感情はどこから来るのだろうか、バイザー自身が自らの経験を振り返り経験の中から解決の手がかりを探り出すことができることの大切さにいつも引き戻ることができた。

スーパーバイジー自身が自身の課題との向き合い方において、前向きになっていると感じる。スーパービジョンを実施することにより、話を聞いてもらえる時間や聞いてくれる存在がいること。それだけでも、スーパーバイジーが抱える不安や孤立感を解消できる要素になると考える。また、スーパービジョンの実施において、スーパーバイザーのスーパーバイジーと共に考える姿勢は、安心感があるものであり、スーパーバイジーの自己肯定感を高めることに繋がると考える。

私は、スーパービジョンを受けることによって 2 つの効果があったように思う。

一つは、その問題を避けるのではなく自分自身の課題と向き合えたこと。人は楽な方に流され問題を避けようとする。一人では逃げてしまいそうなことでも、スーパービジョンを受け、一緒に考えてくれる人がいることで、私自身の課題を向き合うことができた。自分自身の成長のためには、自身を振り返り、現在の位置を理解することは重要である。その時、気持ちを維持していくためにも、スーパーバイザーの存在があるかないかでは、心強さが全く違う。もう一つは、他者に話すことによって、問題の本質が見えるようになったことである。私自身は問題の中心を捉えていたつもりでも、スーパービジョンを受けることによって、問題の本質は別の場所にあったと発見することが多くあった。

今後の課題と方向性

第 1 研究についてはケアマネージメントにおけるスーパービジョンの方法に関して、評価の方法・評価指標の作成に向けて検討中である。第 2 研究については、SV センターにおける成果を活かし、別組織において認知症ケアのスーパーバイザーへのスーパービジョンに関して研修を含めて継続的に実施する方向を検討である。また第 1 研究と第 2 研究の成果を中心に「認知症ケアにおけるスーパービジョン」（仮称）を本年 7 月に刊行予定である。更に、第 3 研究に関しては、今年度から開始された科研 B において英国の歴史的展開も含めて、海外におけるソーシャルワークスーパービジョンの理論研究を継続する予定である。

主要業績

汲田千賀子、野口典子「高齢者施設におけるユニットリーダーの職務と求められる能力」『現代社会学部紀要（中京大学）12(1), pp25-40, 2018 年 9 月

汲田千賀子、野口典子「認知症ケアにおける複層的スーパービジョンの必要性 ： スーパーバイザーを支援する取り組み例から」『同朋大学論叢』25, pp35-46, 2018 年 9 月

野村豊子「ソーシャルワーク・スーパービジョンとは何か」『保健の科学』59(12), 798-803, 2017 年 12 月

汲田千賀子「認知症ケア現場のリーダーに対する継続的スーパービジョン」『同朋福祉』23,pp111-130,2017 年 1 月

照井孫久「ケアリスクマネジメントの前提としてのリスク概念の考察」『石巻専修大学研究紀要』27 号,pp49-55,2016 年 3 月

照井孫久「ケアのリスクマネジメントにおける方法論の研究」『石巻専修大学研究紀要』26 号, pp37-45,2015 年 3 月

来島修志「事例検討会の進め方と意義」『認知症ケア事例ジャーナル』7 巻 3 号,pp311-316,2014 年 12 月

５　権利擁護支援

日本福祉大学
スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

Ｄグループ「権利擁護支援のＳＶ」研究成果報告書

グループ長　湯原悦子

はじめに

権利擁護の領域におけるスーパービジョンを考えるにあたり、ここでは湯原が専門とする司法福祉（主に犯罪・非行）に焦点化して考えてみたい。司法福祉領域では、支援の担い手としてまず挙げられるのは家裁調査官や法務教官などである。最近では社会福祉士が刑務所や少年院に職員として雇用され、犯罪や非行をした者の社会復帰支援に携わっている。彼らは概ね、支援する相手の社会復帰を目指して仕事をしているが、司法機関、矯正・保護機関で出会う支援者たち（公務員）は権力をバックに仕事をしている。上下関係は明白、うかつに本音を言える状況ではないため、通常のソーシャルワークの原則を適用することが難しい状況にある。しかしながら、最近は司法領域で働く社会福祉職が増えてきており、スーパービジョン体制の構築や、スーパーバイズのあり方などについて考えるのは喫緊の課題である。彼らがソーシャルワークの精神を失うことなく、司法領域で活躍するためにはどうしたらよいだろうか。

研究対象・領域（非行）の設定

今回は司法福祉領域のなかでも、非行少年を対象とした実践研究を行うこととした。背景として、非行少年の数そのものは減っていても、再非行少年率は高まっているという現実がある。

非行少年が（大人が期待する形で）「非行をやめる」ことはたやすいことではない。少年たちがこれまで生きるなかで培ってきた価値観を変えることは難しく、そもそも非行の渦中にある場合、変わる必要性を感じていない場合も少なくない。しかし、非行を続けることは本人の人生にとっても社会にとってもマイナスが大きく、望ましいことではない。現在、多くの支援者たちが自ら行う支援は今まで通りでよいのか、どのようにしたら効果的な支援を行うことができるだろうかと逡巡している。どうしたらよいのか。ここでは次の3点に留意して考えてみたい。

①非行少年は独特の社会で、一般社会の考え方とは異なる価値観、知識を有している。

⇒非行少年の独特の価値観、知識は後々、彼らの人間関係の築き方や職業選択等に大きく影響していく。そのため、彼らが受け入れやすい形で「非行とは別の生き方や幸せ」があることを提案していくことが必要である。

②非行少年は基本的に本音を語れない（本音を言うと怒られる、反省していないと見られる、

少年院から出られない等)。

⇒一方で、その本音のなかにこそ信念があり、彼らなりに大切にしたい生き方があり、立ち直りのヒントがあるのではと考えることが必要である。

③非行少年に関わる支援者の関わり(公的)は「期間限定」で、必要に応じて関わり続けることはできない。

⇒非行少年に「業務」ではなく、よき隣人、友人として関わり、ゆるやかなつながりを保てる場や関係が必要である。

重要なのは、非行少年の立場に立ち、再非行防止の意味と必要性を問い直すことではないだろうか。そのためにも彼らの本音をしっかり汲み取り、こだわりをストレングスと捉え、社会に認められる形で活かしていけるような提案を行っていくことが求められる。

再非行防止研究会　Study Club の実施

非行少年の立場に立つためには、まずは彼らの話を聞くことから始めなければならない。そこでこの地域を中心に活動する、元非行少年が代表を務める NPO「再非行防止サポートセンター愛知(再サポ愛知)」に協力を依頼した。再サポ愛知メンバーと課題意識を共有し、協議のうえ、非行少年と出会える場として、定期的な勉強会を開催することにした。この勉強会の対象は非行少年とその家族、関係者、一般の人たちで、基本、年6回の実施である。形態は、①講師からの話題提供と、②非行少年のライフストーリーの二本立てで、話題提供の内容は勉強会に先立つ形で実施したシンポジウムでのアンケートをもとに薬物、就労継続、性教育、人間関係、などを選定した。

講師からの話題提供では「非行とは別の生き方や幸せ」があることを提案すること、非行少年のライフストーリーでは、語る少年自身が自らについて理解を深めること、聴衆は少年が実は心のなかで何を考えていたのかを知ること、少年のありのままの語りから気付きを得、支援にあたり尊重すべきポイントを知ることを通じ、支援を行うにあたっての基軸となる「少年たちの視点(本音)」を確認、理解を深めていくことを目的とした。

非行少年のライフストーリー

再非行防止研究会としての StudyClub は 2015 年に6回、2016 年に6回、2017 年に6回、2018 年に2回の計 20 回実施した。それぞれのテーマは以下の通りである。

2015	第1回	4.19	楽しい人生の送り方はたくさんあるんだ！　～進学校からの中退経験を振り返って～
	第2回	5.17	再非行から離れるための薬物と暴力団　～実際に経験した薬物と暴力団からの離れ方～
	第3回	6.21	私らしい学び方を見つける～自分に合った就学の仕方・勉強法～
	第4回	7.21	再非行から離れるための性　～子どもたちにとって、親たちにとって知っておくべき性の知識～
	第5回	8.23	再非行から離れるための人間関係　～実際に成功した地元での不良交友のよい絶ち方～
	第6回	9.27	再非行から離れるための親子関係
2016	第1回	4.23	出院からの就労について＆非行経験がある少年の自身の体験談～建設職人・親方になるまでのストーリー～
	第2回	5.28	出院からの進学について＆非行経験がある少年の自身の体験談～司法書士になるまでのストーリー～
	第3回	6.25	暴力団・薬物・刺青について＆非行経験がある少年の自身の体験談　～暴力団離脱者の困難　社会はどう向き合うのか？～
	第4回	8.27	出院後、地元・親元で不具合が生じた時の対処法＆非行経験がある少年の自身の体験談　～出院後地元・親元に戻り苦労したこと、その時のベストな対処法～
	第5回	9.24	家庭崩壊からの家族の絆　＆非行経験がある少年の自身の体験談　～親子関係と非行の繋がり～
	第6回	10.22	少年院・少年鑑別所について　＆元非非行少年と現非非行で悩む保護者の対談　～矯正関係者の方たちとの意見交換～
2017	第1回	5.20	就労を続けるコツ　～よくあるトラブル　克服できた例とできなかった例～
	第2回	7.15	もう一度学校に行きたい　～さまざまな学びのルート紹介～
	第3回	9.16	この人の話をきこう！①私の生き方　～元暴走族総長からNPO理事長へ～

	第4回	11.18	少年院を出た後はどこで暮らす？～4Sホームでの生活や色々な出来事～
	第5回	1.20	再サポスタッフからみた非行少年と親との関係　～実例から学ぶ事～
	第6回	3.17	この人の話をきこう！②広島のばっちゃん　～非行少年・少女たちの居場所～
2018	第1回	5.27	虐待の淵を生き抜いて　～人にも自分にもあたらない社会をめざして～
	第2回	7.29	自分たちで立ち直らせてほしい～依存症からの回復とエンパワーメント～

表：StudyClub 開催状況

非行少年のライフストーリーについては、17 名の少年に語ってもらうことができた。ここでは非行のタイプが異なる3名の少年のストーリーを抜粋して紹介する。

＊＊＊

1．A くん

自分はしっかりとした家庭で育てられ、非行とは無縁な家庭で育ってきた。幼稚園くらいのころはそこそこ活発な子だった。小学校のときいじめられ、活発さはなくなった。でもスポーツでいい成績を収めるようになったため、いじめもなくなり、充実した日々を過ごした。

中学になると部活が必須だったので、運動部に入った。1 年生のときは成績も悪くなかったが、1 年の秋くらいに骨折して、1 か月くらい部活に入れず、復帰した時には以前と同じように活躍できなくなってしまって、すごく衝撃を受けた。がんばろうと思っていたけど成果もでなくて、部活でがんばる気持ちが失せてきて、勉強も身が入らなくなっていき、成績も最初のころはトップクラスだったのに、どんどん落ちていった。自分としては小学校時代の取り柄がなくなってしまい、プライドもなくなり心も傷ついていた。

部活や勉強に身が入らなくなるとテレビゲームやネットに時間を使うようになって、学校には行っているけど現実から目をそらすようになっていた。でも、不登校にはなりたくないと思っていた。誰にも心配かけたくないし、弱い人間だと思われたくなかった。だから毎日部活にも参加した。人間関係などの問題は特になく、全体的に見れば中学時代は充実していたと思う。でも、勉強や部

活では大きなダメージを受けていた。

高校には推薦で入った。そこでは部活をやらずにひたすら勉強だけをやる、ということだった。部活で傷ついた自分にとってはいいことだ、と思った。勉強だけのコースと、普通コースと、部活コースがあるような感じだった。勉強だけコースは少人数で隔離されていた。人間関係の面で合わない人も多く、その悩みで傷つくようになっていった。中学では部活・勉強、高校では人間関係と悩むようになり、親には気づかれないよう、こっそり犯罪行為に手を染めるようになっていった。

人のもの盗っちゃだめだとか、理屈では悪いっていうのは分かっているけど、誰にも気づかれなければ問題ないし、被害者の立場になりきれなくて、こんなことされても大して困ることはないんじゃないかと思い、中学、高校でこっそり犯罪に手を染めていった。

ある日、犯罪を目撃され、逮捕された。自分としては、隠れて誰にも見つからないよう犯罪行為をしていたので、まさか見つかることはないだろうと思っていたが、被害者に発見されたときは頭が真っ白になり、加害者として自分が現場にいるって状況が、自分が自分じゃないっていうか、夢のなかにいるような不思議な感じで、頭が混乱した。警察が到着して、何時何分逮捕って手錠をかけられ、逮捕と言われても夢のなかのようで呆然として、ただただ驚いていた。警察署に連れて行かれ、何時間も取り調べをされた。自分としては軽犯罪なのでそんなにたいしたことはないだろう、ちょっと取り調べられたら数日くらいで解放されるだろうと思っていた。でも、夕方に捕まってその日の夜遅くまで取り調べがあり、留置場に移送されたときは畳とトイレ以外何もない部屋に閉じ込められることになったので、自分がしたことの重大さにやっと気づいた、今思えば。留置場は何もなく、絶望感のみ。一方で、嫌だった高校生活から抜けられるっていう解放みたいなものを感じることもあって、複雑な心境だった。

取り調べがないときは、何もない部屋で過ごす。同級生は今頃授業しているのかなとか、彼らは自分がこうやって捕まっていることを知っているのかなとか、両親はどう思っているのかなとか檻の外の様子に思いを巡らせていた。留置場は読書の他には本当に何もすることがなかったので、担当刑事の取り調べがあった方がむしろありがたいと感じた。留置場では 10 日くらい、不安な日々を過ごしていた。

逮捕されてから 4 日後くらいに警察署で父親と面会できた。それまで全然眠れなくて、何ていおうか、みじめな姿を見せるのがはずかしくて、くやしくてしょうがなくって、いざ父と会ってみたら、警察署の面会室の暗さも相まって、今までにないくらい真っ青な顔をしていた。そこで自分はとんでもないことをしたということを再認識し、悔しい気持ちがこみ上げてきた。

ずっと留置場では 1 人きりだったが、数日後、別の少年が自分のいた留置場に入ってきた。彼

は不良グループに入っていて、先輩とお酒を飲んだ後、無免許なのに車を運転して事故をし、先輩を傷つけたということだった。一見、近寄り難い印象だったけれどいろいろ話してみると、自分にパンを買って奢ってくれたり、優しいお兄さんであることが分かった。彼は不良グループに入ったことをとても後悔していた。その話を聞いて心が痛んだ。お互い留置場という特殊な場所に閉じ込められていて、他にやることもないので、話しあったり冗談言って笑いあったりとか、お互いの過去、たどってきた経歴とか、厳しい家庭環境の話をして、ともに泣いたり、とても濃い時間を彼と過ごした。自分は彼より先に警察署を去り、少年鑑別所に行くことになった。「頑張れよ！」「先輩も頑張ってください！ごきげんよう。」そんなやり取りをして警察署を後にした。

留置場から鑑別所に移送される際、高速を使った。外が雪で覆われていたり、葉っぱが散っていて、拘束されていたのは 10 日間なのに、外の景色が変わっていることに驚いた。途中、住んでいた家が見えたが、すごく遠く感じた。これから先、1 か月鑑別所で過ごすと聞いたとき、すごくつらかった。

鑑別所は警察署とは違い、スケジュールが綿密に決められており、自分と向き合う時間がたっぷりあった。そこで自分が犯罪をした理由を考えた。窃盗だったらお金がほしかったとか、そういう理由は説明できるが、なぜ人を傷つけてまで犯罪をするのかとか、その根源的な理由はいまいち分からなくて、毎日考えても分からなくて、不思議だった。なぜ自分はそんなことをしたのだろうかと考えてみたところ、自分が中学や高校のときに、隠していたけれど、心に大きな穴が開いていて、そのせいで被害者のこととか考える感覚がマヒしていたのかなとか、そう感じるようになった。自分が事件を犯した理由を考えるにあたり、ハインリッヒの法則があてはまると思って、犯罪をした頂点の理由の下に、いろいろな犯罪の要因が積み重なっているのかなって思った。自分が犯罪をした理由について、全部説明することはできないと思う。自分では気づかないうちに影響を受けていることもあると思う。自分として、だめだったと思うのは、自分が悩んでいたことを誰にも相談せず、どうせ話しても解決しないし子の状況から抜け出せるはずはないと抱え込んで、人を信用していなかったこと。悩みがあって、ひきこもったり、自殺に追い込まれる人は自分に矛先を向けるのだと思うが、自分は逆で、矛先を外に向け、被害者を傷つけていたのではないかと思う。犯罪の理由を考える上で、再サポ愛知のスタッフ、弁護士の方、父親と話をして、自分の犯罪について振り返ることができ、再犯せずに今に至っていると思う。

鑑別所から出て社会に戻った時に、他県に連れて行ってもらった。いい再スタートを切れた、参加したマラソンも完走できたのは大きな自信につながった。その後、フリースクールを経営する方に会い、今は高卒認定をめざし、最近は英会話をして英語力向上に努めたりしている。また、

工場で週2回働き、飲食店でもアルバイトすることになった。高校は退学になったけど、勉強にしても社会経験についてもいいスタートが切れたのではと思っている。通信制高校に入ることができ、アルバイトで人のために汗を流して働く楽しさを感じており、感謝している。これからはアルバイトをしつつ、フリースクールで高卒認定試験、英語検定など資格を取り、大学受験に向け自信をつけていければと思う。将来は国際関係に携わる仕事や、非行少年の立ち直りに関わる警察官や法務教官といった職業に憧れている。非行少年から立派な大人になれるように頑張っていきたい。

2. Bくん

少し前まで少年院に入っていました。今日は僕の本音を話したいと思います。幼稚園時代は親が教育ママで、めっちゃ勉強していました。小学校受験をしてエリート小学校に入りました。でもすごい問題児で、小3のときに学校から自主退学をしてくれと言われ、公立の小学校に転校しました。母が教育ママだったので、家庭教師や習い事をして、すごく勉強しました。中学受験をし、その地方では有名な中学に無事に合格、エリート街道ど真ん中を走っていました。受験前、母は「第一志望に合格したら遊んでいいよ」と言ってくれたのに、いざ中学に入ったらまた塾に入れられて、え、また勉強するの？と、ここで初めて親に反発心を持ちました。母親に反発し続けたら、ついに母は家に帰ってこなくなりました。…僕のせいで。そこからは誰もうるさく言う人がいないので、転落人生の始まりです。勉強はしなくなりました。中1は学年 1 番だったんですけど、中3では下から 1 番でした。

両親は僕が中学のとき、事実上離婚しました。僕は中3で公立校に転校しました。全く勉強しなかったんですが、一応、県立高校に入学しました。でも目的もなかったのですぐ不登校になり、勉強もついていけず、2 回の謹慎処分、校内暴力で退学になりました。学校やめると言ったら、彼女にふられました。これはかなり応えました。彼女にふられてぐれちゃった、悪い典型です、僕は。16 歳になったら免許をとって、バイクに乗り始めたはいいけど、つるむ仲間がいなくて寂しいな、という日々が続きました。夏に仲間ができました！でもその仲間はたばこ吸うし、夜遊びするし、いわゆる不良と呼ばれる人たちでした。「不良は徐々に始まる」という話がありましたが、僕も同じで、最初は夜遊び、深夜徘徊からはじまりました。犯罪じゃないからいいじゃんと思って、つぎにタバコ、非行や暴走をして、犯罪をしました。目的は特になかったです。例えば強盗。強盗はお金がほしい、何らかの利益を得たいからやるんですが、僕の場合は誰も得しない…使わないもの、スーパーの卵を盗ったり。盗るという行為自体が楽しかった。16 歳の冬、初めての逮捕。

県警の人が来ました。初めての留置場では 3 日間、ずっと泣いていました。修学旅行に行って家に帰れない小学生のような気持ちでした。お父さんお母さん家に帰れない、なんでなのって。20 日間拘留、鑑別所で規則正しい生活をし、充実はしていたんですけど全然反省していませんでした。早く出て何か悪いことしたいなって思っていました。審判では、中等少年院送致です。初犯なのに。僕の場合、やったことが大きすぎて、少年院に行くことになりました。

少年院は、家から片道、電車で 4 時間かかります。父親はたった 30 分の面会のために、毎週毎週、8 時間使って面会にきてくれました。毎週毎週、楽しみにしていました。僕はそれが本当にうれしかったです。ここでようやく父親に迷惑をかけたくない、更生を誓うって言ったら大げさかもしれませんが、悪いことをしても何も特はない、親に迷惑かけたくないなって、それが正直な気持ちです。大学に行くことを決意しました。絶対、大学に行ってやろうって。その時は高校中退で、力仕事する筋肉もないし、スポーツも何も、僕は勉強しかないかなって、昔を思い出して猛勉強しました。

出院してすぐ、センター試験を受けました。無事に合格し、今、大学生です。非行について。余罪はたくさんあります。占有離脱物横領、たまたま自転車をパクったらそれが盗難車でした。窃盗のほか、器物損壊…。逮捕された事件については、事件の次の日の朝、yahoo!のトップページに載っていました。マジでこれ、背筋が凍りました。本当に恐かったです。けが人や死亡者はいなかったんですが、車はたくさん壊れました。

非行の動機について、将来の不安から、現実逃避をした自分がいました。やりたいことを探そうとするんですけど、今が楽しければいいやって、今生きてればいいやって感じで生きていました。よく周りからお母さんが帰ってこなくなったからぐれたんじゃないのって言われるんですけど、それは僕の中では全く違うって思っていて、お母さんとは今は全然普通に連絡を取るんですけど、寂しいという気持ちは…あったかもしれないです、あった結果がこういう表現の仕方だったかもしれないです。やりたいことが見つからないので新しいことを求めていたんですけど、違う方向で新しいこと、喫煙、暴走、補導で済むようなことから始めて犯罪に至りました。

少年院で考えるのは事件のことです。けが人が出ないで済んだ、死亡者も出ていない、損害賠償もそれほどの額ではなかったんですけど、もし誰か指一本でもけがをしていたら、僕はここに居らず少年刑務所にいたと思いますし、もし誰か死んじゃっていたら、僕の家族が生きているかも分からないです。それくらい大変なことをしてしまった、被害者の方には申し訳ないというか、そういうことをしても僕は少年法に守られ、被害者の人は僕がどこで何をしているのかたぶん知らない、被害者の方には本当に申し訳なかったと思います。

家族について、父親は毎週毎週面会に来てくれて、近所の人にはバイトが忙しいから、受験だからってうそついてくれて、本当に迷惑をかけたくないって思いました。将来のことは大学に行きたい、勉強がしたい。特技と言ったら自分には勉強しかない、それ以外に術がなくて、今まで小学校で散々勉強してきたんで。交友関係について、信頼できる友達がほしい。不良のとき、つれは何人かいた。共犯者が複数いて、そのなかに K 君がいて、僕は K 君があまり好きではなくて、でもいつも一緒にいたんです。なんでかっていうと、K 君はけっこうやんちゃしている子で、力があったんですよ。その K 君にくっついていたら、自分はたいして力がないのに、けっこうでかいツラして…要するに、僕はC君を利用していました。うすっぺらい関係でした。人を利用する・される関係って、例えば暴走のときにケツもちってあって、警察が来たら最後尾で蛇行する役割で、ケツもちが一番最初につかまるんです。でも、パトカー来たら絶対先に逃げますね。友達友達って、俺ら一生友達だからなって言いますけど、口だけです。自分さえ捕まらなければ、別にC君が捕まってもいいやって。自分だけ良ければって。今振り返るとそういう気持ちでした。

少年院のなかで大変だったのは、勉強する時間がなかったことです。食事中、就寝時、勉強していたら怒られます。21 時就寝なんですけど、一度、22 時まで勉強させてくださいって言ったことがあるんです。そうしたら「何言っているんだ。犯罪しなかったら好きなだけ勉強できたよね。誰が悪いんだ？君が悪いんでしょ」って。少年院の法務教官に言われました。勉強する子はいい子っていうのは、少年院のなかでは通用しなくて、衝撃を受けました。勉強しているから褒められるっていうのは、少年院のなかではいっさいなかったです。勉強したいっていうのも欲望です。学習態度っていう項目はあったんですけど…。社会では全く問題ないことが、例えば笑うと不正を疑われる、友達というか同僚、名前しか知らないんですけど、しゃべったらだめで、にや～って笑っただけで懲罰房に連れて行かれます。ごはんの時間におなかいっぱいで、隣の人にプリンとか 1 個でもあげたらすぐに連れて行かれます。集団行動は、好き勝手に生きてきたんで、難しかったです。最初は行進が嫌で嫌で仕方なかったです。成績制度、違反行為が 100 種類くらいあって、これこれこういうことをすると出院が伸びますよって項目、それ以外に態度とかもあって、少年院でだらっと立っていたら、社会では全く問題なくても、少年院では間違いなく態度不良で怒られます。社会では全く問題ないことが、少年院ではすごく問題になるんです。社会がだらしなく見えます…。過激発言かもしれませんが。

少年院の退院時には、父親が迎えに来てくれました。コンビニに入ったんですけど、僕、コンビニが怖くて、茶髪のお兄さんとかいて、僕、本当に怖かったです。社会より少年院のほうが絶対厳しいです。その時感じたのは、少年院で学んだことをそのまま社会で実践していけば、社会で

全然、やっていけるのではないか、と。僕、それは確信しています。椅子一つ座るのでも、言葉使い一つでも、少年院で学んだことをちゃんとやっていけば、犯罪はしなくてすむと思います。ちょっと表現がおかしいですかね？うまく伝えられないです。

あと、何事にも感謝できるようになりました。家族に対してももちろん。今日は同じ大学の親友と来たんですけど、友達もできましたし。恵まれています。学費は安くないですし、犯罪して散々な人生を歩んできたのに、まだ期待してくれる親に涙が出るくらい感謝します。少年院に入って親に感謝、むちゃくちゃするようになりました。恥ずかしいけど正直な気持ちです。

誤解を招くかもしれませんけど、もう二度と犯罪をしないという気持ちは別に、そんな気持ちはあまりなくて、もう家族に心配や迷惑をかけたくない、こっちの気持ちが強いです。今から酒飲んで暴走してこい、今から犯罪しろって言われても全然できるんですけど、もう家族に心配かけたくない、家族に心配かけたくないんです、僕は。この気持ち一つで、父親が毎週毎週面会に来てくれて、親に感謝する気持ちっていうので今の自分があります。親がいなかったら、もっともっと悪い方向に、悪い方で極めていると思うので、家族っていうのはものすごく大事だと思いました。僕が今、あるのは家族のおかげです。…これはどこか何かの本に書いてあったんですが、「人を殺すことが一番悪いことだとすれば、人を救うことが一番よいことである」。僕はこれからは人を救っていきたいなと今、考えています。大学を出てから人を救う仕事をしたい、医療関係の勉強をしているんですけど、家族にも金銭的にだけでなくいろいろな面で恩返しをしていきたいですし、ちょっと疎遠になっている母にも、ちゃんと話す機会がくればいいかなと思います。まずは大学を卒業することをがんばりたいと思います、今、中卒なんで。そんな感じです。今日は聞いてくださってありがとうございました。

3. C くん

非行に走ったのは中1のとき。両親は 2 歳のときに離婚、その時の記憶はあまりない。それ以降、母親と暮らす（今、父親とは会っている）。それが非行の原因、母親一人で、教育が悪かったとかと言われるけどそんなことはないと思っている。少年院の先生や鑑別所、裁判所は何かと原因をつけたがるが、そんなことはない。

小学校まではまじめ、生徒会やって、野球やって、空手もやっていた。中学に入学してから友人関係があまりうまくいかなくて、仲のよい一つ上の先輩と遊ぶようになったがその人が不良で、金髪で、顔もイケメンで、もてて、恰好いいな～と思って、遊んでいるうちに僕、やんちゃになっていきました、コンビニからはじまって自転車盗んで。

中2になって、他の中学校の人と遊ぶようになって、原付で走って、万引き、ケンカが始まった。この頃は先ほど話した先輩とは遊んでいなくて、自分たち同級生で遊んでいた。一つ上の先輩が暴走族に入って、僕たち原付で遊んでいるのに目をつけた暴走族にいたのがその先輩。中2のとき友達 2 人捕まったんですけど、鑑別所から出てきて、楽しくて。僕、これでも学校は行っていて、ちゃんと。夏休みに家出して、そこからは完全に悪くなっていく一方だった。中3にまた2人が同じ事件でつかまって少年院に行ったんですけど、その時期僕は、1 つ上の先輩が入った暴走族に入っちゃって、一番年下で、3つ上の人がアタマやってて、一番下だから気合い入れなきゃ、気合い入れなきゃと思って、ケンカして、悪い方向に行ってしまいました。

先輩たちが 17 歳で引退、もともと暴走で捕まった先輩たちが 10 人くらいいなくなって、年下が残っちゃって、僕がそこから、16 歳でアタマになった。僕がアタマになってからは友人たち 30 人くらいが集まって、盛んなチームになっていって、僕は 17 歳のときに逮捕された。

他県の少年院に入院。そこから少年院の生活が始まった。起床、掃除、洗面してから食事、作業やらされて、作文とか書いたりして 1 日 1 日過ごす。僕は、少年院に入って更生できる、とはあまり思っていない。自分、一人ひとりの意思が大事だし、作業はやらされているだけで、やらないと成績下がっちゃうし、そうなるとやらなきゃいけなくなるじゃないですか。やらなきゃいけなくなったってことは、仕方なく、むりやりやらされている、自分の意思でやっているのではない。更生するのは自分の意思だし、真面目になるのも自分の意思だし、それがいい方向につながるとは思えなかった。ただ成績だけ気にしてなんてのは…そうですね、矛盾とかも多くて。理由の一つ、対人関係、他の院生としゃべったら不正で、調査として個室に入れられるんですけど、社会に出ての対人関係は人とどううまくコミュニケーションとっていくか、関係が悪くなった人とどうコミュニケーションとるかが大事になる。でも、関係悪くなった院生とは引き離されちゃうんで、そこは向上できない。本当なら仲悪くなっちゃった院生とどう付き合っていくのかも、やらせてくれるのが少年院であってほしいのに、一切関わらせてもらえない、そういう意味ではコミュニケーション能力は上がってこないと思う。あまり、少年院で更生できるとは思っていない。

僕は趣味が格闘技で、空手始めて、一時期格闘技に出て、ちやほやされて、出院後にまた始めた。それがあったから更生できたのかなと思う部分と、それがなくても更生できたのかなと思う部分がある。年齢的にも 18 歳で出院したので、引退で、悩ましいな、社会で友達とどうやっていこうとか考えたけど、出たらそんなに心配はなくて、自分の意思固まっていたんで、うまくこう、通過できたと思う。母親ともけっこう仲良くて、今も一緒に実家で仲良く暮らして、姉とも。親を大切にしなきゃなって心に気づくのはたぶん 18 歳、19 歳くらいからだと思う。それまでは適当なこと

をして、迷惑をかけて遊んで、非行をしたとしても、僕は少年の非行は悪いと思っていない。非行もいろいろな目的がある、最近報道されている事件のような非行と、楽しさでやっている非行とは違う。楽しかったのかもしれないけど…。いろいろな非行があるので。

少年のうちに非行は気付けるし、更生できるから矯正施設がある。刑務所は他の人としゃべれたり、ポイント貯めて何か買えたり、けっこう違う。少年のうちに経験したことは、変わるためにはいいのでは、と僕は個人的に思っている。やらなければ気づかないし、やらない子もいるけど、やって気づいたほうが分かってくれると思う。時間はかかるけど。小 3 で万引きして、その子に万引きするなと言って、小5でやめられるか分からないけど、18 歳くらいでやめることができたら、僕はそれでいいと思う。やらせてみて気づかせることが大事なのでは、と個人的に思っている。

出院してからは現場仕事をしていたが、やめてバイトを始めた。関わる人も大学生とかが多くなったりして、交友関係が変わってきた。それも一つ、非行から離れるカギになったかなと思う。あとやっぱり、自分の目的。少年院内で考えた生活設計はできていない。毎日勉強して、高卒認定取って、大学行きたい、とか考えていたけど。犯罪はしていない。

今、免許取れて、車に乗っている。逆に、練習熱心になった。周りの友達とかは悪いことしたりしているけど、今、全然興味がなくて、自分の道に向かっている気がする。自分の夢や目標を持つのも、世界が広くなるのも、変わっていくきっかけになると思う。少年たちには目指すところをつくってあげなければならない、少年たちどこにいったらいいか分からなくなるので。…何か質問ありますか？

Q　少年院入っているときから非行をやめようと思っていた？

A　入っているときに思っていたけど、暴走族引退の、一番輝いている時期だったので、未練はあった。出てから皆に引退式やってもらおうかな、とか。

Q　年齢が引退の時期に達していた、というのが一番のやめるきっかけ？

A　あとは家族の存在が大きかった。家族を大切に思えてきた時期が 18 歳くらいだった。あと、僕自身が非行に対する考え方を変えた。少年院に入っているときはできていなかった、少年院ではあまり変わらなかった、正直に言うと。

Q　自分の子が少年院に入っているけど、出てからが心配。非行が遊び感覚だった、と言っている。

A　出てから変わる。それが楽しかった、サッカーしに行こうぜ、というのが僕たちはバイクだった。遊び感覚だった。非行じゃないにしても、18、19 歳は人生が変わるきっかけになると思う。高校野球でも、甲子園出られなかった少年たちが今後どうしよう、と考えるのでは。

Q　息子が少年院に入っている。出院してからのことを考えれば考えるほど不安になるらしい。彼女とデートしていたときに昔の仲間から絡まれたら、とか。Aくんならどうしますか？

A　僕は、久しぶりですとか話して、距離を置く。まじめにやっていれば話しかけられないと思うので。再非行させたくないなら、県外に飛ばしたほうが早い。今後の人生をしっかり考えてもらいたいなら、それも一つ、やる必要がある。

Q　出てから考え方が変わった、というのはどういうこと？

以前は三段にロケットつけて、街のど真ん中を走って注目されていたのを「かっこいい」「どうだ、かっこいい」と思っていたけど、それは一般の人から考えれば「恥ずかしい行為」じゃないですか。うるさいし。てことは、自分たちがやっているのは、「どうだこれ、恥ずかしいだろ！」ってやっているのと同じじゃないですか。そう考えたら自分が恥ずかしくなって、できなくなって、それを後輩がまだやっていて、完全に見下したら考えが変わってきた。また周りの交友も変わってきたんで、そういう人たちとの交流もなくなっていった。

自分が思っているより世界は広い。前は自分たち中心だったけど、サラリーマンの人もいる、そういうエリートのビジネスバック持っている人たちは不良を相手にしない、層が違う。そう分かれば、オフィス街をバイクで走ったら恥ずかしい、違うなと分かった。

Q　知るきっかけは？それは自分で気付いたの？

A　きっかけはなかった。見栄貼るのはよくない、から始まった。人が見ているから見栄貼る、って思っていたけど、あんまり見ていないし。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

再非行防止研究会 Study Club の効果

2015 年度末、6 回目の勉強会に参加した 33 名に対し、Study Club の効果に関するアンケートを実施した。項目は企画側として伝えたかった　①非行をする少年の本音　②再非行から離れるための具体的な方法　③不良のやり方ではない問題の解決方法　④非行とは別の生き方や幸せがあること　⑤自分とは異なる立場の人の考え　の5つである。それぞれに対し、「Study Club に参加してどの程度理解が深まったか」と尋ね、5 件法（5が「かなり深まった」、1が「全く理解が深まらなかった」）で回答を求めた。

以下がその結果である。

	5	4	3	2	1
非行をする少年の本音	**62.5%**	28.1%	6.3%		3.1%
再非行から離れるための具体的な方法	**40.6%**	25.0%	25.0%	9.4%	
不良のやり方ではない問題の解決方法	29.0%	**35.5%**	**32.3%**	3.2%	
非行とは別の生き方や幸せがあること	**64.5%**	22.6%	12.9%		
自分とは異なる立場の人の考え	**71.9%**	15.6%	12.5%		

表:Study Club の効果に関するアンケート結果

参加者にとって、Study Club は非行をする少年の本音、非行とは別の生き方や幸せがあること、自分とは異なる立場の人の考えを伝える場として効果的に働いたことが読み取れる。しかし、再非行から離れるための具体的な方法、不良のやり方ではない問題の解決方法については課題を残した結果となった。

なお、Study Club の効果については、次のような自由回答も寄せられた。

・非行少年は悪いという目線は当然「上から目線」になって、警察から始まり裁判所、少年院という流れでは、少年は常に監視され指導されるため本音を言えない場である。そんな場では、反省や更生は生まれない。こんな当たり前のことを矯正施設側の人間は知るべきであり、謙虚に学ぶべきです。このことを少年院のトップや法務教官が聞いていたこと、知ったことは大きな変革になったと思います。社会的にも大きかったと思う。

・実際に非行経験者と出会える貴重な機会となった。

・少年矯正の仕事をするうえで、「うわべ」ではない大切なことを伝えられました。当事者の方々の様々な思いです。

・少年たちの本音を聞くことができた。それらを社会や大人が共有できることは意義がある。知ることは自分の仕事に活かすことができる。

・自分自身の負の側面である非行経験との付き合い方を学ぶ上で大いに参考になりました。

・非行や犯罪が発生するプロセスや、非行をする側の心理が当事者の口から生の声として聴けて、参考になった。

・少年院における処遇のあり方について改めて考えるきっかけとなりました。気もちが楽になることが一番ありがたいです。自分だけではなく世の中には同じ悩みを抱えている人たちがいることが分かり、この会はとても勉強になります。少年たちの実話はとても参考になり、ありがたいです。

・少年たちの本音を聞ける場はなかなかない。少年たちにとって非行はどういう意味があったのかを深く考えさせられた。
・非行へのイメージが変わりました。非行を経験していない人よりも、経験しているほうが自分と向き合い、どんどん人として成長していけるのかな、と感じました。自分の生き方を改めて見直すことができました。また、子育ての勉強にもなりました。非行をした少年と関わる仕事をしたいと思っているので、つなげていきたいです。
・少年たちの本音を聞くことができてよかったです。親子だからこそ言いにくいこともあると思います。息子の本音を少年たちが伝えてくれたように思います。
・様々な立場の人の話が聞けて、とても自分の視野が広がりました。非行少年側に立つことが多いので、親の本音と比較して考えることができてよかった。自立準備ホームができたら、その副業としてでも続けられたらと思っています。
・非行少年についてより深い学びや解決策の実践方法を知ることができました。
・自分の過去の整理ができた。
・過去の自分を客観視することができました。
・自分の仕事にも、親子関係を見直すためにも、とても役立っています。
・様々な立場の方の率直な意見を聴くことができ、あらためて自分の仕事（少年矯正）を見つめ直すことが出来ました。少年鑑別所や少年院への「収容」は社会から一定の距離をおくことで、落ち着いて考えることができ、目的意識が持てれば自己の成長につながる場所になると思っています。入院前の生活・少年鑑別所や少年院での生活・出院後の生活と、地続きであることが大切だと思いますが、そうなるためには、私たちのほうに更なる工夫が必要と思いました。
・実際の少年たちの話を聞けたということが、大変意味がありました。過去に非行経験があるという少年だけでなく、迷いながらも自分の人生や家族のことを考えながら生きている現在の姿に出会えたことも、貴重な経験でした。非行経験のある方々の話はとても考えさせられ、自分の生きる道を貫いた軌跡に感動しました。自分の知らなかったこと、少年や家族や支援者の想い、非行少年たちへの矯正教育の矛盾点など、知識のない自分であっても問題意識を持つことができました。福祉の分野の参入や介入が遅れているのが非行支援の現場なのだということも考えさせられました。福祉職である自分の認識の薄さ、無知さを反省いたしました。これからも、この再サポ愛知が少年たちにとって、かけがえのない生きる力になれるよう、微力ながらも今後も活動に参加させていただきたいと思います。
半年にわたり、スタッフの方々には大変お世話になりました。ありがとうございました。

おわりに　－今後の課題－

5 年間の活動を通し、非行少年、元非行少年、非行少年のご家族、支援者たち、一般の人たちが一堂に会し、非行からの立ち直りについて当事者の話に耳を傾け、真剣に支援のあり方を議論できたことは大きな成果と言えよう。

今後は当事者としての少年の感じ方、考え方を「社会に伝わる形で」発信していくこと、そして当事者としての少年自らが企画する勉強会やイベントを行っていくこと、当事者研究を促進していくことなどが課題である。そして、この5年間では十分に検討できなかった「司法領域で働く社会福祉職がソーシャルワークの精神を失うことなく、司法領域で活躍するためにはどうしたらよいか」についても引き続き、検討していきたい。

主要業績

湯原悦子、小島佳子、高柳雅仁「地域における権利擁護支援ニーズの内容と支援の効果-法人後見の受任事例からの考察-」『日本福祉大学社会福祉論集』第 133 号,pp29-46,2015 年 9 月

近田憲久、湯原悦子、高坂朝人「自立準備ホームに入所する少年が抱える困難とサポートの必要性」『日本司法福祉学会第 19 回全国大会』(日本福祉大学東海キャンパス)2018 年 9 月

高坂朝人、湯原悦子「自立準備ホームにおける少年の自立－支援スタッフによる評価の試み－」『日本更生保護学会第 6 回大会』(福島市)2017 年 12 月

再非行防止サポートセンター愛知＆日本福祉大学スーパービジョン研究センター「再非行防止社会内サポート　CCNC Study club　報告書 2018」2019 年

再非行防止サポートセンター愛知＆日本福祉大学スーパービジョン研究センター「再非行防止社会内サポート　CCNC Study club　報告書 2017」2018 年

再非行防止サポートセンター愛知＆日本福祉大学スーパービジョン研究センター「再非行防止社会内サポート　CCNC Study club　報告書 2016」2017 年

再非行防止サポートセンター愛知＆日本福祉大学スーパービジョン研究センター「再非行防止社会内サポート　CCNC Study club　報告書 2015」2016 年

６　法人マネジメント

日本福祉大学
スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

E グループ「法人マネジメント」研究成果報告書

グループ長　田中千枝子

E班は法人マネジメントとして、「社会福祉法人の人材養成に関する組織運営が、スーパービジョンの機能や枠組みを使って、マネジメントされているのではないか」という仮説にもとづき、日本福祉大学の提携社会福祉法人の1つである武蔵野会の経営を分析したものである。これは人材養成システムを組織としてプログラムするうえで、スーパービジョン機能が発揮できるように組まれていると分析した。

その背景と根拠には

① 法人一体経営にもとづく（社会福祉の価値）理念定着の方法として整理

基本理念「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」

法人の存在理由　創業の精神　普遍的価値　法人DNAの植え付け

実践における哲学の習得

支援職として成長に必要な価値観　思考のプロセス　仕事の仕方への影響

組織を一体化する核（法人一体経営のかなめ）

組織の成長の壁や個人支援上のゆらぎ・疑問を自覚しかつ支える重心

② 自分の実践をもとに振りかえることをもとに、指導が行われる教育手法

基本理念の深化のための方法として、「自分の実践が理念に照らし合わせてどうなのだろうか」と振り返る

客観性を担保した振り返り（事例として報告・提示　反省ではなく省察として）

③ 組織の所属部署の中での主任と部下の関係における指導・関係性の明示　＋

チーム長同士のプロジェクト会議　同輩どうしで組織運営にかかわる課題取り組み

↓

実践のための体制（垂直＋水平）づくり　最大の経営資産としての人材と組織風土

リーダーシップの発揮　人材養成につながる

理念を基盤にした縦軸としての上司部下のスーパービジョン⇒次世代の支援職養成

横軸としてチーム長グループ会議⇒具体的な目標設定と成果達成

水平的関係がグループであること　グループ間交流でもあること

横軸と縦軸が交互作用を起こすことで、新たな人材や実践を生み出す

④　理念を基盤としてスーパービジョン機能を発揮した内省的実践を行うことで、新たなミッションを創発できる。

また新たに生み出される社会福祉的課題への対応に関する内発的力が、スーパービジョン体制をもとに成立している。

社会福祉法人等における
新規事業開発（法人マネジメント）
―社会貢献の視点から考える―

日本福祉大学　社会福祉学部
田中千枝子

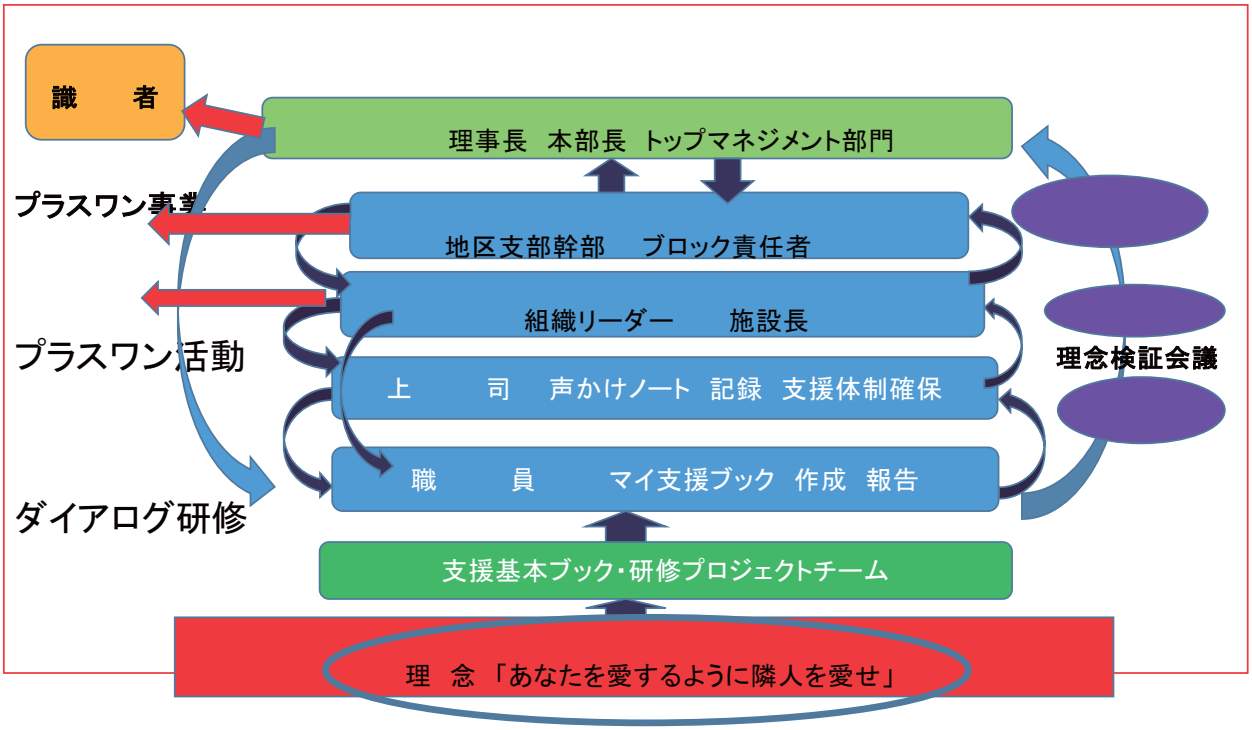
新規事業（社会貢献）に関する
組織的合意形成プロセス

武蔵野会　理事長　上野純宏　様
　　副本部長　山内哲也　様　　へヒヤリング

<対象事業>
法人成年後見の推進　（2010年サミット報告　理事長　上野正純様）
累犯障がい者の地域生活支援
HIV/AIDS施設受け入れハンドブック作成・配布
その他

→組織的合意形成プロセスのベースとなる、組織的合意醸成プロセスに焦点化して分析を行う
合意醸成（掘り起こし）→形成（ビルディング）→実現（リアライゼーション）

武蔵野会の地域事業合意過程とSVシステム



武蔵野会の理念経営における組織的合意醸成の筋道

法人の基本理念に沿って運営すること⇔社会福祉法人の運営課題
それを目標に掲げて

理念「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」<価値>

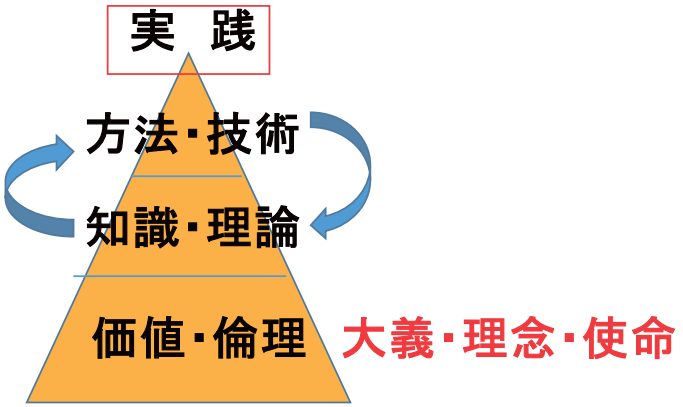
解釈「あるがままの自分を理解し、受け入れ啓発することによって、あなたの隣人と対等な関係を築き、隣人をあるがままに理解して受け入れる。」<倫理>

5つの行動規範　<行動原則>
①自己覚知と自己啓発　　②受容　　③人間理解
④安心・安全・満足の関わり　　⑤共にある関係

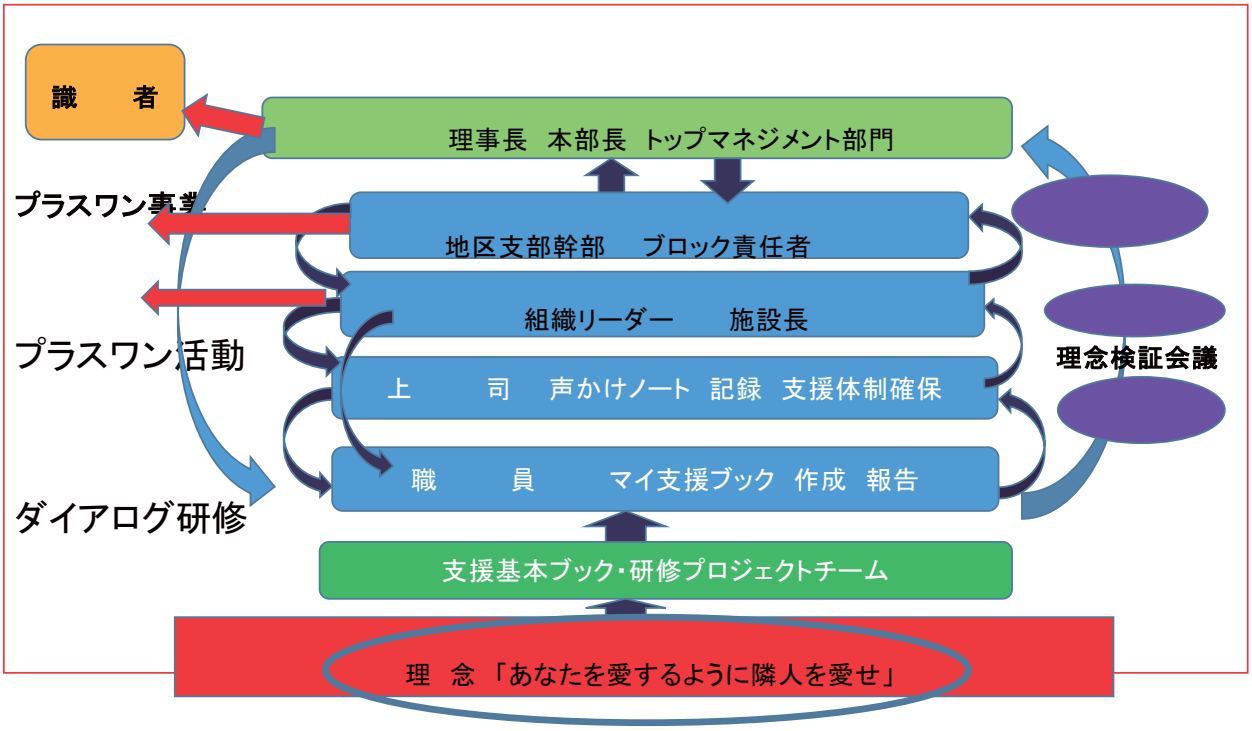
理念実践の広がり→隣人への関与　地域社会への広がり　←地域貢献

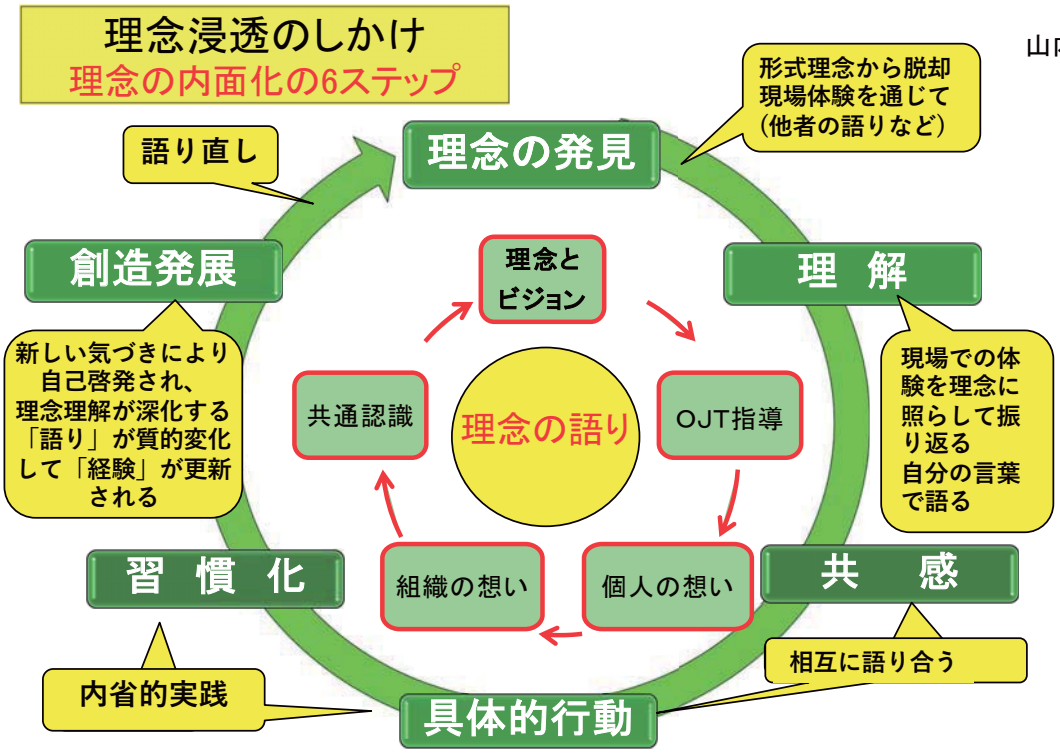
専門性の構造

価値・倫理をベースにして、社会福祉実践が成立する
実践の中で価値がどのように反映・影響しているのか振り返り

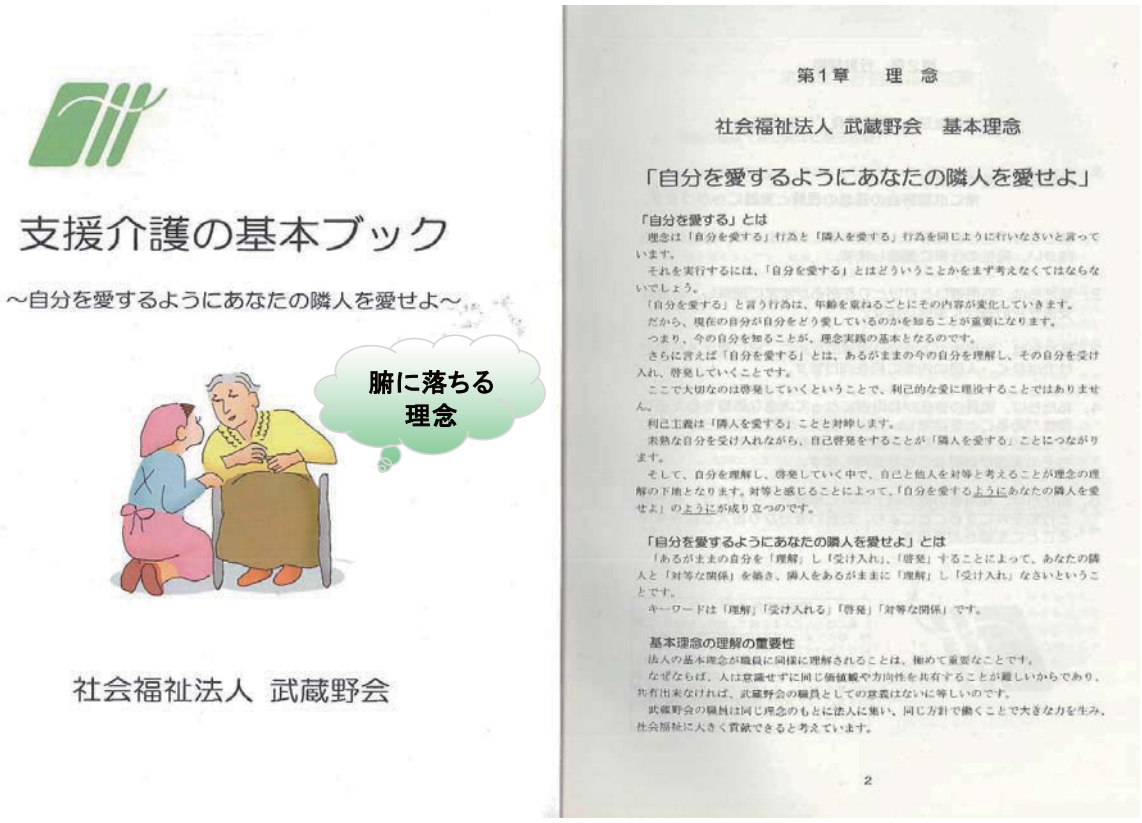


武蔵野会の地域事業合意過程とSVシステム




理念浸透のしかけ
理念の内面化の6ステップ
山内氏作成
理念の発見
形式理念から脱却
現場体験を通じて
（他者の語りなど）
理　解
現場での体験を理念に照らして振り返る
自分の言葉で語る
共　感
相互に語り合う
具体的行動
内省的実践
習　慣　化
創造発展
新しい気づきにより自己啓発され、理念理解が深化する「語り」が質的変化して「経験」が更新される
語り直し
理念とビジョン
OJT指導
個人の想い
組織の想い
共通認識
理念の語り

7


支援介護の基本ブック
～自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ～
腑に落ちる理念
社会福祉法人　武蔵野会
第1章　理　念
社会福祉法人 武蔵野会　基本理念
「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」
「自分を愛する」とは
理念は「自分を愛する」行為と「隣人を愛する」行為を同じように行いなさいと言っています。
それを実行するには、「自分を愛する」とはどういうことかをまず考えなくてはならないでしょう。
「自分を愛する」と言う行為は、年齢を重ねるごとにその内容が変化していきます。
だから、現在の自分が自分をどう愛しているのかを知ることが重要になります。
つまり、今の自分を知ることが、理念実践の基本となるのです。
さらに言えば「自分を愛する」とは、あるがままの今の自分を理解し、その自分を受け入れ、啓発していくことです。
ここで大切なのは啓発していくということで、利己的な愛に埋没することではありません。
利己主義は「隣人を愛する」ことと対峙します。
未熟な自分を受け入れながら、自己啓発をすることが「隣人を愛する」ことにつながります。
そして、自分を理解し、啓発していく中で、自己と他人を対等と考えることが理念の理解の下地となります。対等と感じることによって、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」のようにが成り立つのです。
「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」とは
「あるがままの自分を「理解」し「受け入れ」、「啓発」することによって、あなたの隣人と「対等な関係」を築き、隣人をあるがままに「理解」し「受け入れ」なさいということです。
キーワードは「理解」「受け入れる」「啓発」「対等な関係」です。
基本理念の理解の重要性
法人の基本理念が職員に同様に理解されることは、極めて重要なことです。
なぜならば、人は意識せずに同じ価値観や方向性を共有することが難しいからであり、共有出来なければ、武蔵野会の職員としての意義はないに等しいのです。
武蔵野会の職員は同じ理念のもとに法人に集い、同じ方針で働くことで大きな力を生み、社会福祉に大きく貢献できると考えています。
2

8

合意醸成過程のシステム化（振り返りおよび垂直）

法人としての理念を実践に結びつけるための行動規範作成

●5つの行動規範の「支援介護の基本ブック」作成←失敗を含め実際に職員が体験したことを事例として用いる。行ってはならないこと例示

●職員が「マイ支援ブック」を作成　各人が自分の事例を文章化→自分の事例を理念に沿った実践であるかどうか振り返り、形に表す。

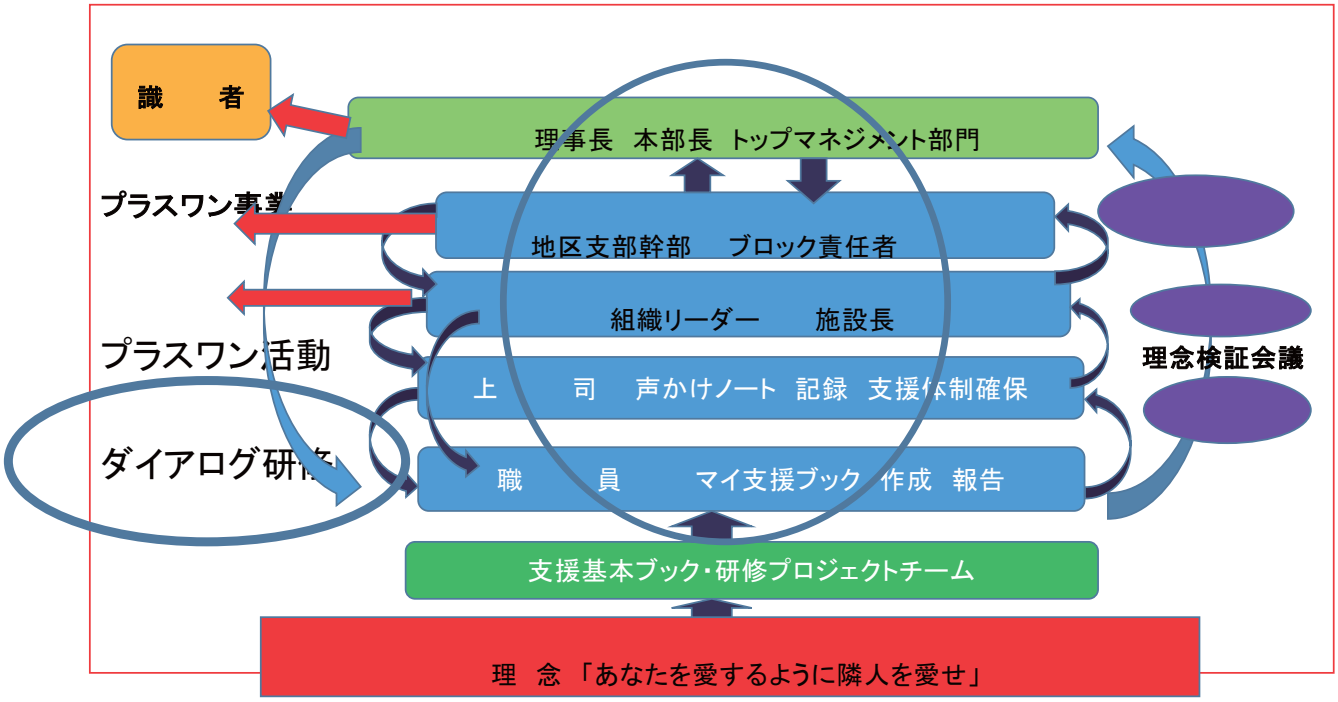
●理念実践の日々の確認　接遇マナーの向上　支援体制の確立

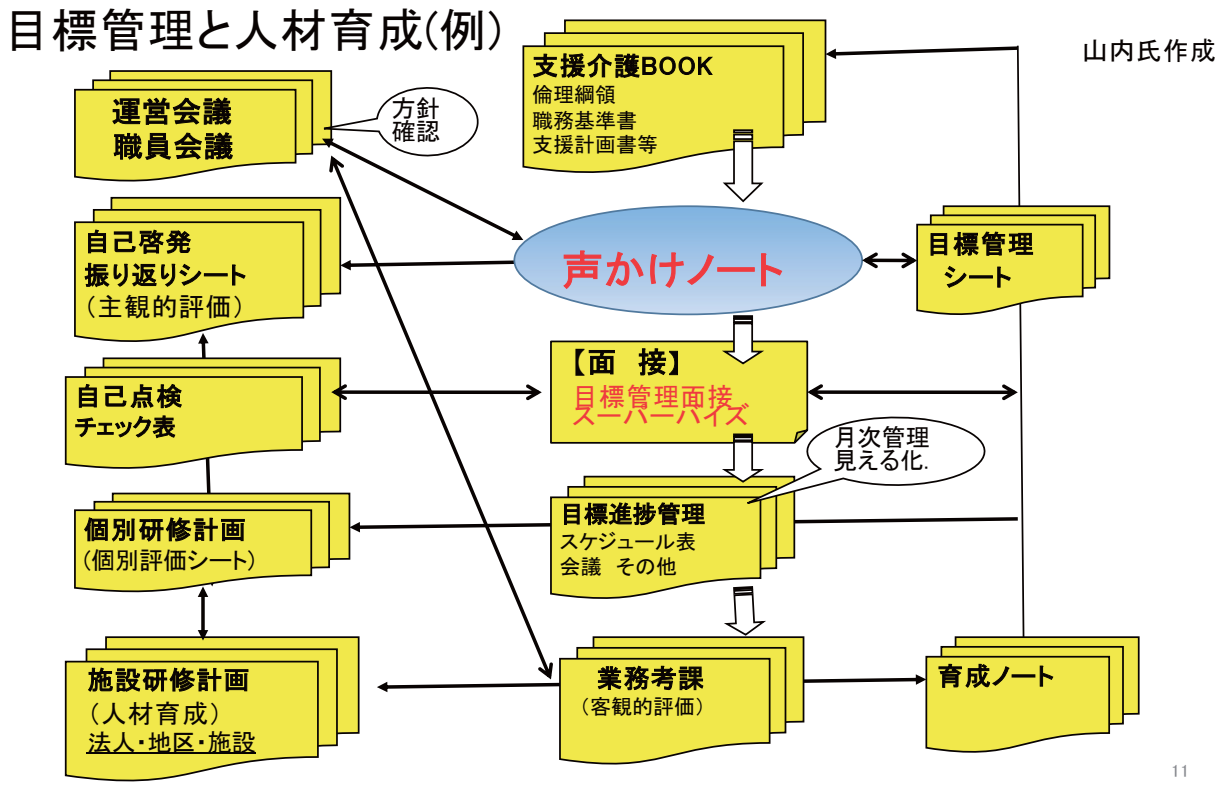
●「声かけノート」でのコミュニケーション　上司の声かけを記録残す

●ダイアログ（会話）研修　理事長・本部長・次長と職員が直接話す

10名ほどの少人数　法人運営や人材育成等への要望や理念が現場でどのように支援に結びついているのか　楽しさやつまずき把握

武蔵野会の地域事業合意過程とSVシステム





合意醸成過程のシステム化（水平および地区支部G）

●施設長自らの体験を踏まえて理念を語る研修　地区単位　地区を越えての研修　地域の課題への関心

●役職者やリーダーも語る　→　語ることで自らも気づき

●声かけノートの記録を振り返り、職員とのコミュニケーション促進

●役職者中心に部門別会議での理念実践の検証　振り返り　語り合い

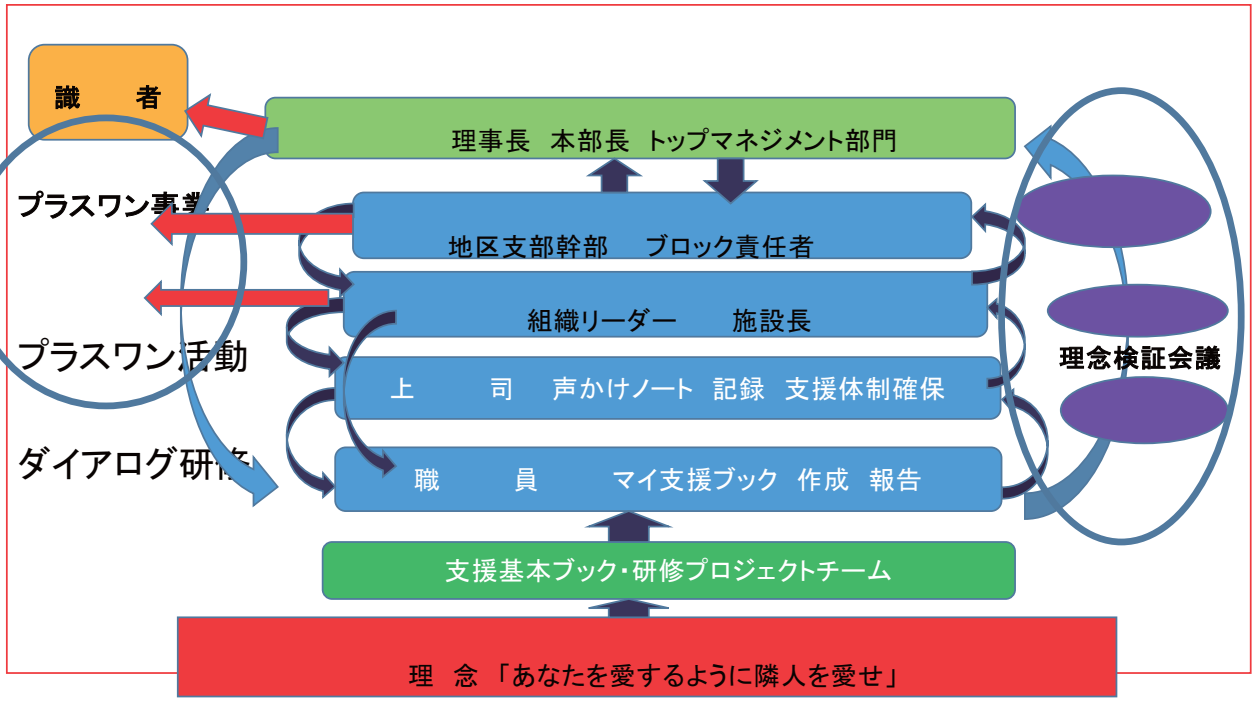
●人事制度との関係性　燃え尽き　虐待リスクフォローアップ

●プロジェクト方式による目標（理念にもとづく）設定　実践を前提

●施設によるプラスワン活動の実施（各施設で年度1件）地域アセスメント

●地区によるプラスワン事業の実施（各地区で1件）　ネットワークに着目

武蔵野会の地域事業合意過程とSVシステム



スーパービジョンシステムとして分析

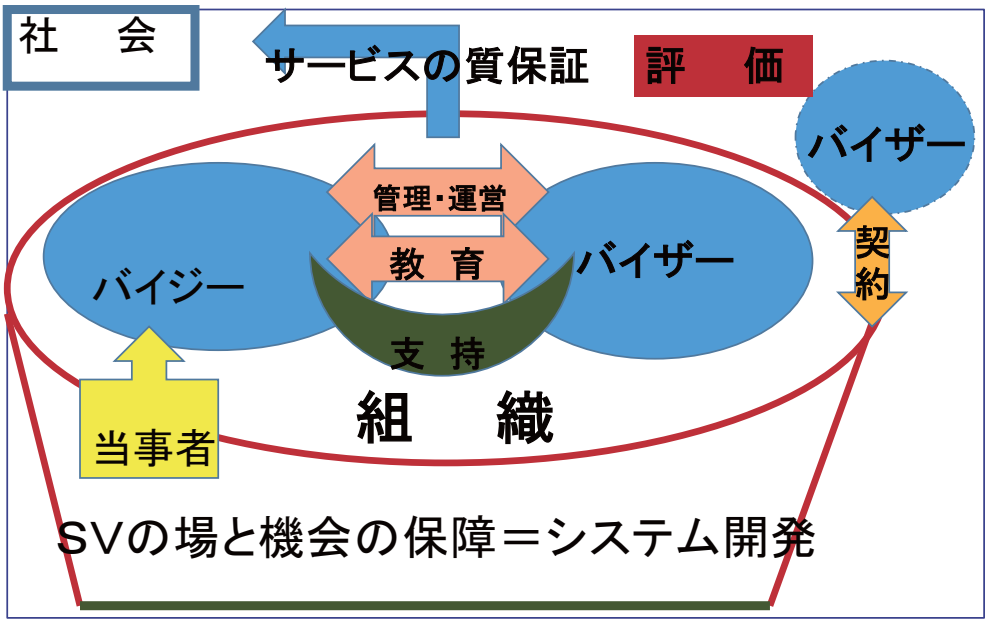
日本福祉大学　スーパービジョン研究センター

福祉大版スーパービジョンとは

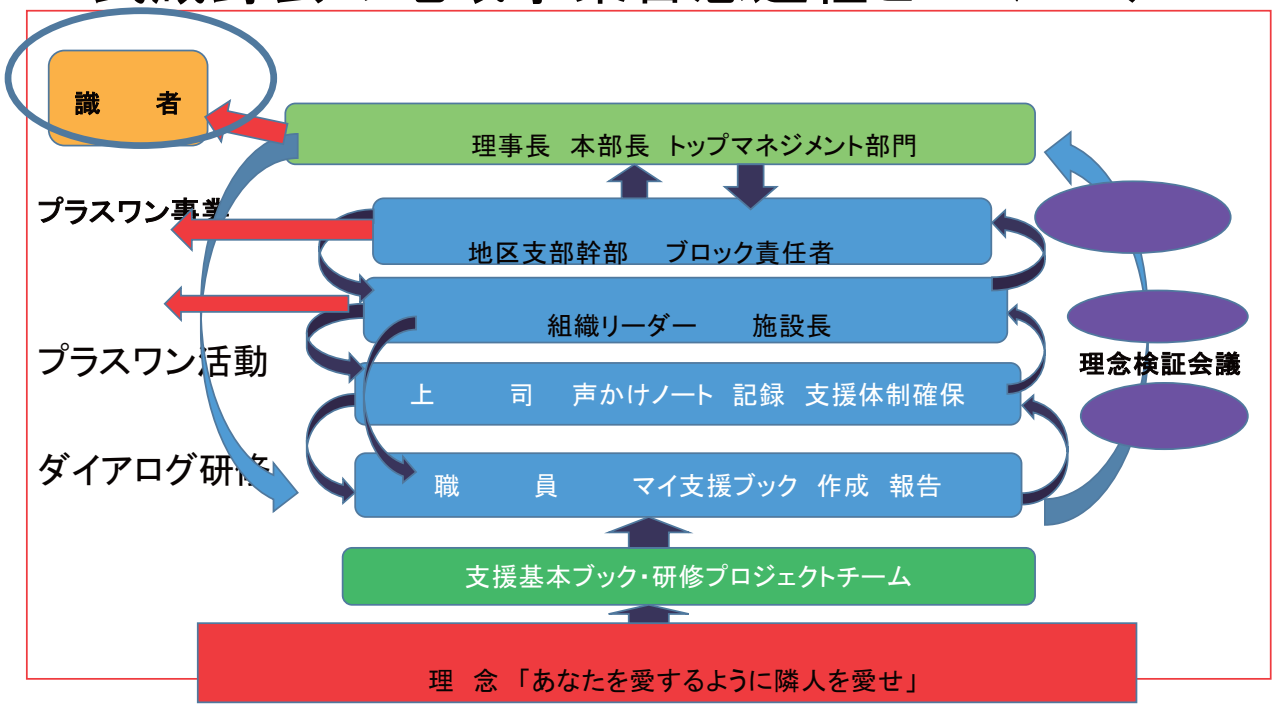
ヒューマンケアに関わる　重層的（ミクロ・メゾ・マクロ）各局面に交互作用的に展開する支援者支援であり、人材養成（組織運営）の方法論

事例性のある事態や状況を振り返り（リフレクティブ　省察）語りをスーパーバイザーとバイジーとの関係性の中で扱うことによって、当事者に対するバイジー自らの成長と、バイザーの組織契約履行、組織の社会に対するサービスの質の保証を行う。その扱い方は支持的をベースに教育的・管理運営的機能を発揮する。事例検討と異なるのは、まな板に乗るのは事例ではなく、事例を抱えたバイジーであること。また主に状況の整理とアセスメント、認識・価値観の変化、プランの的確さ　などをテーマに実施

スーパービジョンの構造　田中作成



武蔵野会の地域事業合意過程とSVシステム



ｽｰﾊﾟｰﾋﾞｼﾞｮﾝ枠組みによる法人ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ
組織的合意醸成ﾌﾟﾛｾｽの要点

- 価値に基づき、理念を内在化させる支援者支援の方法論
- 事例性を取り上げて振り返り 「語り」と「記述」のダイアログ
- 多層的（ミクロ−メゾ−マクロに展開）
- 交互作用性（垂直・水平　内向きと外向き　セルフ（省察）からブロック単位まで）
- 人材養成・人事管理・組織計画としての複合的なシステム化

重層的なスーパービジョンシステム化による
法人マネジメントの推進

社会福祉法人武蔵野会

山内哲也

重層的なSVのシステム化による
法人マネジメントの推進

- 重層的なSVのシステム化による戦略的な人材育成
- 社会福祉法人の組織理念の浸透
- 専門職または社会福祉組織としての専門性の継承
  （価値・態度や知識・スキル）
- サービスの品質管理や業務改善・開発
- リスクマネジメント
- メンタルヘルス（バーンアウトの予防）
- 組織内のコミュニケーション・対話の促進
- 組織風土の醸成

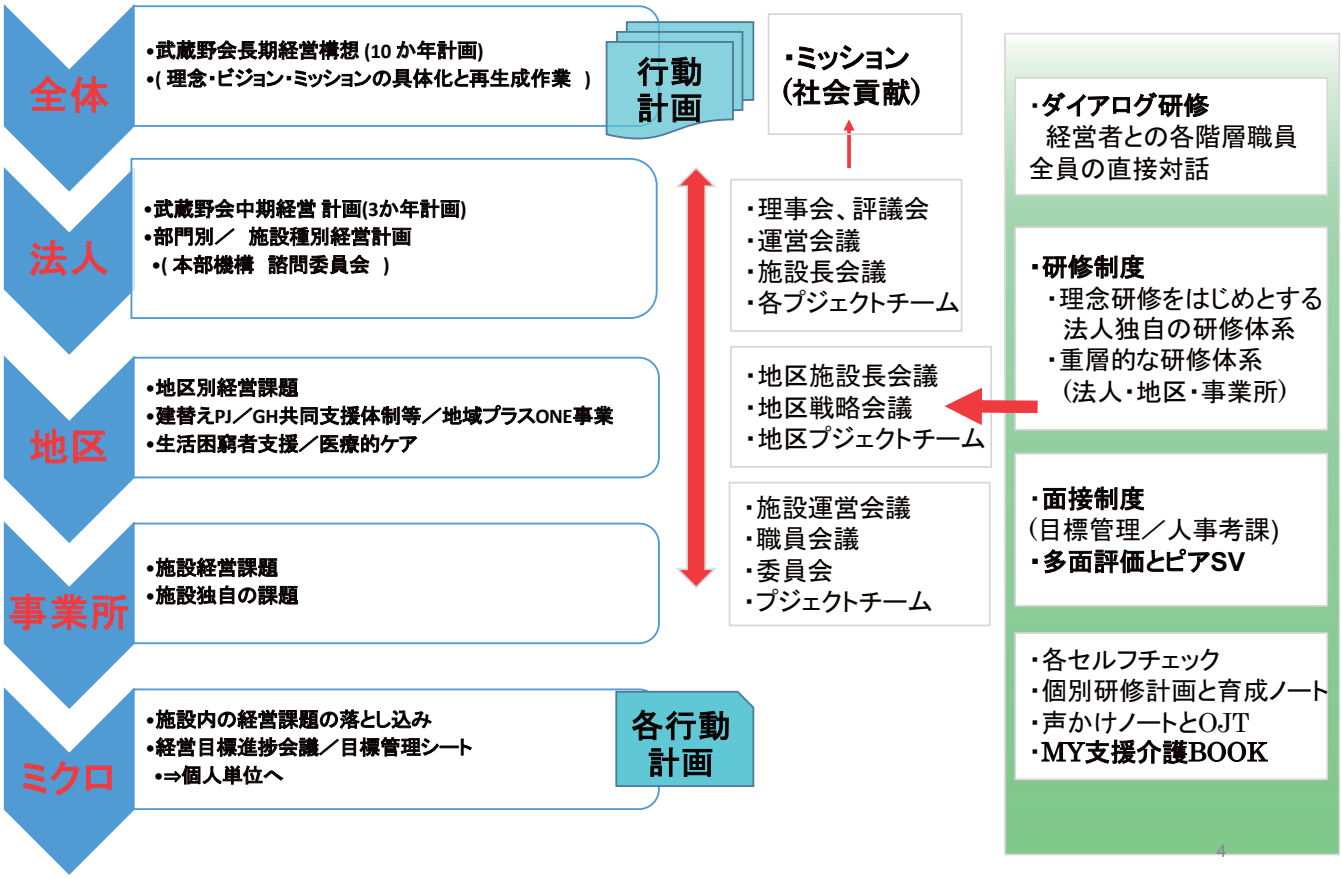
2

法人組織という文脈の中で行われるSV

- 法人組織という文脈から切り離せない
- スーパーバイザーでありスーパーバイジーである関係
- ミクロとメゾレベルが重なり合う展開
- 組織の各階層職位に必要なSV
- ミクロレベルの価値・知識・スキルの伝達から
- トップから各職層を縦断する共通構造のシステム
- 組織内の自律的な人材育成のシステム
- 外側と内側のSV

3

【 理念を実践していく 法人のプロセス 】



支援介護の基本ブック

～自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ～

社会福祉法人　武蔵野会

第１章　　理　念

社会福祉法人 武蔵野会　基本理念

「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」

「自分を愛する」とは

理念は「自分を愛する」行為と「隣人を愛する」行為を同じように行いなさいと言っています。

それを実行するには、「自分を愛する」とはどういうことかをまず考えなくてはならないでしょう。

「自分を愛する」と言う行為は、年齢を重ねるごとにその内容が変化していきます。

だから、現在の自分が自分をどう愛しているのかを知ることが重要になります。

つまり、今の自分を知ることが、理念実践の基本となるのです。

さらに言えば「自分を愛する」とは、あるがままの今の自分を理解し、その自分を受け入れ、啓発していくことです。

ここで大切なのは啓発していくということで、利己的な愛に埋没することではありません。

利己主義は「隣人を愛する」ことと対峙します。

未熟な自分を受け入れながら、自己啓発をすることが「隣人を愛する」ことにつながります。

そして、自分を理解し、啓発していく中で、自己と他人を対等と考えることが理念の理解の下地となります。対等と感じることによって、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」のようにが成り立つのです。

「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」とは

「あるがままの自分を「理解」し「受け入れ」、「啓発」することによって、あなたの隣人と「対等な関係」を築き、隣人をあるがままに「理解」し「受け入れ」なさいということです。

キーワードは「理解」「受け入れる」「啓発」「対等な関係」です。

基本理念の理解の重要性

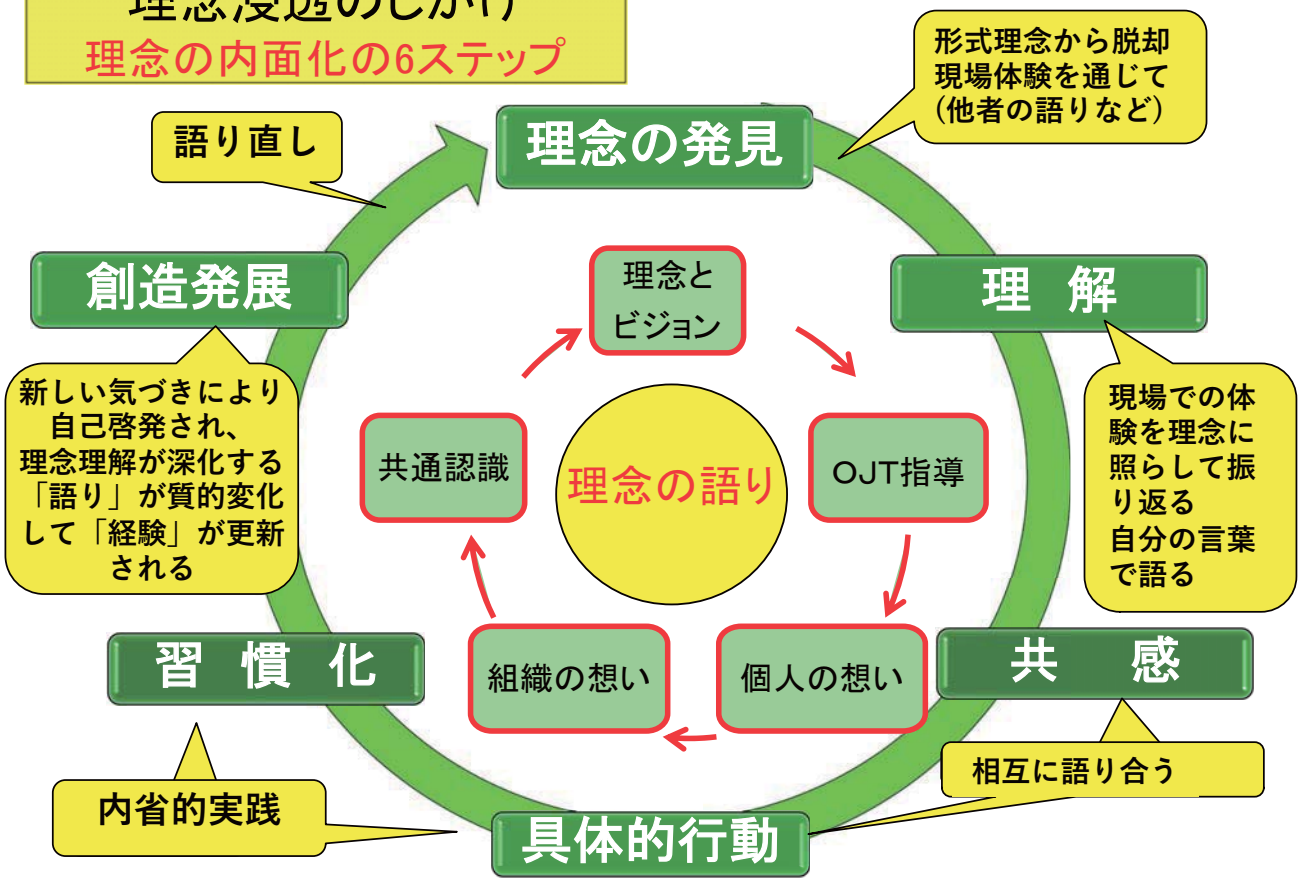
法人の基本理念が職員に同様に理解されることは、極めて重要なことです。

なぜならば、人は意識せずに同じ価値観や方向性を共有することが難しいからであり、共有出来なければ、武蔵野会の職員としての意義はないに等しいのです。

武蔵野会の職員は同じ理念のもとに法人に集い、同じ方針で働くことで大きな力を生み、社会福祉に大きく貢献できると考えています。

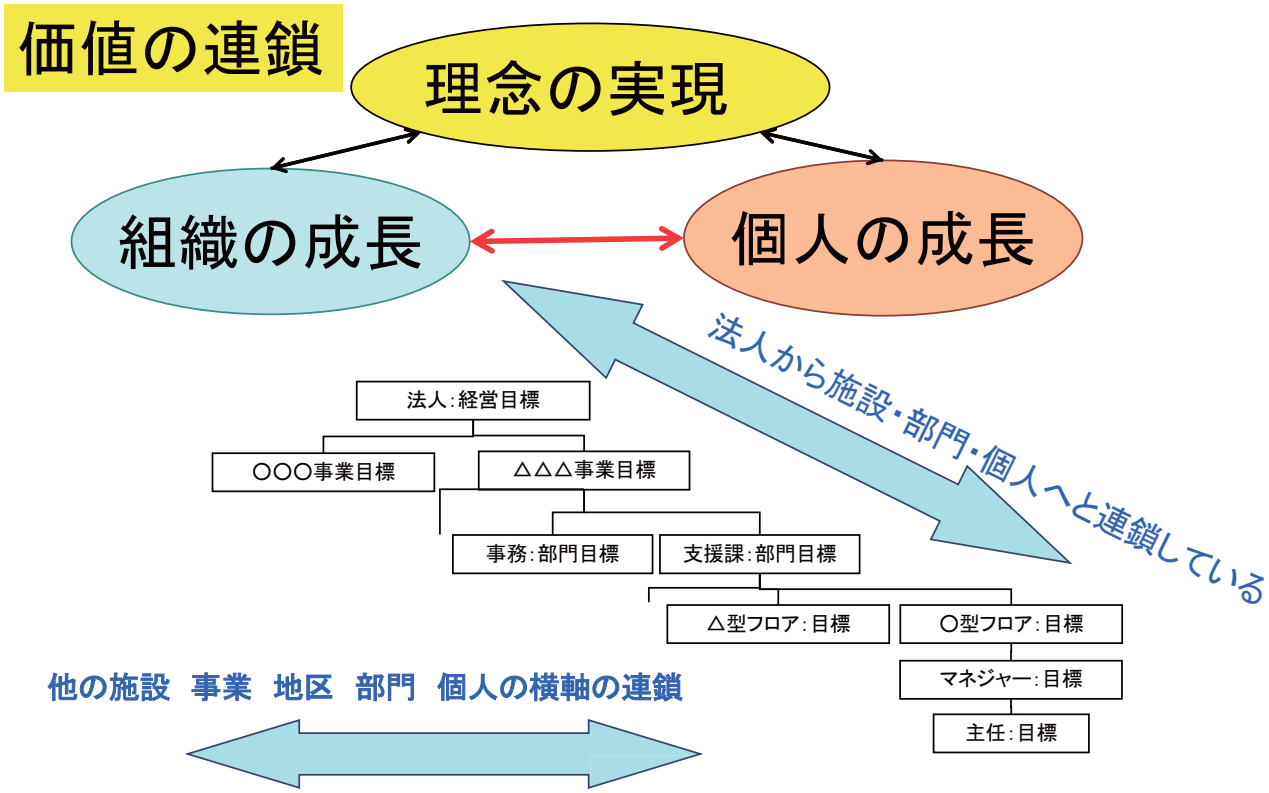
2　　5

理念浸透のしかけ
理念の内面化の6ステップ

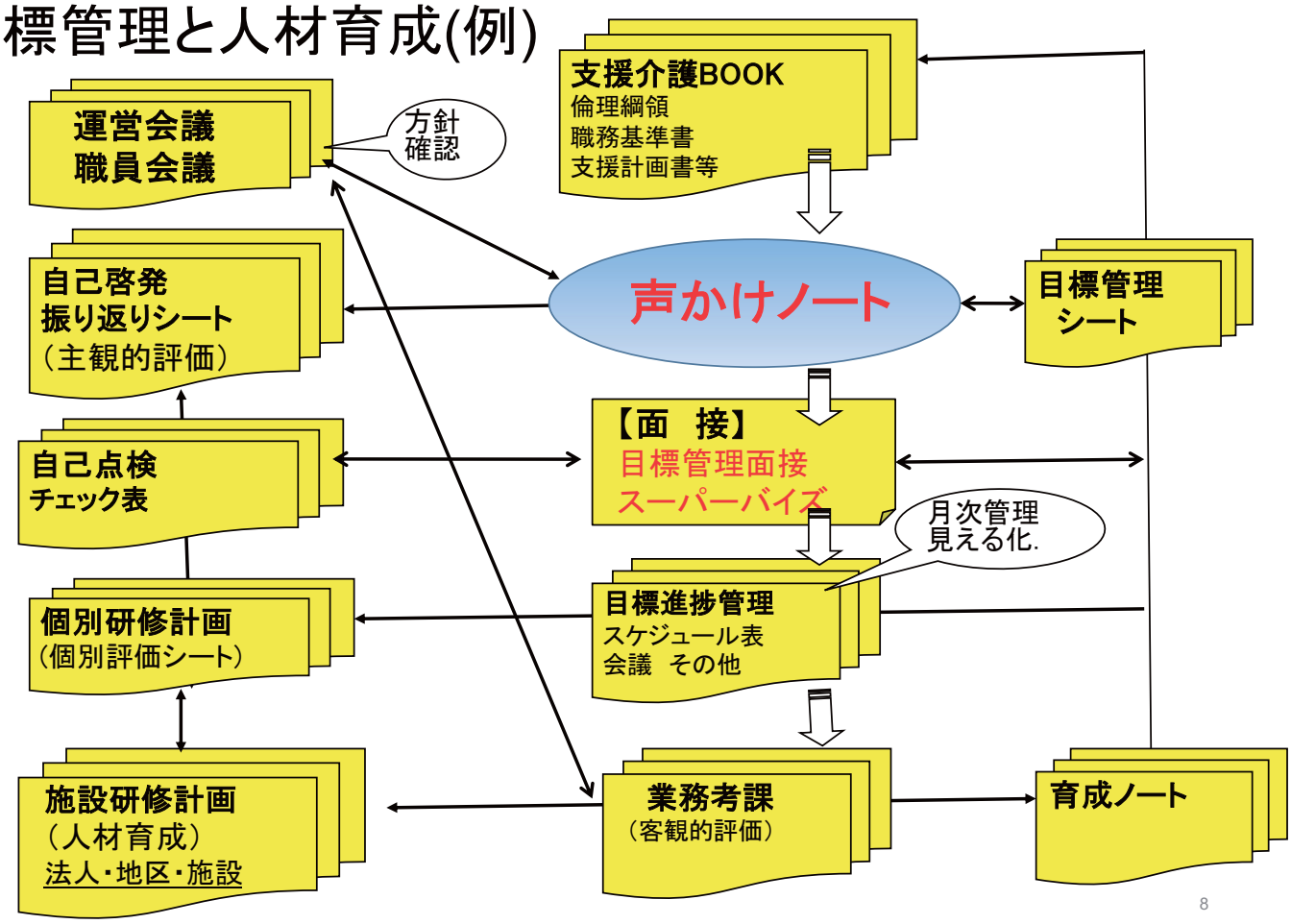


6

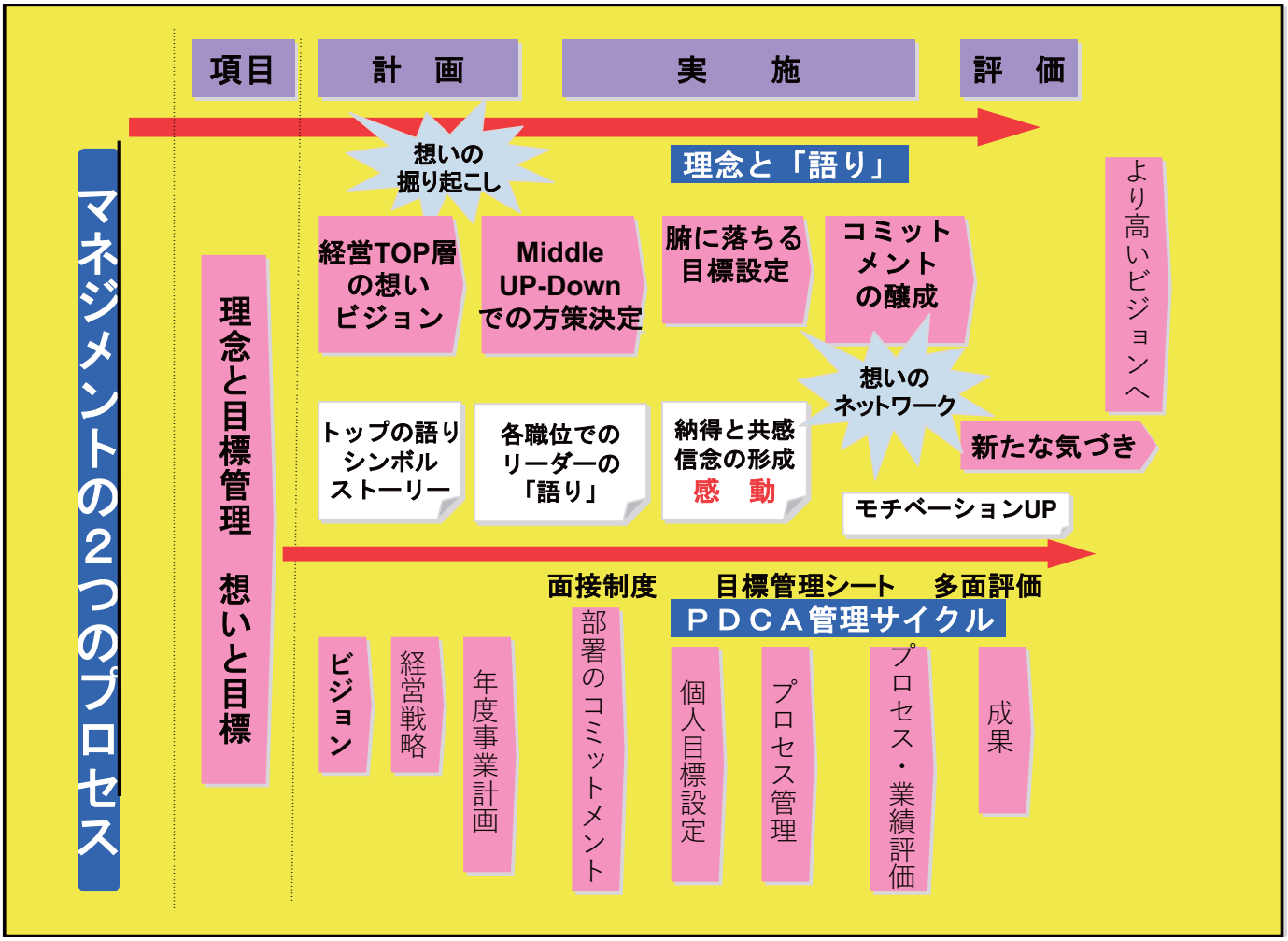
縦軸で連鎖し、ブレイクダウンされる価値



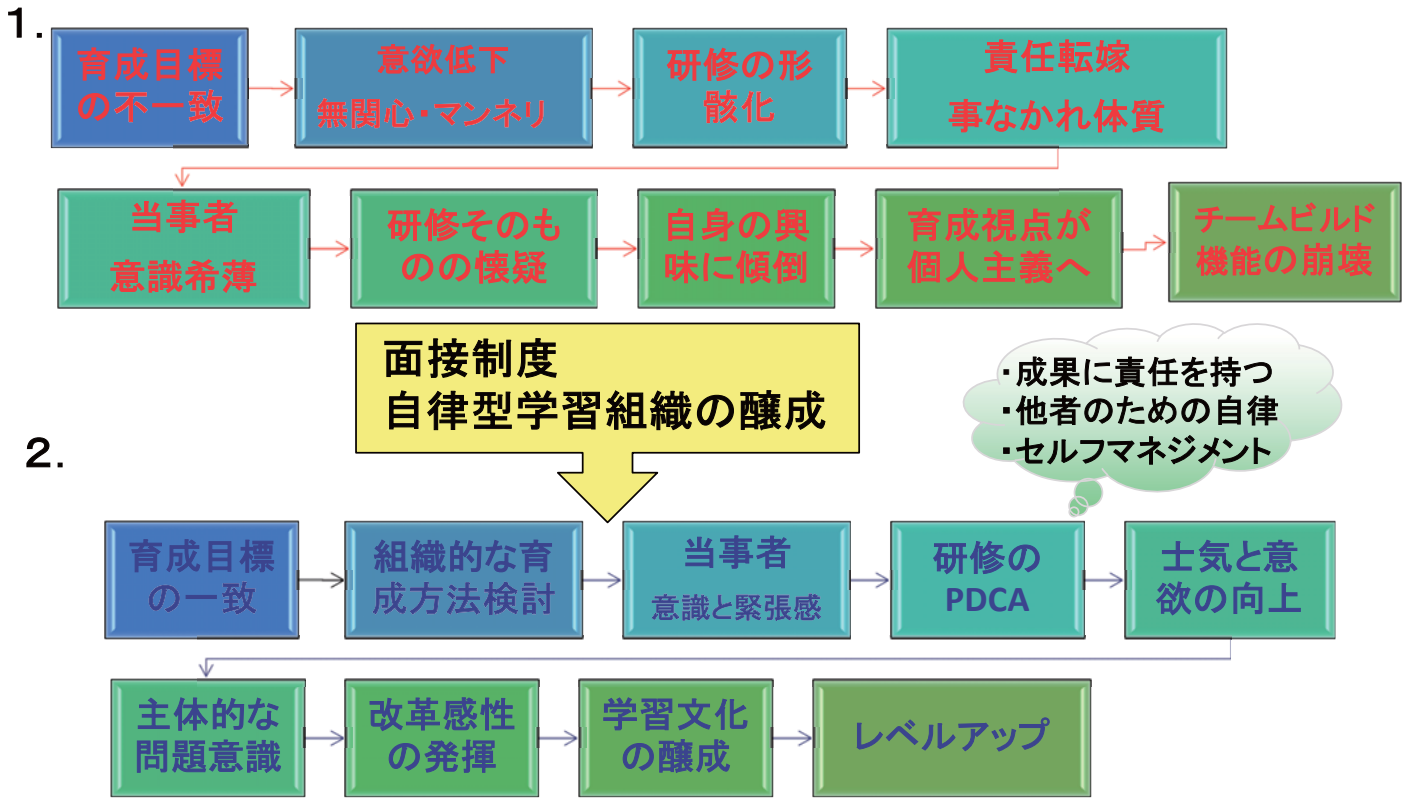
目標管理と人材育成(例)



8



【法人マネジメント】
面接による自己学習計画を組み入れ



10

7　研究業績一覧

日本福祉大学
スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

業績一覧（2019 年 1 月現在）

論文

汲田千賀子、野口典子「高齢者施設におけるユニットリーダーの職務と求められる能力」『現代社会学部紀要（中京大学）12(1), pp25-40, 2018 年 9 月

汲田千賀子、野口典子「認知症ケアにおける複層的スーパービジョンの必要性 ： スーパーバイザーを支援する取り組み例から」『同朋大学論叢』25, pp35-46, 2018 年 9 月

鈴木俊文「実務に伴う「実践感覚」を経験した介護福祉士の能力開発のプロセスと構造」日本福祉大学大学院『福祉社会開発研究』第 13 号,51-60,2018 年 3 月

野村豊子「ソーシャルワーク・スーパービジョンとは何か」『保健の科学』 59(12), 798-803, 2017 年 12 月

保正友子「ソーシャルワーカーの成長過程に即したスーパービジョンの実際」『保健の科学』59(12), 832-835, 2017 年 12 月

尾方欣也、福山和女、田中千枝子「実習スーパービジョンの効果と教育的アセスメントの関連性　～教育的および支持的機能に焦点をあてて～」公益社団法人日本医療社会福祉協会『医療と福祉』51（1）,pp25―34,2017 年 8 月

神林ミユキ「スーパービジョンセッションにおいてスーパーバイザーが用いるスキル―ソーシャルワーカーによるスーパービジョンの質的調査―」『社会福祉学』 58(1), pp71-85, 2017 年 5 月

佐原直之、福山和女、田中千枝子「FK グリッドによる実習スーパービジョンのプロセスにみる実践的効果に関する研究」日本福祉大学大学院『福祉社会開発研究』第 12 号,pp51-62,2017 年 3 月

塩満卓『相談支援専門員の利用者に対する 14 の援助者役割とその獲得機序(第二報)－知的障害者領域における相談支援専門員の円熟期を中心に－」日本福祉大学大学院『福祉社会開発研究』第 12 号, pp.51-61,2017 年 3 月

瀧澤学「高次機能障害者の長期支援に関する研究」『医療社会福祉研究』第 25 巻,2017 年 3 月

汲田千賀子「認知症ケア現場のリーダーに対する継続的スーパービジョン」『同朋福祉』23,pp111-130,2017 年 1 月

高坂朝人、湯原悦子「NPO 法人 再非行防止サポートセンター愛知の活動紹介 : 再非行を減らし,笑顔を増やしたい」『更生保護学研究』,第 8 号,pp12-20,2016 年
野尻紀恵・川島ゆり子「貧困の中に育つ子どもを支える連携支援プロセスの視覚化-SSW と CSW の学び合いプロセスを中心として-」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』第 26 号,pp15-26,2016 年 7 月
田中千枝子「生活困窮者への健康支援とその課題」鉄道弘済会『社会福祉研究』第 125 号,pp53-62,2016 年 4 月
福山和女・石田賢哉「介護老人福祉施設におけるスーパービジョンの意識化」『ルーテル学院研究紀要』49 号,pp1-11,2016 年 3 月
浅野正嗣、山口みほ「保健・医療領域のソーシャルワーク・スーパービジョンの現状-スーパービジョン講座受講者の調査から」公益社団法人日本医療社会福祉協会『医療と福祉』No99 Vol.49-2,pp64-73,(査読有),2016 年 3 月
平野隆之「地域福祉と地域ケア」『日本の地域福祉』第 29 巻,pp3-12,2016 年 3 月
照井孫久「ケアリスクマネジメントの前提としてのリスク概念の考察」『石巻専修大学研究紀要』27 号,pp49-55,2016 年 3 月
Yukari,Yokoyama "Relationships between social factors and physical activity among elderly survivors of the Great East Japan earthquake: across-sectional study" Bio Med Central,2016.1
金圓景「介護からケアへ:ソーシャルワーカーによる認知症ケア」『筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学部紀要』11 号,pp141-151,2016 年 1 月
Yukari,Yokoyama "Application of the eight-item modified medical outcomes study social support survey in Japan: a national representative cross-sectional study" Quality of Life Research,springer, 2015.10
湯原悦子、小島佳子、高柳雅仁「地域における権利擁護支援ニーズの内容と支援の効果-法人後見の受任事例からの考察-」『日本福祉大学社会福祉論集』第 133 号,pp29-46,2015 年 9 月
北村育子・永田千鶴「地域包括支援センターによる認知症高齢者の在宅生活継続支援:専門職間の連携に着目して」『日本福祉大学社会福祉論集』第 133 号,pp1-16,2015 年 9 月
青木聖久「障害年金における受給継続と就労との関係-精神障害を有する本人と家族からのアンケート調査を通して-」『日本福祉大学社会福祉論集』第 133 号,pp47-73,2015 年 9 月

福山和女「超高齢化社会と家族支援」『家族療法研究抄録集』第 32 巻 2 号,pp94-96,2015 年 8 月
永田千鶴・松本佳代・北村育子（他）「認知症疾患医療センターが担う在宅支援:独自の支援と地域包括支援センターとの連携による支援内容の分析」山口大学医学会『山口医学』64 巻 3 号,pp183-190,2015 年 8 月
大谷京子「アセスメント面接に対するクライエント評価の探求―面接ロールプレイ分析―」『精神保健福祉学』3(1),pp35-48,2015 年 7 月
山口みほ、前田美都里、嶋田和寛、野田智子「愛知県下の MSW 管理職による管理業務の現状と課題~管理業務研修のグループ・セッションの分析から~」愛知県医療ソーシャルワーカー協会『医療ソーシャルワーク』64 巻 103 号,pp70-78,2015 年 5 月
水谷なおみ「障害者就業・生活支援センターの機能類型に関する研究-運営主体の事業特性とのかかわりから-」『日本介護福祉学会:介護福祉学』Vol.22 No.1,pp15-26,2015 年 4 月
照井孫久「ケアのリスクマネジメントにおける方法論の研究」『石巻専修大学研究紀要』26 号, pp37-45,2015 年 3 月
奥田佑子、平野隆之、金圓景「地域における権利擁護支援システムの要素と形成プロセス」『日本の地域福祉』第 28 巻,pp1-13,(査読有),2015 年 3 月
青木聖久「精神障害者の障害年金における認定審査の現状と課題-障害年金に精通した 3 名の社会保険労務士の語りを通して-」『日本福祉大学社会福祉論集』第 132 号,pp1-20,2015 年 3 月
鈴木俊文「介護職員の「経験や勘に基づく実践」の分析-「嫌がる感じ」という「だいたいの目安」-」『日本認知症ケア学会誌』Vol.13-4,pp781-789,(査読有),2015 年 1 月
金圓景、奥田佑子「認知症高齢者グループホーム管理者の主な業務内容および抱える困難」『日本認知症ケア学会誌』Vol.13-4,pp739-748,(査読有),2015 年 1 月
来島修志「事例検討会の進め方と意義」『認知症ケア事例ジャーナル』7 巻 3 号,pp311-316,2014 年 12 月
福山和女「2013 年度学界回顧と展望―ソーシャルワーク部門」『社会福祉学』第 55 巻 3 号, pp142-156,(査読有),2014 年 11 月
福山和女「新しいタイプの協働における夫婦・親子の尊厳について―遷延性意識障害患者へのソーシャルワーク」『精神療法』第 40 巻 5 号,pp702-703,(査読有),2014 年 10 月

大谷京子「ソーシャルワークアセスメントスキル—面接ロールプレイを用いた質的分析—」『ソーシャルワーク研究』40(3),pp48-57,2014 年 10 月

金圓景「地域包括ケアシステムの構築背景と推進方向」『韓国長期療養学会(韓国)』2,pp5-32, (査読有),2014 年 8 月

野尻紀恵「福祉教育の当事者としての子ども-子どもの生活課題を視野にいれて-」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』第 23 号,pp16-26,2014 年 7 月

石河久美子「在住外国人の現状と支援の課題-多文化ソーシャルワークの普及に向けて」鉄道弘済会『社会福祉研究』第 120 号,pp54-61,(査読有),2014 年 7 月

永田千鶴、北村育子「地域包括ケア体制下でエイジング・イン・プレイスを果たす地域密着型サービスの機能と課題」日本地域看護学会『日本地域看護学会誌』Vol.17 No.1,pp23-31,2014 年 7 月

金圓景「認知症家族の自殺及び殺人事件に関する新聞記事分析」『保健社会研究(韓国)』34-2,pp219-246,(査読有),2014 年 6 月

小松尾京子「主任介護支援専門員のスーパービジョン実践に関する研究-成長の要因と実践方法-」『ソーシャルワーク学会誌』第 28 号,pp1-11,(査読有),2014 年 6 月

大谷京子「ソーシャルワークにおけるアセスメント—態度とスキル—」『日本福祉大学社会福祉論集』130 号,pp15-29,2014 年 3 月

田中千枝子、原田正樹「社会福祉法人等における新規事業開発(法人マネジメント)-社会貢献の視点から考える」『第 8 回提携社会福祉法人サミット報告集 2014』日本福祉大学社会福祉教育研究センター,pp119-140,2014 年 2 月

福山和女「精神療法の未来—ソーシャルワークの立場から」『精神療法』第 40 巻 1 号,pp106-107,2014 年 2 月

図書

日本福祉大学権利擁護研究センター監修　平野隆之、田中千枝子　他編「権利擁護がわかる意思決定支援:法と福祉の協働」中央法規出版,総頁数 176p,2018 年 6 月

福山和女、渡部律子「保健・医療・福祉専門職のためのスーパービジョン:支援の質を高める手法の理論と実際」ミネルヴァ書房,総頁数 392p,2018 年 6 月

大谷京子、田中和彦「失敗ポイントから学ぶ　PSW のソーシャルワークアセスメントスキル」中央法規出版,総頁数 139p,2018 年 3 月

湯原悦子、再非行防止サポートセンター愛知「再非行防止社会内サポート CCNC study club 報告書 2017」再非行防止サポートセンター愛知＆日本福祉大学スーパービジョン研究センター,総頁数 101p,2018 年 3 月
小西加保留 他「HIV/AIDS ソーシャルワーク— 実践と理論への展望—」中央法規出版,総頁数 346p,2017 年 11 月
救急認定ソーシャルワーカ—認定機構監修：小西加保留 他「救急患者支援 — 地域につなぐソーシャルワーク — 救急認定ソーシャルワーカー標準テキスト」へるす出版,総頁数 3p5,2017 年 9 月
日本医療社会福祉協会・日本社会福祉士会編集：小西加保留 他「保健医療ソーシャルワーク実践：アドバンスト実践のために」中央法規出版,総頁数 375p,2017 年 6 月
湯原悦子、再非行防止サポートセンター愛知「再非行防止社会内サポート CCNC study club 報告書 2016」再非行防止サポートセンター愛知＆日本福祉大学スーパービジョン研究センター,総頁数 101p,2017 年 4 月
福山和女監訳、田中千枝子責任編集『ソーシャルワーク・スーパービジョン 第 5 版』A.カデューシン&D.ハークネス著,日本福祉大学スーパービジョン研究センター発行,中央法規出版,総頁数 659p,2016 年 11 月
福山和女、田中千枝子責任編集『福祉・介護の支援人材養成・開発論−尊厳・自律・リーダーシップの原則−』,勁草書房,総頁数 245p,2016 年 8 月
汲田千賀子『認知症ケアのデリバリースーパービジョン−デンマークにおける導入と展開から−』中央法規出版,総頁数 246p,2016 年 6 月
湯原悦子、再非行防止サポートセンター愛知『再非行防止社会内サポート CCNC studyclub 報告書 2015』再非行防止サポートセンター愛知&日本福祉大学スーパービジョン研究センター,総頁数 520p,2016 年 2 月
佐藤彰一「日本の成年後見制度の現状と変革の方向−意思決定支援へのパラダイム転換に向けて−」草野芳郎・岡孝編『高齢者支援の新たな枠組みを求めて』白峰社,pp255−278,総頁数 520p,2016 年
田中千枝子「コミュニケーションの基本」『権利擁護支援と法人後見』全国権利擁護支援ネットワーク編,ミネルヴァ書房,pp103−114, 総頁数 189p,2015 年 12 月
佐藤彰一「権利擁護支援の基本」「意思決定支援と権利擁護」『権利擁護支援と法人後見』ミネルヴァ書房,pp3−18・19−36,総頁数 189p,2015 年 12 月

上田晴男「社会福祉援助技術Ⅰ 対象者の理解」『権利擁護支援と法人後見』ミネルヴァ書房,pp77-90,総頁数 189p,2015 年 12 月

福山和女「スーパービジョン」『スクールソーシャルワーク実践技術-認定社会福祉士・認定精神保健福祉士のための実習・演習テキスト』北大路書房,pp187-189,総頁数 353p,2015 年 12 月

野村豊子(日本社会福祉教育学校連盟監修)「序章・第 3 章」『ソーシャルワーク・スーパービジョン論』中央法規出版,pp3-41・119-156,総頁数 605p,2015 年 5 月

野村豊子(日本社会福祉士会)「スーパービジョンテキスト・特別寄稿」『日本社会福祉士会』pp78 -87,総頁数 101p,2015 年 4 月

照井孫久「6 章 3 節 社会福祉法人」「7 章 1 節 高齢者福祉」都築光一編著『福祉ライブラリ 現代の社会福祉』建帛社,総頁数 237p,2015 年 4 月

福山和女「事例分析方法」白澤政和・牧里毎治・宮城孝・福富昌城・岩田正美他編著『相談援助演習(MINERVA 社会福祉養成テキストブック)』ミネルヴァ書房,pp212-266,総頁数 268p,2015 年 3 月

原田正樹『地域福祉の基盤づくり-推進主体の形成-』中央法規出版,総頁数 244p,2014 年 10 月

原田正樹、岩間伸之、岩崎晋也『社会福祉研究のフロンティア』有斐閣,総頁数 246p,2014 年 10 月

照井孫久「支援者を育てる(スーパービジョン)」日本老年行動科学会監修『高齢者のこころとからだ事典』中央法規出版,総頁数 626p,2014 年 9 月

金圓景「韓国の社会福祉館における事例管理:ウォルゲ総合社会福祉館の祖孫世帯事例を中心に」 野口定久編『ソーシャルワーク事例研究の理論と実際;個別援助から地域包括ケアシステムの構築へ』 中央法規出版, pp347-356,総頁数 361p,2014 年 7 月

福山和女、小原眞知子監訳『統合的短期型ソーシャルワーク -ISTT の理論と実践』金剛出版,総頁数 296p,2014 年 6 月

学会発表

近田憲久、湯原悦子、高坂朝人「自立準備ホームに入所する少年が抱える困難とサポートの必要性」『日本司法福祉学会第 19 回全国大会』日本福祉大学東海キャンパス,2018 年 9 月

大谷京子「ソーシャルワークスーパービジョンスキル指標－個別スーパービジョンにおけるスーパーバイザーのスキル－」『日本社会福祉学会第 66 回秋季大会』金城学院大学,2018 年 9 月

小松尾京子「ケースカンファレンスにおけるスーパーバイザー機能に関する研究 2018－グループの活性化に着目して－」『日本社会福祉学会第 66 回秋季大会』金城学院大学,2018 年 9 月

大谷京子「ソーシャルワーカーの役割認識と自己規定の変遷－養成課程卒業後 3 年の PSW への経年インタビュー調査－」『日本ソーシャルワーク学会第 35 回大会』川崎医療福祉大学,2018 年 7 月

神林ミユキ「スーパーバイザーによるスーパービジョンに関する実践知の共有プロセス－スーパービジョン実践事例を用いた事例検討の逐語分析—」『日本ソーシャルワーク学会第 35 回大会』川崎医療福祉大学,2018 年 7 月

小松尾京子「ケースカンファレンスにおけるスーパーバイザーの役割意識に関する研究」『日本ソーシャルワーク学会第 35 回大会』川崎医療福祉大学,2018 年 7 月

二本柳覚「若手実践者のケアマネジメント技術習得に向けた研修会の試行 -ビフォーアフター形式の事例検討会の実施-」『日本ケアマネジメント学会第 17 回研究大会』北星学園大学,2018 年 5 月

照井孫久、野村豊子、本山潤一郎「主任介護支援専門員におけるスーパービジョン実践の評価モデル構築に向けての調査研究」『日本ケアマネジメント学会第 17 回研究大会』北星学園大学,2018 年 5 月

鈴木俊文「介護福祉士養成に求められる「福祉経営」「リーダーシップ」教育の検討 -キャリア形成過程における「経験的要素」の類型化を手がかりに-」『日本介護福祉教育学会』埼玉県,2018 年 2 月

高坂朝人、湯原悦子「自立準備ホームにおける少年の自立－支援スタッフによる評価の試み－」『日本更生保護学会第 6 回大会』コラッセふくしま,2017 年 12 月

大谷京子「精神保健福祉領域のソーシャルワーカーの認識の変化－養成課程卒業後 2 年の「自己規定」と「対象者観」－」『日本社会福祉学会第 65 回秋季大会』首都大学東京,2017 年 10 月

鈴木俊文、曽根允、田中千枝子「介護福祉士のキャリア形成プロセスにおける「新人指導」「研修」経験の意味－能力開発を支える研修・スーパービジョンモデルの開発に向けて－」『日本社会福祉学会第 65 回秋季大会』首都大学東京,2017 年 10 月

曽根允、鈴木俊文「研修受講効果の促進要因と阻害要因－福祉施設の研修担当者会議の結果分析から－」『日本社会福祉学会第 65 回秋季大会』首都大学東京,2017 年 10 月
山口みほ「スーパーバイザー研修修了者はスーパービジョンについてどう考え、何をしているか―アンケート調査自由記述の質的分析―」『第 65 回日本社会福祉学会秋季大会』首都大学東京,2017 年 10 月
二本柳覚「大学におけるケアマネジメント技術教育の効果に関する研究－受講者と非受講者の比較検討から－」日本社会福祉教育学会第 13 回大会,龍谷大学短期大学部,2017 年 9 月
高坂朝人、湯原悦子、近田憲久、渋谷幸靖、竹尾幸宣「少年の再非行をどのように防ぐのか　－元非行少年を交えた市民団体の実践から考える」『日本司法福祉学会第 18 回全国大会』國學院大学,2017 年 9 月
本間萌「「認知症予防普及・啓発リーダー養成講座」受講者の受講動機に関する検討」『第 18 回日本認知症ケア学会大会』沖縄県宜野湾市,2017 年 5 月
野村豊子「認定社会福祉士制度におけるスーパービジョン」『第 24 回日本社会福祉士全国大会』,松山市,2016 年 6 月
野村豊子「認知症ケアにおけるスーパービジョン」『第 17 回日本認知症ケア学会大会』,神戸市,2016 年 6 月
金圓景「地域における要介護者の家族支援デリバリシステムの現状と課題:老々介護世帯 A さんの事例を中心に」『第 17 回日本認知症ケア学会大会』,神戸市,2016 年 6 月
野尻紀恵、川島ゆり子「子どもの育ちを支えるソーシャルワーカーの学びあいプロセス(1)-CSW からとらえる SSW との連携プロセス視覚化の試み-」『日本福祉教育・ボランティア学習学会第 21 回やまぐち大会』,山口市(山口県立大学),2015 年 11 月 15 日
野尻紀恵、川島ゆり子「子どもの育ちを支えるソーシャルワーカーの学びあいプロセス(2)-SSW と CSW の学び合いによる連携プロセス明確化の試み-」『日本福祉教育・ボランティア学習学会第 21 回やまぐち大会』,山口市(山口県立大学),2015 年 11 月 15 日
小松尾京子、神林ミユキ、山口みほ、大谷京子「スーパービジョンにおけるスーパーバイザースキルの明確化の試み―スーパービジョン・セッションにおける逐語記録

の分析から」『日本社会福祉学会第 63 回秋季大会』,久留米市(久留米大学),2015 年 9 月 20 日

金圓景「「介護」から「ケア」へ:認知症者への「ケア」概念の検討」『日本社会福祉学会第 63 回秋季大会』,久留米市(久留米大学),2015 年 9 月

小松尾京子「スーパーバイザーとしての成長に関する取り組み-主任介護支援専門員へのグループスーパービジョンを題材に-」『第 23 回日本社会福祉士会全国大会』金沢市,2015 年 7 月 5 日

平野隆之「コミュニティ再生と地域包括ケアシステム-地域福祉にとっての PUSH と PULL」『日本地域福祉学会第 29 回全国大会(招待講演)』仙台市(東北福祉大学),2015 年 6 月 20 日

野尻紀恵、川島ゆり子「地域を基盤とした福祉と教育の連携の可能性」『日本地域福祉学会第 29 回全国大会』),仙台市(東北福祉大学),2015 年 6 月 21 日

平野隆之「社会福祉をとらえる総合化の論点」『日本社会福祉学会第 63 回春季大会(招待講演)』,東京都千代田区(法政大学),2015 年 5 月 31 日

引野好裕、汲田千賀子「ユニットリーダーが職員から受ける相談とその応答に関する実態調査」『第 16 回日本認知症ケア学会大会』,札幌市,2015 年 5 月

浅野正嗣、山口みほ「保健・医療領域におけるソーシャルワーク・スーパービジョンの現状と課題(1)—スーパーバイザーが扱う内容とその困難」『日本社会福祉学会第 62 回秋季大会』,東京都新宿区(早稲田大学),2014 年 11 月 30 日

山口みほ、浅野正嗣「保健・医療領域におけるソーシャルワーク・スーパービジョンの現状と課題(2)—スーパーバイザーに認識されたスーパービジョンの内容と成果」『日本社会福祉学会第 62 回秋季大会』,東京都新宿区(早稲田大学),2014 年 11 月 30 日

大谷京子、田中和彦、寺澤法弘、吉田みゆき「アセスメントプロセスに活用するスキルの検討-クライエントの主観に焦点を絞って-」『日本社会福祉学会第 62 回大会』,東京都新宿区(早稲田大学),2014 年 11 月 30 日

小松尾京子「実習指導者による実習スーパービジョンの課題-社会福祉士実習指導者講習会受講者の調査から-」『日本社会福祉教育学会』鹿児島県霧島市,2014 年 8 月

金圓景「異なる視点から寄り添うことで繋がる支援:認知症の人と家族」『日本家族看護学会第 21 回大会』,岡山市,2014 年 8 月

小松尾京子「成長を促す「スーパーバイジー体験」のための具体的方法論の模索-主任介護支援専門員とのグループスーパービジョンを題材に-」『第 22 回日本社会福祉士会全国大会』,鹿児島市,2014 年 7 月

福山和女「超高齢化社会と家族支援」『家族研究・家族療法学会第 31 回大会』,神戸市,2014 年 7 月

大谷京子、田中和彦「ソーシャルワークアセスメントスキル—エキスパート面接ロールプレイからの抽出—」『日本ソーシャルワーク学会第 31 回大会』,名古屋市(日本福祉大学),2014 年 6 月 22 日

野尻紀恵「災害時スクールソーシャルワークと地域の立ち上がり-甚大な水害被害に遭った学校の再開に向けた支援記録の検証-」『日本地域福祉学会第 28 回大会』,松江市(島根大学),2014 年 6 月

来島修志「介護スタッフに対する回想法指導教育の効果と課題-回想法リーダー自己チェックシートの活用-」『第 15 回日本認知症ケア学会大会』,東京都千代田区,2014 年 6 月

8　資料

日本福祉大学
スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

資料

・スーパービジョン研究記念フォーラム　案内
・「スーパービジョン イン ソーシャルワーク第５版」翻訳出版記念セミナー　案内
・研究成果報告セミナー　～スーパービジョン研究センターの５年の成果を振り返る～　案内

日本福祉大学 スーパービジョン研究センター
開設記念フォーラム

日本福祉大学
スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

重層的スーパービジョンのシステム構築を目指して

このたび日本福祉大学はスーパービジョン研究センターを設立します。対人支援専門職を育成・輩出している大学として、支援職がさらなる成長を遂げ社会に対して支援の質を担保することに貢献することは重要な研究課題です。現代の社会問題は困難性・多面性が増し、当事者のニーズも複合化し制度では解決できない課題が増えています。そのことにより支援者は支援そのものに困惑・疲弊している現状にあります。そうした支援者に対して支援を行う方法論にスーパービジョンがあり、近年様々なヒューマンケアの領域で大きく注目を集め、制度化も進んでいます。しかし従来のスーパービジョンは徒弟制度や職人芸のように同職種（ホモ）で専門性の深みを目指して、ミクロの閉じたシステムで実行されていることが多かったと思われます。

そこでスーパービジョン研究センターでは、研究対象をすべての対人支援ヒューマンケアに拡大し、①異職種（ヘテロ）型の展開を許容し、②理論研究と実践・応用研究を循環的に統合し、③ミクロにとどまらない組織や地域といったメゾを含む重層的で持続的なスーパービジョンシステムを構築することを目指します。この 3 点を踏まえ現代の「支援者への支援」に合致したスーパービジョンの再定義・再理論化、さらに新たなる研究方法の開発に取り組むとともに、スーパーバイザー養成を可能とする仕組みや機能の一部を担う研究拠点にすることを目指しています。開設フォーラムでは、そうした方向を紹介するとともに、研究者・実践者の皆様と討論していきたいと思います。

日　時　**2014 年 4 月 20 日 日　13：30 ～ 16：30**
（受付開始 13：00 ～）

場　所　**日本福祉大学名古屋キャンパス北館 8F**
名古屋市中区千代田 5-22-35（JR・地下鉄「鶴舞」駅下車）

プログラム

● **基調報告**　（13：35 ～ 14：00）

「スーパービジョン研究センターの研究方向とねらい」

田中千枝子 センター長（日本福祉大学社会福祉学部 教授）

● **シンポジウム**　（14：00 ～ 15：20）

「スーパービジョンの重層的研究プロジェクトの進め方」

- 概念・研究枠組　田中千枝子（社会福祉学部 教　授）
- ソーシャルワーク　大谷　京子（社会福祉学部 准教授）
- ソーシャルケア　野村　豊子（大　学　院 教　授）
- 権利擁護支援　湯原　悦子（社会福祉学部 准教授）
- 法人マネジメント　山内　哲也（大学院実務家 教　員）

コーディネーター　平野　隆之（社会福祉学部 教　授）

● **対　談**　（15：30 ～ 16：30）

「スーパービジョン研究センターに期待するもの」

福山　和女（ルーテル学院大学総合人間学部 教授）
平野　隆之（日本福祉大学社会福祉学部 教授）

申込方法

以下のいずれかの方法でお申し込みください。　入場無料。　締切 4/17（木）。

●ホームページでのお申し込み

日本福祉大学のホームページ（イベント情報）よりお申し込み下さい

● FAX でのお申し込み

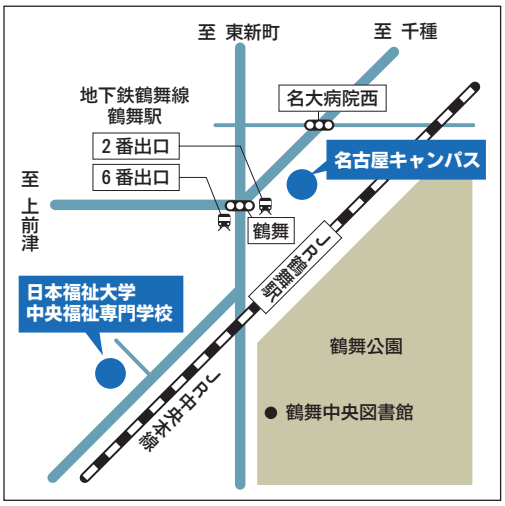
下記の参加申込書に必要事項を記入の上、FAX にてお申し込み下さい

- お申し込みの方に、本学よりメールもしくは FAX にて受付完了のご連絡をいたします。
- 「参加受付票」等の送付はいたしません。当日直接会場にお越し下さい。
- 但し、定員に達し次第、締め切らせていただきます。

会場案内

日本福祉大学
名古屋キャンパス北館 8F

〒 456-0036　名古屋市中区千代田 5-22-35
● JR・地下鉄「鶴舞」駅　下車 徒歩 5 分



主催
日本福祉大学
スーパービジョン研究センター
TEL：052-242-3075
FAX：052-242-3076

参加申込書：日本福祉大学スーパービジョン研究センター開設フォーラム
FAX：052-242-3076

（フリガナ） 氏　　名	
所属・職種	＜所属・勤務先＞　　＜職　種＞
ご 連 絡 先	〒 TEL：　　FAX： メール：

日本福祉大学 スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

『スーパービジョン イン ソーシャルワーク 第５版』

翻訳出版記念セミナー

A. カデューシンによる「スーパービジョン　イン　ソーシャルワーク　第５版」が出版されました。当スーパービジョン研究センターの基盤事業として、センター顧問福山和女先生の監修のもと、２年間にわたり作業を続けた労作です。半世紀にわたりスーパービジョン研究の第一人者でありつづけたカデューシンの研究成果は、現在の日本における支援人材の養成開発の方法論に関して、有効な提言に満ちています。そこで今回出版記念セミナーを開催し、カデューシンのスーパービジョンをともに学び体験することを企画しました。基調講演・報告とともに、カデューシンのスーパービジョンを演習形式で行います。どうぞ奮ってご参加いただきますようにお願いします。

日時：2017 年 3 月 26 日（日）　10：00 － 16：00

場所：日本福祉大学名古屋キャンパス８階

定員：100 名　（先着順）

参加費：無料

※当日は「スーパービジョン イン ソーシャルワーク　第５版」の販売もございます。

主催
日本福祉大学スーパービジョン研究センター
〒 460-0012　愛知県名古屋市中区千代田 5-22-35
問い合わせ先：TEL：052-242-3075 FAX:052-242-3076
MAIL：supervision-entry@ml.n-fukushi.ac.jp

3月26日「スーパービジョン イン ソーシャルワーク」翻訳出版記念セミナー

プログラム

9：30　受付開始

10：00 － 10：10　開会挨拶

10：10 － 11：00　基調講演　福山和女 先生

（ルーテル学院大学名誉教授

スーパービジョン研究センター顧問）

「カデューシンのスーパービジョンを訳して」

11：15 － 12：45　報告「カデューシンのスーパービジョン　3機能を中心に」

管理運営的機能：田中千枝子

（日本福祉大学教授

スーパービジョン研究センター長）

教育的機能：大谷京子（日本福祉大学准教授）

支持的機能：山口みほ（日本福祉大学准教授）

13：45 － 15：50　演習：カデューシンのスーパービジョンを体験する

15：50 － 16：00　閉会挨拶

申し込み方法

FAX 先 :052-242-3076

以下の参加申込書に必要事項を記入の上、上記 FAX にてお申し込みください。また、日本福祉大学ホームページのスーパービジョン研究センターホームページからも WEB エントリーできます。（大学ホームページ　2月8日イベント情報から申し込みページに移動できます。）

フリガナ 参加者氏名	
所属・職種	所属　　職種
ご連絡先	〒 TEL:　　FAX: Email:

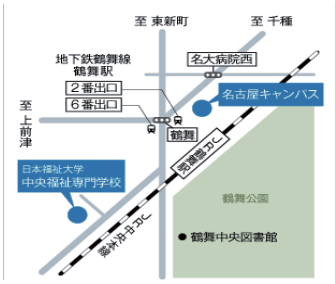
会場

日本福祉大学名古屋キャンパス　8階

〒460-0012 名古屋市中区千代田5－22－35

※会場に駐車場はございません。

公共交通機関をご利用ください。



日本福祉大学 スーパービジョン研究センター
Research Center for Supervision

研究成果報告セミナー

～スーパービジョン研究センターの５年の成果を振り返る～

スーパービジョン研究センターは、2014 年度に文部科学省私立学大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受け、日本福祉大学に設置されました。

この５年間で、多彩なヒューマンケアの分野において、対人支援に携わる様々な立場の人への教育的・支持的・管理運営的な支援策としてのスーパービジョンが、脚光を浴びるようになってきました。またスーパービジョンにより、それぞれの「支援」の専門性に基づいて、実践の振り返り確認やシステム・体制開拓、そしてそれらの理論化に寄与する研究や教育活動が進められてきました。

その流れの中で当研究センターも、皆様の研究協力をもって、全国の研究および実践体制の充実・強化に寄与してきたと自負しております。またこれらの成果をもって、今後の日本福祉大学スーパービジョン研究センターとしての諸活動の発展展開を図っていきたいと思っております。

そこで５年の研究活動の成果を振り返り、そしてその成果を皆様とともに実際に確認しあうことで、新たな今後のセンターの研究活動の源といたしたく、セミナーを開催いたします。ぜひ今までの研究成果を参加者の皆様と共有し、今後の研究の方向性についてお互いに検討する場となりますよう、積極的な参加をお願い申し上げます。

日時：2019 年 3 月 21 日（木・祝）
　　10：00 － 16：30（受付開始：9：30）

場所：日本福祉大学名古屋キャンパス８階

定員：80 名　（先着順）

参加費：無料

主催
日本福祉大学スーパービジョン研究センター

プログラム

10：00 － 10：20　開会挨拶：田中千枝子（日本福祉大学スーパービジョン研究センター長）

10：20 － 12：00　各班研究成果報告

報告者：田中千枝子（日本福祉大学社会福祉学部教授）

大谷京子（日本福祉大学社会福祉学部教授）

野村豊子（日本福祉大学スーパービジョン研究センター研究フェロー）

湯原悦子（日本福祉大学社会福祉学部教授）

13：00 － 16：00　ワークショップ　スーパースーパービジョン実践

ソーシャルワーカーに対するスーパースーパービジョン：

スーパーバイザー：福山和女

（日本福祉大学スーパービジョン研究センター研究フェロー）

高齢者領域におけるスーパースーパービジョン：

スーパーバイザー：野村豊子

（日本福祉大学スーパービジョン研究センター研究フェロー）

（事例内容・スーパーバイザーは変更の可能性があります。）

16：00 － 16：30　まとめ・閉会挨拶

申し込み方法

①日本福祉大学ホームページからお申し込みください。

日本福祉大学（http://www.n-fukushi.ac.jp）⇒　研究活動　⇒　お知らせ

②右側の申し込みフォーム QR コードからもお申し込みいただけます。

申し込み期限：2019 年 3 月 14 日（木）

問い合わせ先

日本福祉大学スーパービジョン研究センター

TEL：052-242-3078

FAX：052-242-3076

Mail：rcs@ml.n-fukushi.ac.jp

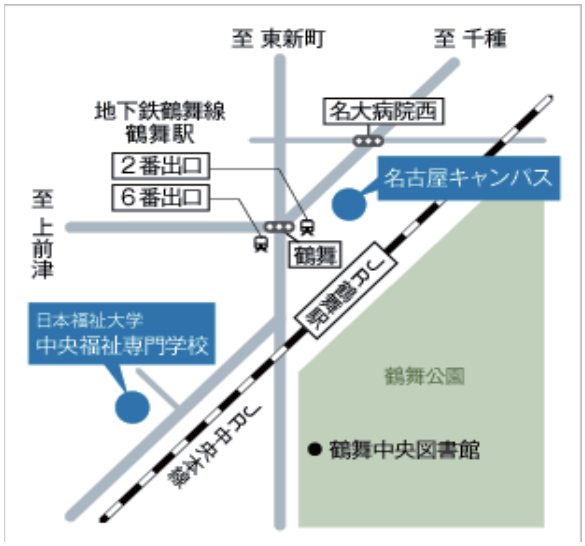
会場

日本福祉大学名古屋キャンパス　8 階

〒 460-0012 名古屋市中区千代田 5 － 22 － 35

※会場に駐車場はございません。

公共交通機関をご利用ください。



平成 26 年度～平成 30 年度　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
ヒューマンケアにおける重層的スーパービジョンのシステム構築　研究成果報告書

発行　：日本福祉大学スーパービジョン研究センター
発行日：令和元年 5 月